飯山市埋蔵文化財調査報告　第11集

長野県飯山市

長者清水・水の沢遺跡

昭和59年度県営圃場整備事業温井地区発掘調査報告

1985・3

飯山市教育委員会

飯山市埋蔵文化財調査報告　第11集

長野県飯山市

長者清水・水の沢遺跡

―――― 昭和59年度県営圃場整備事業温井地区発掘調査報告 ――――

1985・3

飯山市教育委員会

口絵

1　珠洲系陶器　壺

（14Ｃ前）

2　中国陶磁

上段左　黒釉壺（14Ｃ）
　　右　青磁碗（14Ｃ後）

中段左　青磁鉢（14Ｃ後）
　　右　白磁小皿（15～16Ｃ）

下段左　青磁碗（14Ｃ後）
　　中　青磁碗（15～16Ｃ）
　　右　青磁蓮弁文碗（15Ｃ）

3　国内産陶磁

上段左　美濃鉄釉小皿（15Ｃ）
　　中　瀬戸灰釉平碗（15Ｃ）
　　右　瀬戸灰釉御皿（14Ｃ）

中段左　天目茶碗（15Ｃ）
　　右　瀬戸灰釉壺（15Ｃ）

下段左　青磁碗（中国陶磁）（14Ｃ）
　　中　瀬戸灰釉小鉢（14Ｃ末～15Ｃ前）
　　右　瀬戸灰釉仏華瓶（14Ｃ）

1

2

3

4

4　天目茶碗（15Ｃ）

（瀬戸系もしくは中国産）

序

飯山市教育委員会教育長　浦野昌夫

昭和59年度、温井地区県営圃場整備事業が着工されることにあたり、北信地区改良事務所長より、同地域内に存在する長者清水及び水の沢遺跡の発掘調査事業委託の依頼を受けました。

飯山市教育委員会では、文化財保護の立場からこれを受託することにし、飯山南高等学校教諭高橋桂先生を団長にお願いして調査団を編成しました。

発掘調査は６月２日より７月17日まで約１ケ月半を費やして実施されたわけですが、この間高橋団長を始め調査委員各位、地元老人クラブの方々の献身的な努力によって順調に進歩し、平安時代の住居址等貴重な遺構や遺物が数多く検出されました。

この報告書が当地方の古代生活を知るうえで貴重な文献となると共に、北信濃地方の考古学に寄与する事多大であると信ずるものであります。

最後に、この発掘調査にあたってご協力いただきました北信土地改良事務所をはじめ地元の関係者の皆様方に対し深く感謝申しあげて序といたします。

昭和60年２月15日

例　言

1　本書は、県営圃場整備事業温井地区昭和59年度工区施工に伴う、埋蔵文化財長者清水、水の沢両遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2　長者清水遺跡は飯山市大字一山字北村1030番地等、水の沢遺跡は大字一山水の沢1481番地等に所在する。

3　調査は、北信土地改良事務所の委託金並びに国庫補助事業補助金を受け、飯山市教育委員会が事業主体となって実施したものである。

4　発掘調査は、昭和59年６月２日より７月17日まで行なった。調査にかかる組織は第II章第１節に記した。
本書の作成は、団長指導のもとに調査員全員があたった。なお、図版作成、原稿浄書については青木真澄が主体となって行なった。

5　本書の編集は主として望月静雄が行ない高橋桂が総括した。

6　本書作成にあたっては下記の方々に格別なる御指導をいただいた。記して感謝申し上げます。　（五十音・敬称略）

池田正明（瀬戸市史編纂委員会）、井上喜久夫（愛知県陶磁資料館）、大原正義（君津郡市埋蔵文化財センター）、小高春雄（千葉県埋蔵文化財センター）、桐原健（県史刊行会）、斎藤孝正（名古屋大学文学部考古学助手）、斎藤二六（元飯山市文化財専門委員）、仲野泰裕（愛知県陶磁資料館）、中野錬次郎（珠洲市文化財保護審議委員）、野澤則幸（名古屋市見晴台考古資料館）、西野秀和（石川県立埋蔵文化財センター）、樋口昇一（県史刊行会）、平出紀雄（名古屋市見晴台考古資料館）、宮下健司（県史刊行会）、吉岡康暢（石川県立郷土資料館）、四柳嘉章（石川県立中島高等学校）

本　文　目　次

口絵
序
例言

第Ⅰ編

第Ⅰ章　環　境……1
　第1節　遺跡の位置……（高沢秀徳）…1
　第2節　歴史的環境……（高橋　桂）…3
第Ⅱ章　経　過……7
　第1節　調査に至るまでの経過……（小川恵一）…7
　第2節　調査日誌……（望月静雄）…8
　第3節　調査概要……（望月静雄）…11
　　1、調査の方法　2、調査区の概要
第Ⅲ章　遺　構……（望月静雄）…17
　第1節　平安時代の遺構……17
　第2節　中世の遺構……21
　　1、土壙　2、竪穴遺構　3、掘立柱建築址　4、柱穴群　5、濠址　6、溝址
第Ⅳ章　遺　物……（望月静雄）…42
　第1節　平安時代の遺物……42
　　1、土師器　2、須恵器　3、灰釉陶器
　第2節　中世の遺物……47
　　1、土器　2、鉄製品　3、石製品　4、銭貨
　第3節　遺物小括……59
　　1、平安時代の遺物について　2、珠洲系陶器の編年位置について
第Ⅴ章　総　括……（高橋桂）…61

第Ⅱ編

第Ⅰ章　遺跡の位置……（望月静雄）…65
　第1節　遺跡の位置……65
　第2節　研究史……65
第Ⅱ章　調　査……（望月静雄）…65
　第1節　経過……65
　　1）A地区　2）B地区　3）C・D地区
　第2節　遺物……69
第Ⅲ章　まとめ……（望月静雄）…69

表　目　次

第1表　平安時代柱穴一覧表……20
第2表　渡来銭一覧表……56
第3表　土器計測表……58

挿　図　目　次

第Ⅰ編　長者清水遺跡
第1図　遺跡位置図……1
第2図　遺跡位置図（1：50.000）……2
第3図　周辺遺跡分布図（1：25.000）……4

第４図　周辺地字図（1：25.000）……5
第５図　遺跡の地形及び調査区（1：1.000）……11
第６図　グリット設定図（1：1.000）……12
第７図　出土遺構全体図（1：600）……13
第８図　D・G区遺構配置図（1：200）……14
第９図　H－Ⅰ区遺構配置図（1：200）……15
第10図　H－Ⅱ区遺構配置図（1：200）……16
第11図　平安時代の遺構配置図（1：80）……17
第12図　第１号住居址遺物分布図（1：40）……18
第13図　第１号住居址（1：60）……19
第14図　第１号土壙（1：40）……20
第15図　土壙　（1）（1：20）……22
第16図　土壙　（2）（1：40）……23
第17図　土壙　（3）（1：40）……25
第18図　土壙　（4）（1：40）……27
第19図　竪穴遺構（1：60）……29
第20図　第１号掘立柱建築址（1：80）……30
第21図　第２号掘立柱建築址（1：80）……31
第22図　第１柱穴群（1：120）……32
第23図　第２、３、４柱穴群（1：80）……33
第24図　第５柱穴群（1：80）……35
第25図　第６柱穴群（1：80）……36
第26図　第３号掘立柱建築址、第７柱穴群（1：80）……37
第27図　第３号掘立柱建築址断面図（1：80）……38
第28図　濠遺物分布図・平面図（1：150・1：300）40
第29図　平安時代の遺物（1）（1：3）……43
第30図　平安時代の遺物（2）（1：3）……44
第31図　平安時代の遺物（3）（1：3）……46
第32図　中世の土器１（土師器、陶磁器、内耳土器）（1：3）……48
第33図　中世の土器２（珠洲系陶器１）（1：3）…49
第34図　中世の土器３（珠洲系陶器２）（1：3）…50
第35図　中世の土器４（珠洲系陶器３）（1：3）…51
第36図　鉄製品（1：2）……53
第37図　鉄・石製品（1：2）……55
第38図　石製品（1：5）……56
第39図　銭貨（1：1）……57
第Ⅱ編　水の沢遺跡
第40図　調査区　（1：2000）……66
第41図　A地区　（1：300）……67
第42図　B地区　（1：300）……68
第43図　水の沢・オリハンザ遺跡遺物（2：3）……70

写　真　図　版

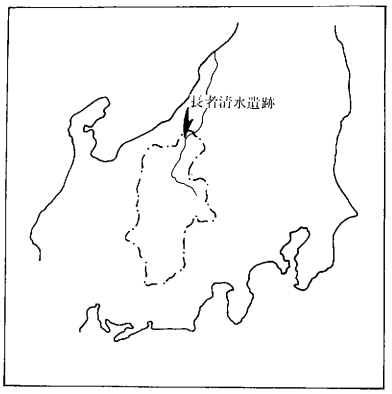
長者清水遺跡
図版１　1　長者清水・水の沢遺跡周辺地域航空写真
〃　2　2　遺跡近景
3　調査区近景
図版３　4　遺跡より関田峠を臨む
5　調査風景
図版４　6　第１号住居址
7　第１号住居址
図版５　8　第２号土壙
9　第７号土壙
10　第８号土壙
図版６　11　第９号土壙
12　第10号土壙
13　第14号土壙
図版７　14　第16号土壙
15　第18号土壙
16　第21号土壙
図版８　17　竪穴遺構
18　竪穴遺構
19　竪穴遺構刀子出土状態
図版９　20　第２号掘立柱建築址
21　第３号掘立柱建築址
図版10　22　濠址北コーナー
23　H－Ⅱ区南側斜面
図版11　24　H－Ⅰ区遺構
25　H－Ⅱ区遺構
図版12　26　土師器坏
27　土師器坏
28　土師器坏
29　土師器坏
30　墨書土器
31　墨書土器
32　灰釉陶器
33　灰釉陶器
図版13　34　中世土師器皿
35　珠洲系陶器壺
35　珠洲系陶器壺
37　珠洲系陶器片口鉢
図版14　38　珠洲系陶器
39　陶磁器
図版15　40　鉄製品
41　鉄製品
図版16　42　石製品
43　銭貨
水の沢遺跡
図版17　44　遺跡近景
45　調査区近景
図版18　46　A地区調査風景
47　A地区
図版19　48　B地区調査風景
49　B地区

第Ⅰ編　長者清水遺跡

第Ⅰ章　遺跡概観

第１節　地理的位置及び環境

長者清水・水の沢両遺跡は、長野県の北部に位置する飯山市でも北端にある岡山地区温井に存在する。千曲川と犀川の合流点である長野市（善光寺平）から千曲川に沿って30km程北に飯山盆地（標高320m）がある。当盆地最北部から千曲川下流にかけて台地状の地形に切り替わるが、その台地上（標高500m)に今回発掘した遺跡があり、両方合わせて1000㎡余りを対象とし調査したものである。



第１図　遺跡位置図

当地東側を流れる千曲川を境として野沢温泉村、西側に走る関田山脈をへだてて新潟県、北側では両岸山地が千曲川にせまり谷を形どって栄村に、それぞれ接している。とくに千曲川の下流、新潟県津南町にかけての一帯は、地質時代に平地であったものが、後に地殻変動により急激に隆起し、千曲川が下刻侵食を行いながらつくりあげた峡谷として知られ、現在でも隆起を続けているとされている。それを示しているのが、流域各所にみられる河岸段丘である。

この千曲川に流れ込む運上川（今井川）の源流である鍋倉山（標高1288m）の東麓台地上にある両遺跡の周辺は、標高450～700mのなだらかで広大な地形を提供している。

鍋倉山は、関田山脈でも斑尾山（標高1382ｍ）に次ぐ第２の高峰として周知されており、形状がトロイデ型の古代火山である。遺跡地はこの鍋倉山の溶岩台地上にあって、この台地が「鍋倉第五溶岩台地」といわれ、小高い末端部には飯山盆地では見られない白樺の木が所々に認められる。

また、遺跡より約30m西側上段に温井集落があり、ここが第四溶岩台地である。さらに約100m上ると田茂木平という地名の第三溶岩台地がある。これより約60m上るとかつてのムジナ池跡の第二溶岩台地となっている。

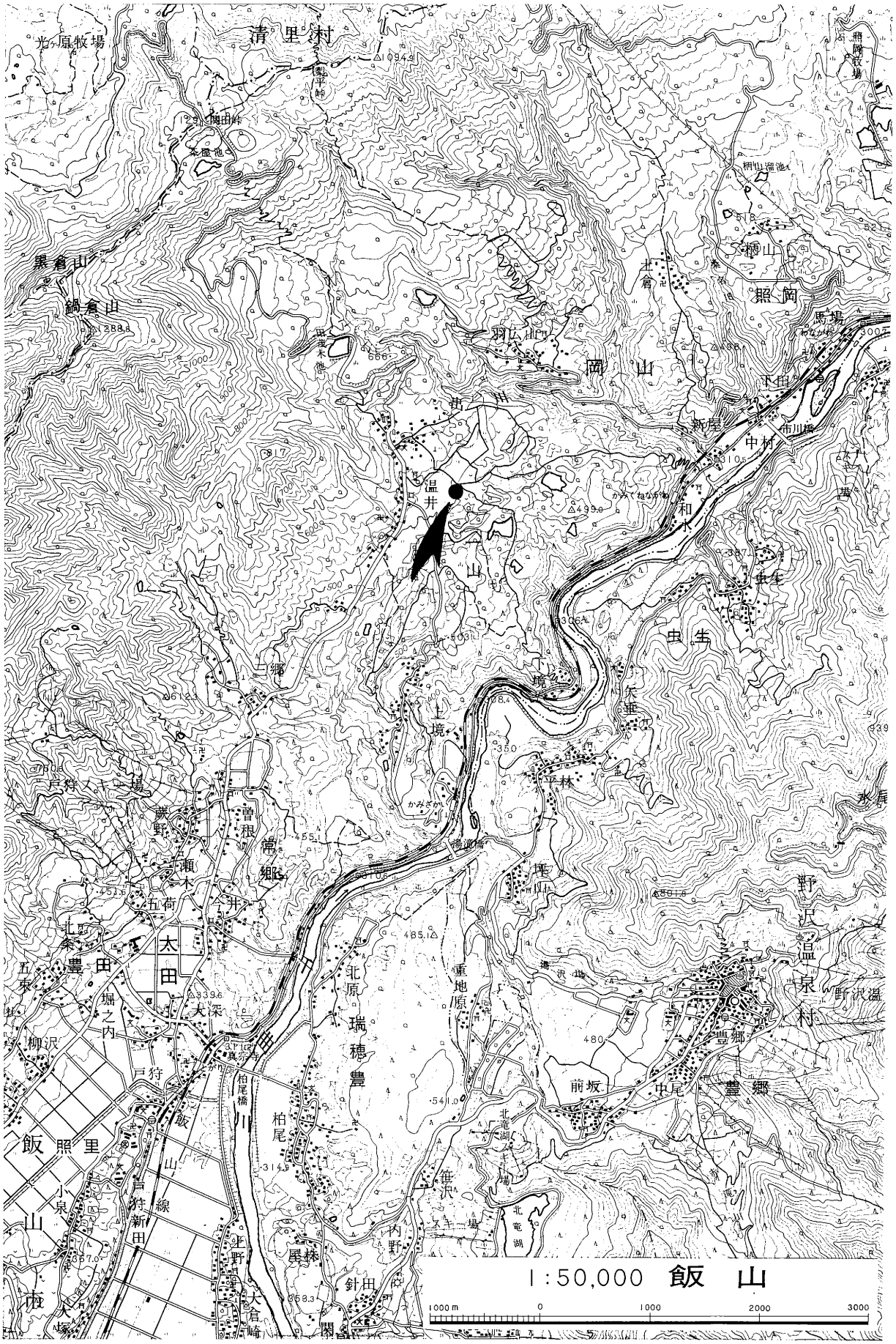
火口から流出した溶岩流が冷却する時に末端がふくらんで少し高くなり、その内側がやや低く凹みを生じている。鍋倉溶岩台地もそれぞれ末端に同様な凹地が存在している。遺跡地のそれは田に、その他は畑地として利用耕作されている。

関田山脈の長野県側の大部分は、厚い火山岩層によっておおわれ、山麓台地の地層は侵食に対して抵抗の小さい軟弱な様相を示す。

関田山脈から千曲川に流下する河川は、いずれも標高1000mの山地からわずか数kmで標高300mの千曲川沿岸低地に至るので、河川勾配が急な点も特徴の１つである。そのため、侵食が進み深いＶ字形の渓谷をつくっている。

温井とその北側にある羽広山という集落の間にある川倉谷は、その典型的な渓谷で深さ120mにも及び両岸も急崖で谷を越えるのに20分もかかるという。

関田山脈の基盤は３紀層とされ、頂上はおおむね1000mを示すが、全体として急峻ではなくいくつかの峠道によって新潟県頸城地方との往来があった。とくに、近世代まではこれら峠道が新潟からの塩・米・魚・酒かす等が、



第２図　遺跡位置図（１：50,000）

長野からは内山紙・箕等が運ばれ、中でも関田峠（温井から越後関田へ）と牧峠（柄山・土倉から同牧村へ）は重要な塩の輸送路だったとされている。また、新潟から野沢温泉にやってくる湯治客も関田峠を越え、温井を通って千曲川を舟で渡っていったという。

古来より千曲川沿いには新潟県十日町へ通じる「十日町街道」が開けており、北信一帯の主要道路の１つとなっていたが、この十日町街道を軸に関田山脈越えの峠道が何本も形成されていた。十日町街道は温井で標高500mに達し、ここを頂点に再び千曲川の谷へ下りていくが、温井から峠越えが二街道（関田峠、洞方峠＝温井から洞方）分岐していることをみても温井は峠越えの宿駅的役割を担った重要地点といえよう。

気候

温井の気候は裏日本型で、冬季の多雪が特色である。夏季は日中が高温となるものの夜間から夜明けにかけて、かなり涼しくなり内陸性特徴も合わせもっている。

飯山盆地は古くから多雪地帯として知られているが、大陸からの北西季節風をまともに受ける関田山脈一帯は、我国屈指の豪雪地帯となっている。例えば、千曲川河岸の上境で360cmのとき、温井では420cm、隣の羽広山で440cmにも及ぶ。

鍋倉山から吹きおろす吹雪も、言葉でいい現わせない程強烈だという。顔に当たる雪は棒で叩かれたような痛みを感じさせ、正面から吹雪を受けると呼吸もできないという。そのため、家の構造として吹雪の吹きつける北西側に窓を１つも設けない家や設けてもできるだけ小さい窓にするといったように、寒さに直撃されるのを防ぐ工夫をしている。

根雪が消え、土が顔を出すのが４月中旬、遅い年には５月上旬となる。千曲川の谷より１週間から10日遅いのが例年のようである。

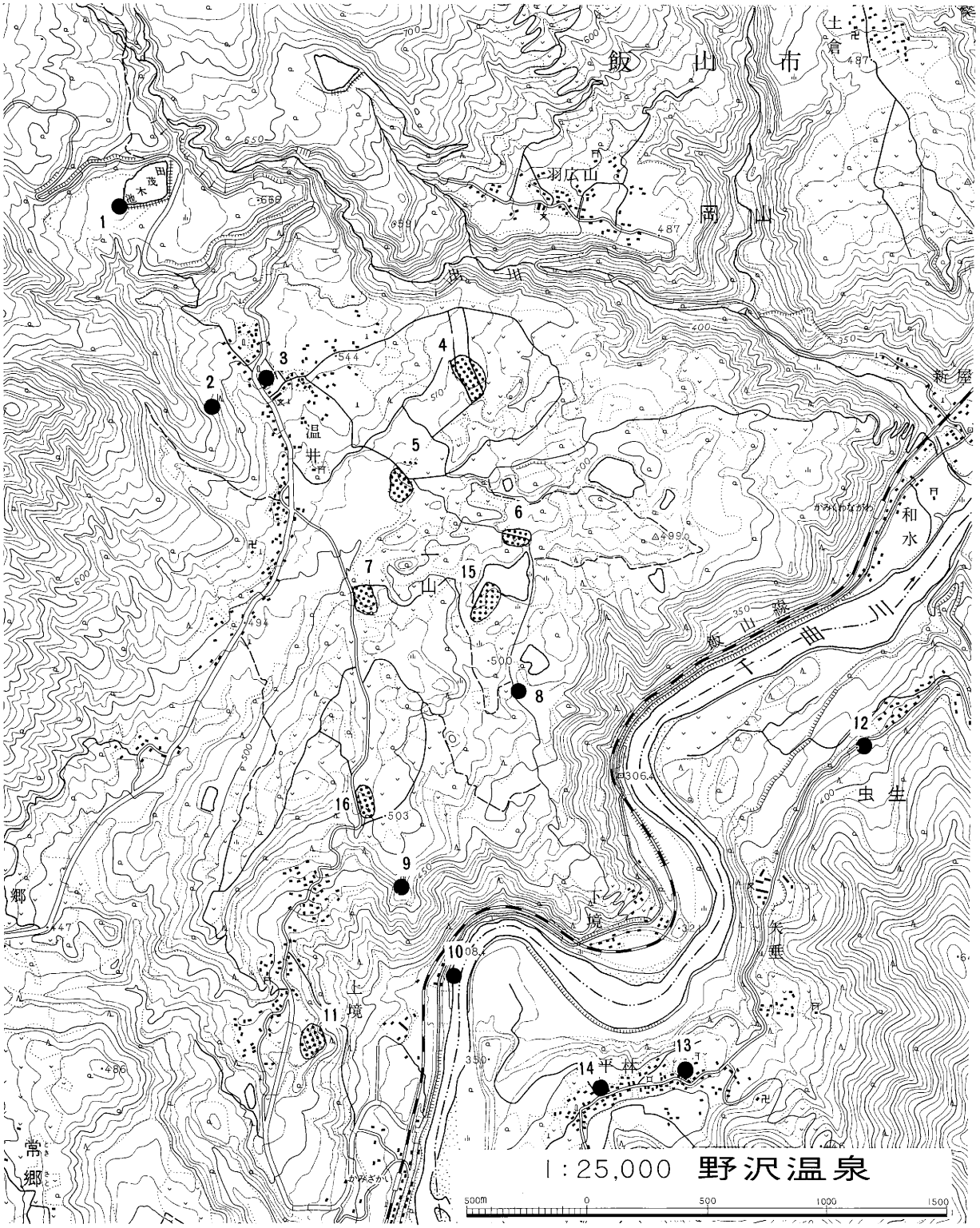
第２節　歴史的環境

温井の台地に人類の足跡が刻まれたのは、先土器時代の末項であった。昭和30年（1955）、麻生優、樋口昇一両氏が温井在住の郷土史家北条耕作氏採集遺物の中にマイクロリスとポイントがあることを指摘されたのであった。これがオリハンザ遺跡が世に出る契機となったのである。

ところでオリハンザ遺跡は、北条耕作氏が死去されて以来、地点が不明であったが、今回の一連の調査を通じてようやく確められるにいたった。しかしながら調査の結果は、かつての水田造成工事によってその大部分が破壊されてしまっていた。更に今回の大規模圃場整備によって完全に消滅してしまったのである。この他に先土器時代の遺跡としては上の原遺跡がある。温井台地の続きで中外部落東方の小台地上に位置している。飯山北高等学校地歴部によって尖頭器、掻器が採集されている。そのほかにも２、３先土器時代の遺跡が存在するようであるが、明確ではない。今後の調査に期待したい。

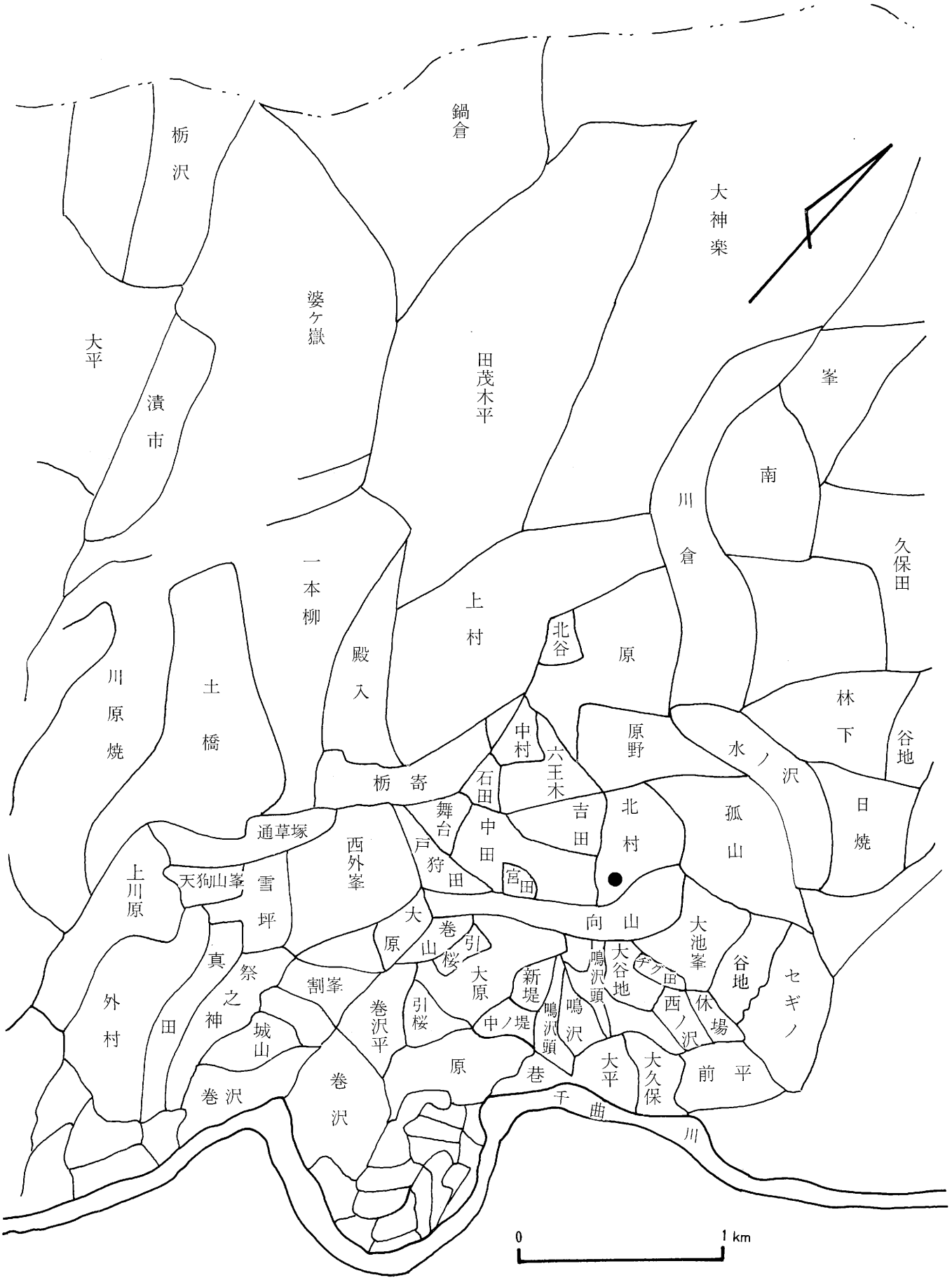
縄文時代早期、前期の遺構としては、鳴沢頭があげられる。押型文土器、南大原式、下島式等の前期後半期の土器や石鋸が出土している。かつて桑名川の医師渡辺喜平次氏が、この遺構を丹念に歩かれてこれらの遺物を採集された。それを藤森栄一氏が「信濃下水内郡鳴沢頭の土器及び石鋸」と題して史前学雑誌に資料紹介された（1934）。向原遺跡も押型文土器、南大原式、下島土器を出土することでしられている。更にカツボ池でも押型文土器が採集されている。また対岸の虫生跡でも押型文土器が採集されている。

縄文中期にいたると千曲川右岸の下高井郡野沢温泉村平林Ａ遺跡があげられよう。野沢温泉村史資料採集のため立正大学教授坂詰秀一氏が発掘調査を行い中期後半の土器、土偶、石皿、磨製石斧、打製石斧、石鏃等多種多



1．田茂木平　2．温井城　3．番所跡　**4．水の沢（オリハンザ）**　**5．長者清水**
6．カツボ池上　7．向原　8．鳴沢頭　9．上境城　10．上境渡船場　11．上の原
12．虫生　13．平林B　14．平林A　15．カツボ池　16．中外

第3図　周辺遺跡分布図（1：25,000）



第４図　周辺地字図（１：25,000）

様な遺物を検出された。千曲川をはさんで温井台地の対岸にあたっている。先にあげた鳴沢頭、向原、オリハンザ、上の原の各遺跡にも中期中半から後半にわたる土器が出土している。更に注目しておかなければならないのは、中、近世越後への交通路として盛んに利用されたという関田峠直下の茶屋池付近(海抜1000m)でも中期後半の土器が採集されていることである。採集者がすでに故人となられているためのに地点が判然としないのは甚だ残念である。このような例は関田峠の北東方の野々海池付近でも知られており、縄文中期における越後との文化交流を考える上で重要となるであろう。今後、関田山脈を走る幾つかの峠道を詳細に調査すれば案外面白い事例を得る可能性があろう。

縄文後期に入ると温井台地では、鳴沢頭で若干後期前半の土器が採集されているだけで皆無に近い状態となる。対岸平林A遺跡や温井台地北東にあたる桑名川東原遺跡では後期前半の土器が比較的まとまって出土している。この二遺構はいずれも千曲川沿いに存在しており、縄文中期から後期にいたると生業の変化が生じたことを私達に示しているといえよう。市川谷と称される地域は、縄文後期までは濃淡の差こそあれ、人々の生活の舞台となったが晩期にいたると全くといってよいほど姿を消し去ってしまうのである。そしてこの傾向は弥生時代に至ると最も顕著となる。千曲川右岸にあたる下高井郡野沢温泉村、下水内郡栄村堺地区、左岸では飯山市上境以北で全く弥生式土器が検出されていないのである。私達の知り得る限りでは上境が弥生式文化の北限といえよう。田茂木平、上境城で弥生式土器が出土したとされているが果してその地点で採集されたものかあるいは弥生式土器と見做してよいのか不明である。仮りに一歩ゆずってそれらが明確に弥生式土器であるとしても外様平に開花した弥生式文化からみれば微々たるものに過ぎない。市川谷に弥生式文化が浸透しなかった理由は、異常ともいえる積雪量と肥沃で広大な土地に欠けるところにその原因を求めることができよう。

古墳時代、奈良時代にも矢張り市川谷他地域に見られるような活発な人間活動の舞台ではなかった。千曲川右岸についてみると古墳の築造は飯山市瑞穂がその北限であり、野沢温泉村以北にはついに古墳は築造されなかったのである。千曲川左岸における古墳の北限は飯山市桑名川である。大正10（1921）年飯山線敷設工事の折に玉類、直刀、鏡等が出土し古墳の存在が確認されたのであった。桑名川の古墳は肥沃で広大な土地があるが故に、それを背景として築造されたものでなく、古代越後への交通の拠点として重要性を有す場所であるが故に築造されたり可能性がつよい。事実、桑名川古墳出土の遺物は、古墳時代後期の様相を如実に示しているのである。

奈良時代に入っても市川谷には、今の所人間が活動した痕跡が認められない。雪深き奥信濃の地に人間が活発に活動するにいたるのは、平安時代中期以降であった。平安時代中期以降になると飯山市北原遺跡にみられるように人間の活動が活発化する。温井地域でも今回調査した平安時代の遺構、遺物がそれを示しているといえよう。更にカツボ池、鳴沢頭等もそれを裏付けている。

鎌倉時代に入り、外様平を中心として常岩の牧が営まれたことを示す史料が現われてくる。郷土史家によれば平安時代後期から鎌倉時代にかけて常岩の牧が存在し、その支配者は鎌倉時代には常岩氏であったとしている。1335年中先代の乱を契機として常岩氏は、奥信濃の地から姿を消し去ってしまったという。このことについては故江口善次氏が岡山村史、太田村史、外様村史等で詳細に触れられている。今日調査した平安時代の遺構、遺物もあるいは常岩の牧に関係するものなのかも知れない。

常岩氏が没落した後、外様平を中心として泉氏が勢力を得るにいたる。この泉氏一族の一拠点となったのが上境城であるといわれている。従って室町時代には、温井地区は泉氏の支配下にあったとみてもよいであろう。時代は下って戦国時代に至ると越後上杉氏の勢力が奥信濃の地に強く浸透して、飯山以北は完全にその支配下にくみこまれてゆくのである。温井城は戦国時代の築城とされ、越後との交通の要地に立地し五輪塔が出土している。更に番所跡等の名称が現在も残されており、江戸時代には越後との交通が活発に行われたことを示している。

第II章　経　　過

第１節　調査に至るまで経過

昭和58年10月20日、県教育委員会、北信土地改良事務所、飯山南高・高橋教諭、市教育委員会・小川係長で現地協議を行なう。

11月10日、県教育委員会より北信土地改良事務所より調査依託があった場合は受託するよう依頼があった。

４月16日、市教育委員会は市文化財専門委員会と協議をした結果、調査委託を受け入れることにし、発掘調査は、調査会を編成して行う事になり、会長に浦野市教育長、副会長に武田教育次長、理事に佐藤政男氏をはじめとする７名の文化財専門委員、顧問に地元圃場整備事業実行委員長の樋口一郎氏、地区代表として村山温井大区長他２名また、調査団長の飯山南高等学校教諭・高橋桂氏、調査員に望月静雄技師、常盤井智行氏等を決めた。

５月10日、北信土地改良事務所長・有賀守夫氏との発掘調査及び整理作業委託契約を締結した。

５月14日　文化庁長官あて埋蔵文化財発掘通知を提出した。

５月26日　勤労青少年ホームにおいて調査会役員会及び調査団の結団式を行なった。会議において調査計画について細部にわたって協議を行ない調査日程を６月２日より７月10日までとする事等を決めた。また作業員については地元温井地区の老人クラブの方々20名程にお願いすることとし、作業責任者を北条正司氏にお願いした。

５月31日～６月１日、調査準備として作業員２名を動員してグリット設定、地形測量、調査器材運搬、テント設営を行なった。

６月２日午前９時に発掘関係者全員が現場に集合し、鍬入式を行なって発掘作業の安全を祈願した後第１日目の作業に入った。

なお、調査組織については以下のとおりである。

調査会名簿

会　　長	浦野　昌夫	飯山市教育委員会教育長
副 会 長	武田作之助	飯山市教育委員会教育次長
顧　　問	小野沢静夫	飯山市長
〃	樋口　一郎	県営圃場整備事業温井地区実行委員会委員長
理　　事	佐藤　政男	飯山市文化財専門委員
	弓削　春隠	〃
	高橋　　桂	〃
	上原　幸夫	〃
	藤沢　正平	〃
	吉沢菊之進	〃
	山崎　　盈	〃
地区代表	村山　新平	温井地区大区長

渡辺　次郎　圃場整備実行委員会副委員長
米持壮一郎　温井地区公民館長
事務局　小川　恵一　飯山市教育委員会社会教育係長
望月　静雄　飯山市教育委員会社会教育係
青木　真澄　飯山市教育委員会臨時職員
調査団
調査団長　高橋　桂　飯山南高等学校教諭
調査員　高沢　秀徳　飯山市瑞穂
望月　静雄　飯山市教育委員会職員
常盤井智行　飯山市常盤

作業協力者　（順不同、敬称略）
北条正司、北条良三、大槻三十二、樋口一男、米持重司、村山梅子、江口武男、高橋ちよえ、宮脇ますみ、村山よしの、村山くま、宮崎文雄、宮崎秀敏、鷲尾鈴松、渡辺昇、斎藤小雪、村山安子、米持なつえ、斎藤まさ、久保田貞夫、高橋敬造、樋口八重子
上野松雄、市川丹一、滝沢みち代、今井吉春、岸田文彦、栗岩康彦、出沢俊明（以上飯山市教育委員会職員）
協力者
市村篤二（市議会議員）、樋口義松、牧野正雄（大応寺住職）
見学者
宮沢邦彦、丸山幸子、北信濃新聞社、飯山市公民館（丸山一男）

第2節　調査日誌

昭和59年
5月23日（水）晴れ　長者清水、水の沢遺跡の中心部分推定を目的として踏査を行なう。
24日（木）晴れ　前日に引き続き踏査を行なう。水の沢遺跡については、地元北条正司氏の御教示で明らかになるが、地形改変が行なわれ遺物採集はできなかった。公図より土地所有者名のリストアップ。
25日（金）晴れ　調査対象地の所有者、地番の確認、地元協力者との打ち合わせを行なう。
26日（土）晴れ　遺跡調査会を行なう。
28日（月）晴れ　発掘器材の運搬。長者清水遺跡周辺に天幕設営。
30日（水）晴れ　グリット設定のための基準杭を打つ。
31日（木）曇りのち雨　グリット設定及び伐採を行なう。午後3時で降雨のため作業を中止する
6月1日（金）晴れ　昨日に引き続き伐採を行なう。
2日（土）晴れ　午前9時30分より鍬入式を挙行し、その後発掘調査に着手。大グリットE地区2ラインを発掘。表土は薄く、混礫の赤褐色面まで約20cm到達する。出土遺物なし。
3日（日）晴れ　引き続き2ラインを調査。地山面調査を行なったところピット状の遺構を多く検出する。
4日（月）晴れ　西側への広がりを把握するためG地区1ラインを2mトレンチを入れる。ピット状の遺構あり。

5日（火）曇り　H－II地区の調査に着手するが、胡桃等雑木が繁っており木根のために難渋を極める。そのためバックホーにより表土約20cmを除去してもらう事にする。

6日（水）曇り時々雨　昨日に引き続き大型機械により表土除去。その他、発掘により、H－E－2区より銅銭3枚出土。

7日（木）晴れ　引き続きバックホーにより表土除去、並行してH－II地区の精査。「天聖之宝」1枚出土。

8日（金）曇り　作業と並行して周辺の地形測量を行なう。

9日（土）晴れ　H－I地区の精査。H－A－3区より銅銭出土。

10日（日）曇り時々雨　H－I地区の精査。H－E－2区より銅銭3枚重なって出土。降雨のため午前中で作業中止。

11日（月）曇り　H－II地区の精査。H－C－7区第　号土壙より宣徳通宝出土。

12日（火）晴れ　H－II地区の精査続行。並行して地形測量を行なう。

13日（水）曇り　大グリットE地区南北2mトレンチを入れる。E－F・G－5～7区において東西方向の構（M1）を検出。

14日（木）晴れ　H－II地区の精査。大小のピット多数あり。E地区において、土塁状を呈した集石となっているところより、幅約3mの濠状の落ち込みを検出。

15日（金）晴れのち曇り一時雨　昨日検出したE－H－6区の濠状の落ち込みを完掘。遺物なし。

16日（土）晴れ　D－G～J－5～7区調査開始。G－A－9、10区で濠の西北隅と思われる落ち込み検出。午前で作業中止。

18日（月）曇り一時晴れ　D－G～J－5～7区の全面精査。D－H－6区を中心とした部分に炭化物、焼土を含む落ち込みを確認（第1号住居址）。

19日（火）曇りのち雨　濠の西北コーナーの平面輪郭をD－H－9・10区で検出。写真撮影。

20日（水）曇り時々小雨　D－H－6区の落ち込みを掘り下げる。平安期と思われる坏・甕片等出土。第1号住居址とする。

21日（木）曇り時々小雨　第1号住居址遺物出土状況写真撮影。D－G～J－5～7区検出遺構の掘り下げにかかる。H－A～E－4～P区上面精査。

22日（金）曇り一時雨　E－J－2、3、H－A～D－2、3区遺構掘り下げほぼ完了。E－J－2、3区の落ち込み掘り下げ（後に第2号掘立柱建築址）。第1号住居址1/20で平面実測にとりかかる。

24日（日）晴れ　E、H地区確認面清掃完了。写真提影。遺構掘り下げにかかる。

25日（月）雨　午前10時30分まで、降雨のため出土土器の洗浄。後、水の沢遺跡の調査にとりかかる。

27日（水）曇り一時小雨　濠西北コーナーの掘り下げ続行。H－A－4区において焼土を伴う土壙（SK9）検出。

28日（木）曇り　H－B－5区で焼土 を伴なう土壙（SK10）を検出。平安期と思われる。

29日（金）曇り時々晴れ　H－E－3区検出土壙（SK2）より珠洲系陶器壺片多量に出土。1/10実測図作成。

30日（土）晴れ　H－E－3区において刀子出土（竪穴遺構）。また、濠の東部分確認のためH－A－10区を1m幅で拡張。幅約3mの濠を検出。さらに南側を1mトレンチで調査したが、急崖となって底地に接続しているため南側まで濠はめぐっていないことが確認された。

7月1日（日）晴れ　E－F、G－5～7地区平面実測を実施。

2日（月）晴れ　H－F－3区において土壙上面より鉄整容器を検出（SK7）。E区掘り下げ完了、D地区完掘。

3日（火）晴れ　H地区掘り下げ続行。第1号住居址土壙掘り下げ。

4日（水）晴れのち曇り　H地区掘り下げ続行。第1号住居址焼土壙実測完了

5日（木）雨時々晴れ　D地区、第1号住居址南東側に骨片を含む土壙を検出。降雨のため午前中で作業中止。

6日（金）雨時々晴れ　降雨のため午後より調査開始。時々雨のため土器洗浄。

7日（土）曇り一時はれ　H地区1/40で平面実測開始。濠は1/100で平面図作成。

9日（月）曇りのち晴れ　D地区写真撮影。平面図作成。

10日（火）晴れのち曇り一時雨　D、H地区平面図作成続行。H地区第3柱穴群No　で方形硯出土。

11日（水）晴れ　H－II地区において方形掘方が東西に並ぶことが判明。掘立柱建築址と思われる。

12日（木）晴れ　H－I地区1/40平面図完了。H－II地区1/20平面図にとりかかる。水の沢遺跡調査。出土遺物なし。以前に開田工事により削平されたことが窺える。

13日（金）晴れのち曇り一時雨　H－II地区1/20平面図続行。長者清水発掘器材の整理等行なう。水の沢遺跡調査続行。出土遺物なし。

14日（土）曇り時々晴れ　長者清水残務整理。水の沢遺跡、地山面精査を行なうが遺構、遺物は検出できなかった。

16日（月）晴れのち夕立　長者清水は写真撮影を行ない全作業完了。水の沢遺跡はトレンチ作業続行。第2トレンチで剝片1点出土。攪乱層よりの出土であった。

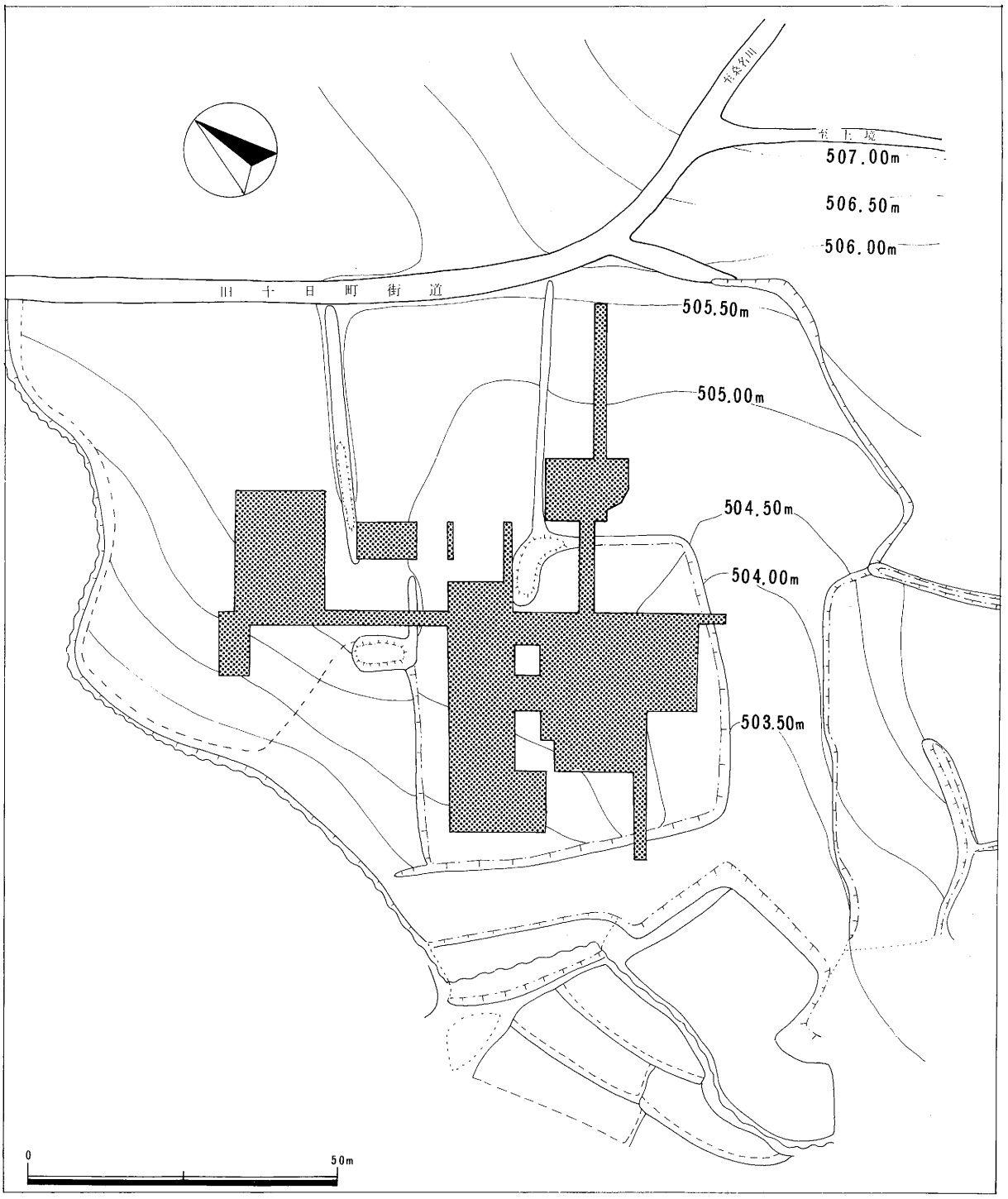
17日（火）曇りのち夕立　水の沢遺跡トレンチ調査完了。写真撮影等行ない夕刻までに全作業を終了する。

第３節　調査概要

１、調査区の方法

1)　調査区の設定（第５、６図）

調査区の設定にあたり、事前に周辺地域の踏査を行なったが明確な範囲及び中心地域を把握できなかった。こ

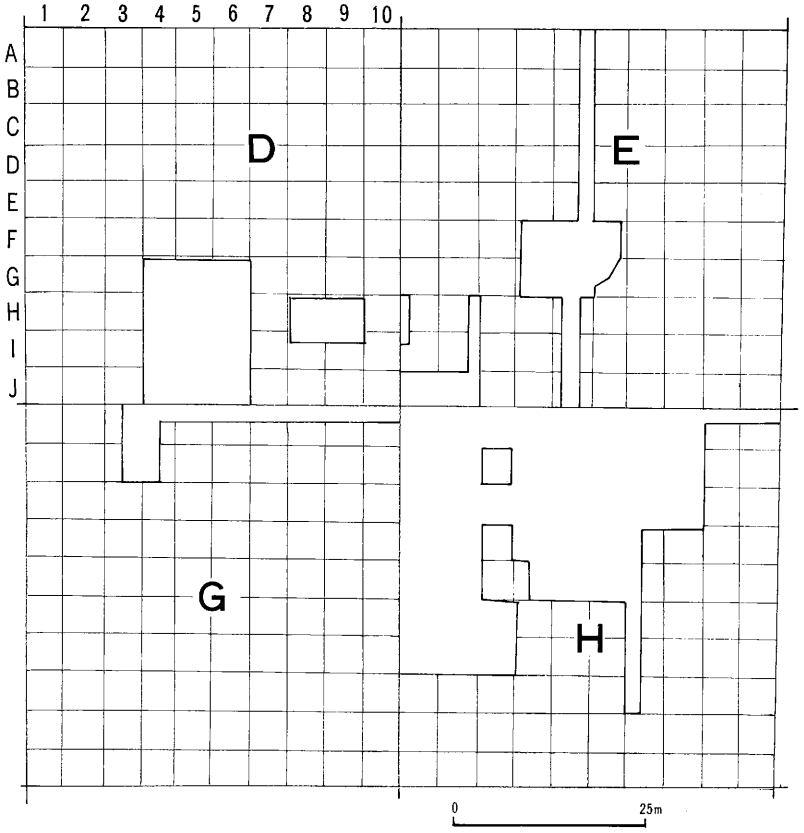


第５図　遺跡の地元及び調査区（１：1,000）

のため、遺跡地とされるおよそ10.000m²地区に50×50mの大グリット（D・E・G・H）を設定した（X軸とY軸の方位は地形に沿う形で任意に設定した）。さらに大グリットを5m×5mグリットに分割し、座標軸の第4象限を使用しX軸を1～10、Y軸をA～Jとした。D地区左隅の場合をD－A－1と呼称することとした。

2）　発掘方法

遺跡の範囲が明確でないため、まず遺跡の拡がりを把えることを第1目的とした。したがって、グリット方式として設定したが、当初は2mトレンチで四方へ調査を進めることとした。



第6図　グリット設定図（1：1,000）

また、遺跡の取り上げについては、遺構検出面まではグリット一括とし、まとまって検出された場合は分布図、レベルの記録作成を行なう。さらに、遺構が検出された場合は、十字にセクション帯を残し、分布図等の作成を行ない、土層断面図も作成する。この場合平面図は1/20で作成することを原則とし、必要に応じて1/10、1/40、で作成することとした。

遺構の拡がりをある程度おさえられた段階で、面的に調査を進め全面の調査を目的としたが、当初の想定した面積を上回る拡がりのため、残念ながら遺跡全体の約1/3程度を明らかにするにとどまった。

2）　調査区

調査区は、大まかには大グリットのD・G地区、H地区、E地区に分けられる。遺構によっては全地区に亘る濠などがあるが、遺構分布もこの区分によく合致した。

本稿では、調査地区をD・G地区、E地区、H地区の西側半分をH－I地区、東側をH－II地区として概要説明を行なうこととする。

2、調査区の概要

1）　D－G地区（第8図）

調査面積は約480m²である。本地区は西側底地に向って傾斜しており、D－G－6付近より平坦となっている。層序は極めて薄く黒褐色土層が約15cmあり、その下面は混礫の黄褐色土層となっている。この層はローム層とみなして差し支えないと思われるが、堆積状況は二次的である。遺構は黄褐色粘土層を掘って構築されている。

本地域で検出された遺構は、平安時代竪穴住居址１軒、土壙１、柱穴群、中世掘立柱建築址１棟、柱穴群である。その他、濠の西隅部分が検出されている、平安時代住居址は、住居址として良いのか若干の疑問が残る。覆土に炭化物を多量に含み、床面に炭化材が出土しており、一見焼失家屋と思われるが、覆土の炭化物の量は異状である。竪穴住居址がその後何らかの施設に転用された可能性を含んでいる。

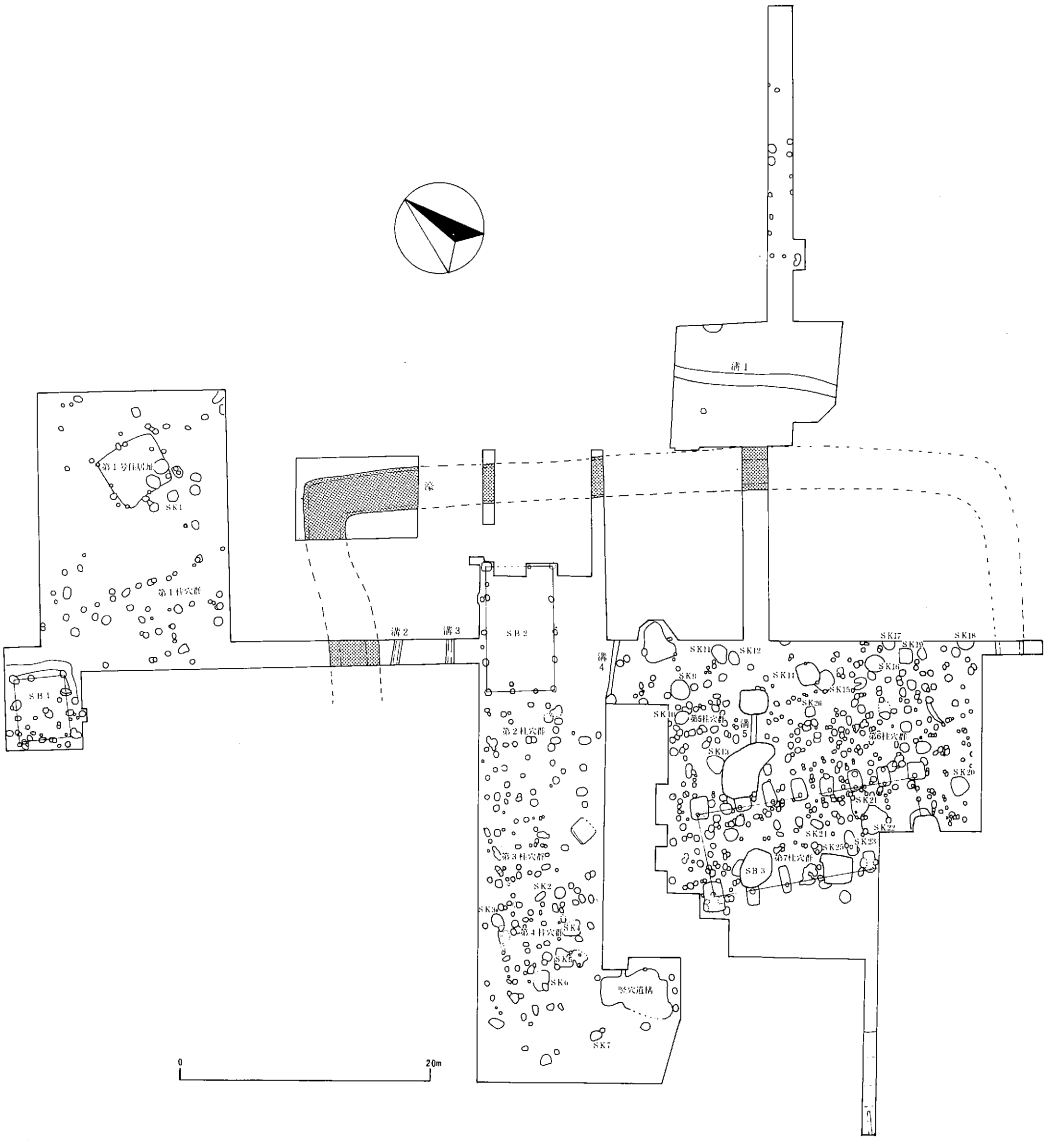
中世の掘立柱建築址については、柱列の規模等が不規則であるけれども、1棟として把えることが可能である。珠洲系陶器片、銭貨「熙寧元宝」が出土している。中世柱穴群は、掘立柱建築址となる可能性もあるが、柵列となる可能性もあり一概に決定するだけの根拠に乏しい。

2)　Ｅ地区

調査面積は約300m²である。濠および溝、柱穴が検出された。濠から若干中世遺物が出土したが、その他からの出土遺物はない。遺跡の外郭地帯であろう。

3)　Ｈ－Ｉ地区（第９図）

Ｈ地区は周囲より一段高くなっている。調査面積は約400m²である。中世掘立柱建築址、竪穴遺構、土壙、柱穴

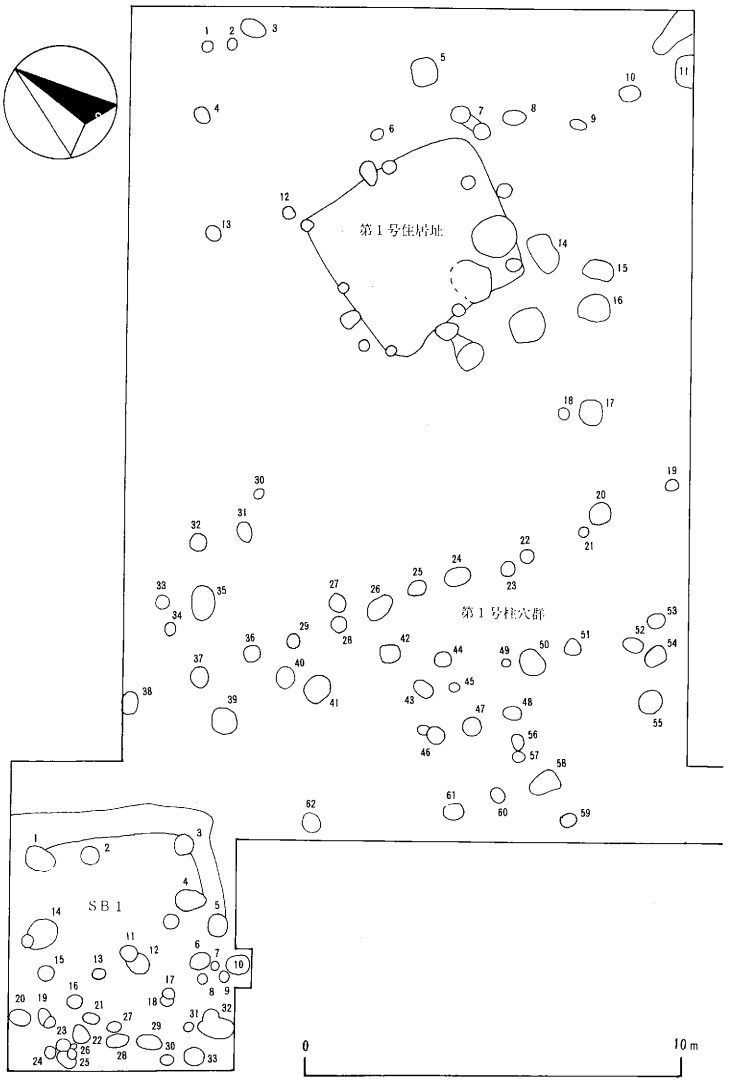


第７図　出土遺構全体図（１：600）

群等が出土している。柱穴群は掘立柱建築址となるものであろうが、立て替えが激しいためか、多数あり、明確に１棟を決定づけることができなかった。土壙は遺物を若干含む。遺物の出土状態からは、土壙の性格を明確にする根拠は認められなたった。ＳＫ２は珠洲系陶器壺破片が多数出土したが、他の遺構から接合例もあり、さらに多数の破片が不足していることから、土器埋納壙とは考えにくい。竪穴遺構は、中世陶器等の出土があった。覆土の状態から、池としての性格が考えられるが、規模が若干小さいようにも思われる。

Ｈ－Ⅱ地区（第10図）

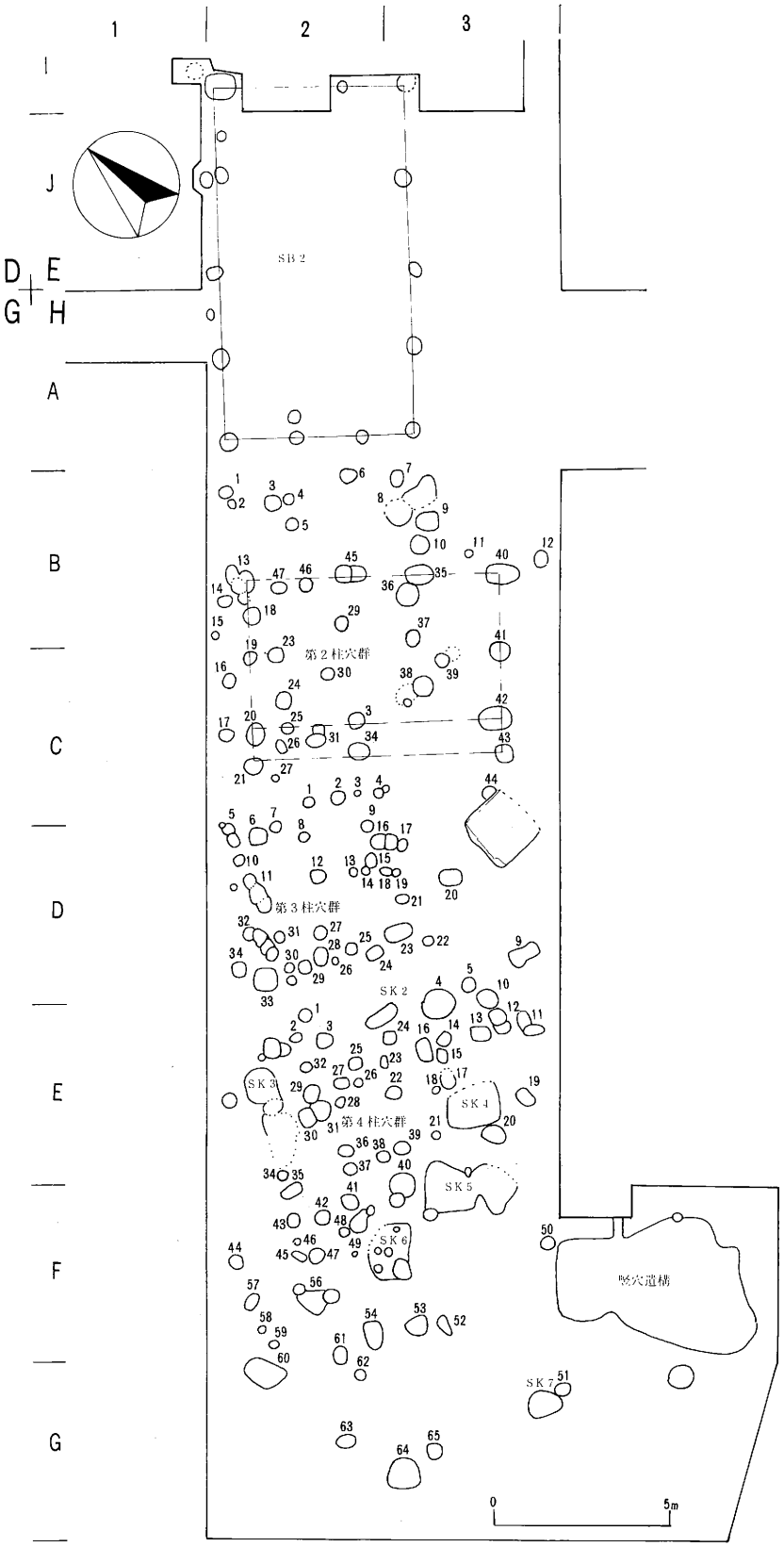
Ｈ－Ⅰ地区とともに本遺跡の中心部分である。約630㎡を調査した。出土した主な遺構は、土壙、掘立柱建築址、柱穴群である。特に掘立柱建築址は７×２軒の規模をもつ大形の棟であり、本遺構の中心家屋と考えられる。遺物は、中世陶磁器、土師器、鉄製品、硯、石臼等が出土している。



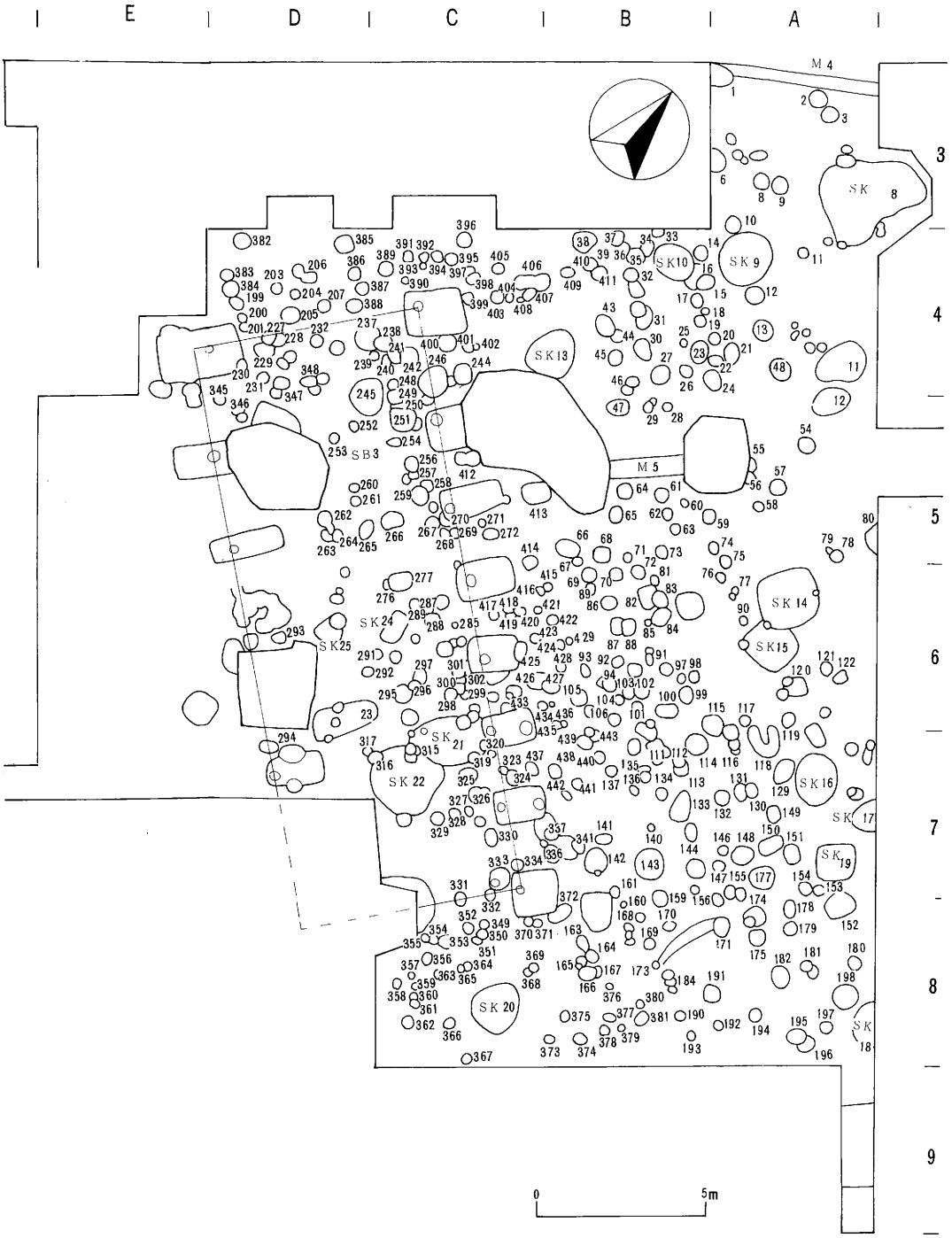
第８図　Ｄ・Ｇ区遺構配置図（１：200）

全体の概要

以上、簡単に各地区の概説を述べてきたが、本遺跡の中心地区は、濠によって囲まれたＨ地区であるが事が理解される。時期は出土遺物により中世に位置づけられる。14、15世紀代と考えて良いであろう。また、Ｄ・Ｇ地区の濠外にも中世遺構が検出されているが、やはり一連の関係するものと考えたい。なお、平安時代の遺構については、一部のみの検出であり、本地区北側に拡がるものであろう。



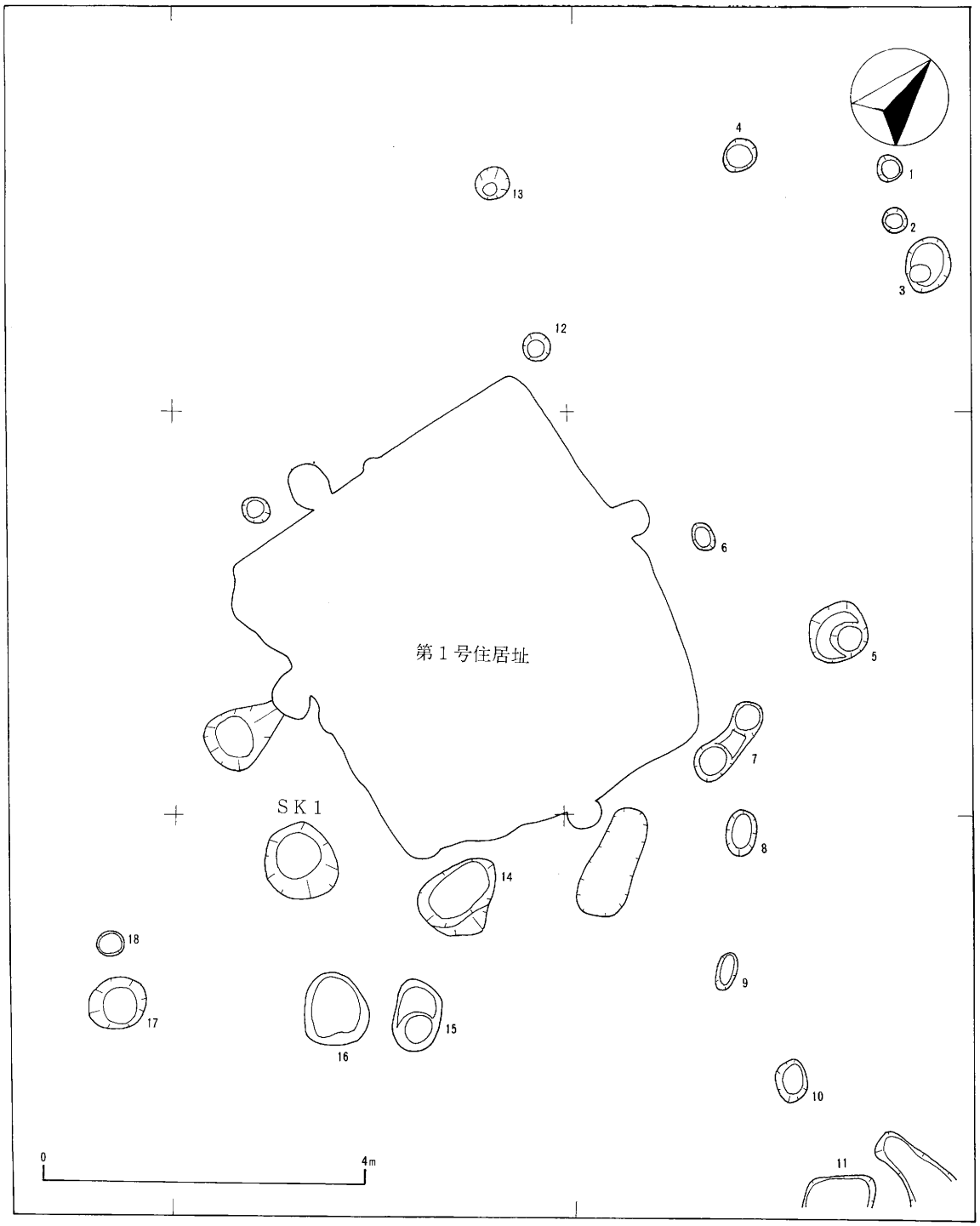
第９図　Ｈ－Ｉ区遺構配置図（１：200）



第10図　H－II区遺構配置図(１：200)

第Ⅲ章　遺　　構

第１節　平安時代の遺構（第11図）



第11図　平安時代の遺構配置図（１：80）

D・G地区、D－H－5区を中心に検出された第1号住居址及び第1号土壙である。また、前記遺構周辺に存在する柱穴群と併せて報告する。これらの柱穴群は併出遺物がないため、確実に該期に併うものとは明確にし得ない。この地区のほかに、H－II区第10号土壙も出土遺物により該期に位置づけられるが、本稿では「中世の遺構」の項で報告する。

第1号住居址（第12、13図）

検出状況

D－H－5区を中心として検出された。本地区は表土が薄く、約15cmの表土除去で、黒色土の落ち込みが現われ、精査の結果大形の竪穴遺構であることが判明した。（遺物分布図の番号は、第29～30図の番号と一致する。）

第12図　第1号住居址遺物分布図（1：40）

遺構の構造

南北420cm、東西480cmの長方形プランを呈する。壁高は約15cmであるが、これは表土が薄いのと関係しよう。床面は部分的に硬軟があるが、炭化物が多く出土した北隅周辺が最も硬くなっている。

柱穴は壁内外に計10箇所認められた。

この他、遺構南側の壁際に３箇所の焼土を併う土壙状の遺構が検出されている。当初焼土１を住居址に併うカマドと考えたが、ピット状となる事が判明した。

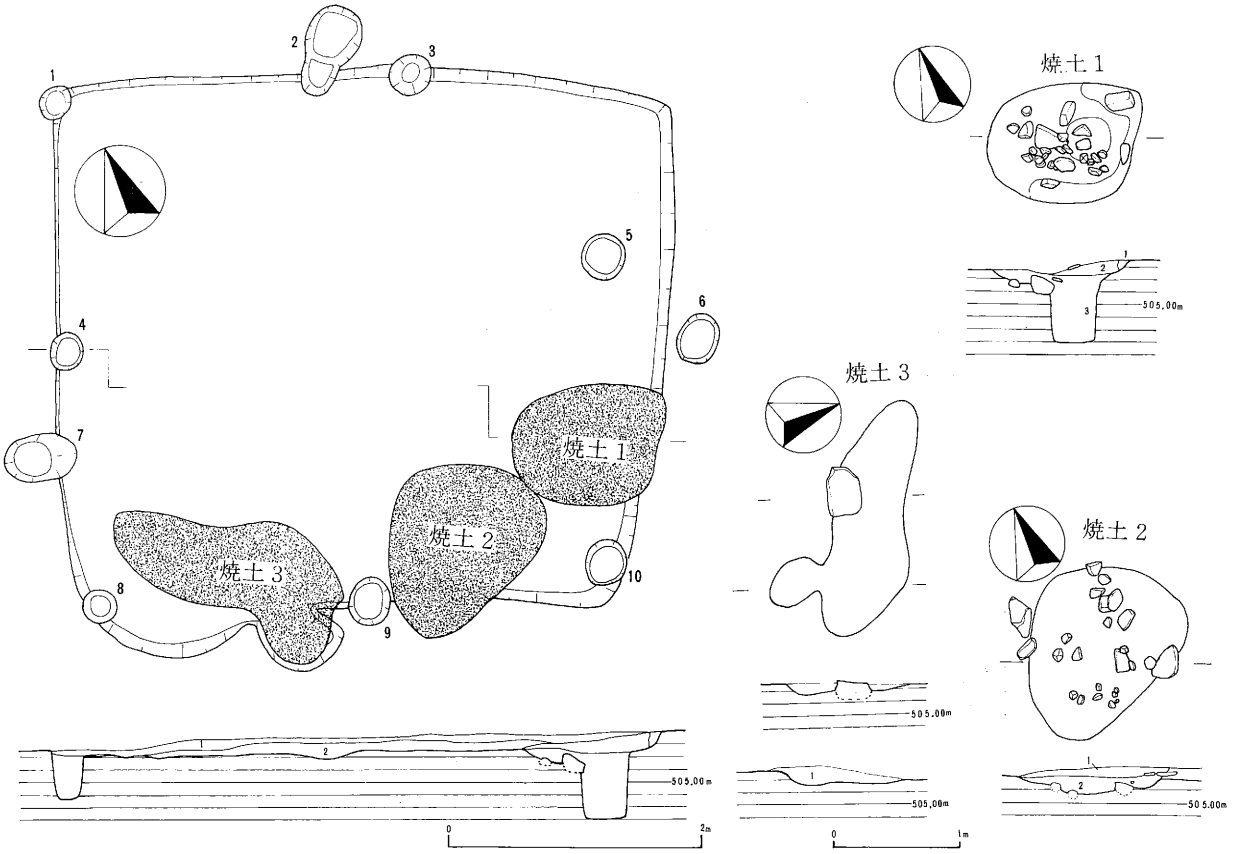
焼土１……120×90cm楕円形プランを呈す。深さは約60cmを測る。壙内より礫・土器片等が検出されたが、すべて焼成を受け赤変している。覆土は上部より１・赤褐色土、２・褐色土、３・暗黄灰色土となっている。

焼土２……140×120cmの楕円形プランを呈す。深さは焼土１に比べ20cmと浅い。覆土は１、赤褐色土２、黒褐色土となっており、壙内より出土した遺物は焼土１と同様赤色化している。

焼土３……180×60cmの不定形なプランを呈する。前者に比較して遺物等を出土しなかったが、地山の礫と思われる大石が赤変している。また少量であるけれども白色の骨片が検出された。

遺物の出土状況

覆土は２層に分けられるが、炭化物多少により分類しており、下層はより炭化物を多く含んでいる。遺物は１、２層より集中して検出された。多くは床面より若干浮いた出土状況であった。土器の集中部は、遺構の東側、焼土１の北側にあり、かなり距離をおいて接合した個体も多い。出土遺物は、土師器坏・甕形土器・須恵器甕形土器、灰釉陶器、鉄製品等である。



第13図　第１号住居址（１：60）

第１号土壙（第14図）

検出状況

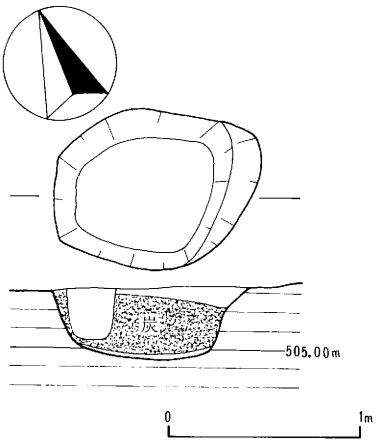
Ｄ－Ｈ－５区、第１号住居址の南側に接して出土した。

遺構の構造

110×80cmの楕円形を呈し、深さは36cmを測る。覆土は炭、焼土を含む。

遺物の出土状況

炭層を中心に土師器片、骨片が出土。第１号住居址出土土器と接合した例（第12図９）もあり、密接な関係を有したことが窺える。



第14図　第１号土壙（１：40）

柱穴群

１号住居址及び１号土壙周辺に検出されたピット群である。すべてを柱穴群として把えられるものではなく、また平安時代に比定する積極的な根拠は見出せないけれども、一括して報告する。

各柱穴群の規模は第１表のとおりであるが、このうち遺物は出土した柱穴は、３より砥石が出土している。（第37図11）。その他、炭化物、骨片等が少量出土した柱穴は、８、14、15である。配列からも掘立柱建築址となる可能性は少ない。

第１表　平安時代柱穴一覧表

No	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	備　　考
1	30	30	22	覆土　黒褐色土
2	28	28	20	〃
3	70	52	28	覆土　黒褐色土　砥石
4	40	40	39	覆土　黒褐色土
5	80	74	47	覆土　黄灰色土　礫
6	32	23	19	覆土　黄灰色土
7	110	32	37	覆土　黄灰色土　ピット２本あり
8	56	36	13	覆土　黒褐色土　炭
9	46	22	28	〃
10	50	34	38	覆土　黒色腐植土
11	—	—	21	〃
12	34	34	35	覆土　黄灰色土
13	40	40	8	覆土　黒褐色土
14	110	90	43	覆土　灰層あり　炭　骨片
15	90	60	48	覆土　黒褐色　炭
16	90	80	40	覆土　黒褐色土
17	70	60	30	〃
18	34	22	26	覆土　黒色腐植土

第２節　中世の遺構

本調査によって検出された中世の遺構は、土壙25、竪穴遺構１、濠、溝、掘立柱建築址３、柱穴多数である。

１　土壙

第２号土壙（第15図、ＳＫ２）

遺構の構造

Ｈ－Ｅ－３区に位置する。100cm×37cmの長方形に近い楕円形プランを呈す。深さは64cmを測り、横断面はほぼ垂直に掘り込まれているが、東側上面は約10cmのテラスが認められ二段となっている。

遺物の出土状況

壙内より出土した遺物は、すべて珠洲系陶器である。上層より壙底にかけて集中的に出土したが、東側テラス面・中部・底面と３箇所に特に集中している。珠洲系陶器は３～４個体認められたが、完形となる土器はなく破損品であった。土器接合は上層と壙底出土例の接合により、一括廃棄の様相が窺える。

本土壙出土例との遺構間接合としては、濠、第２柱穴群17出土例と接合している。

第３号土壙（第16号、ＳＫ３）

Ｈ－Ｅ－２区に位置する。100cm×58cmの楕円形プランを呈し、深さは30cmを測る。南側一部を柱穴状の遺構によって切られている。壙底はほぼ平坦である。

遺物の出土状況

土師器細片、鉄製品（第36図8）。等が出土している。

第４号土壙（第15図、ＳＫ４）

遺構の構造

Ｈ－Ｅ－３区に位置する。150cm×125cmのほぼ長方形プランを呈す。深さは約20cmを測る。壙底は平坦であるが、やや東側に深さ25cmのピットが掘り込まれている。依存状態が悪く北東側のプランは明確でない。

遺物の出土状況

珠洲系陶器細片、「洪武通宝」がピット内より出土している。

第５号土壙（第15図、ＳＫ４）

遺構の構造

Ｈ－Ｆ－３区に位置する。地山礫が多く、一部耕作等による抜き取り痕等があり明確なプランを検出出来なかったが、150cm×135cmの楕円形プランを呈するものであろう。遺構の立ち上がり部分にピットが掘り込まれるが、土壙に併うものかはっきりしない。

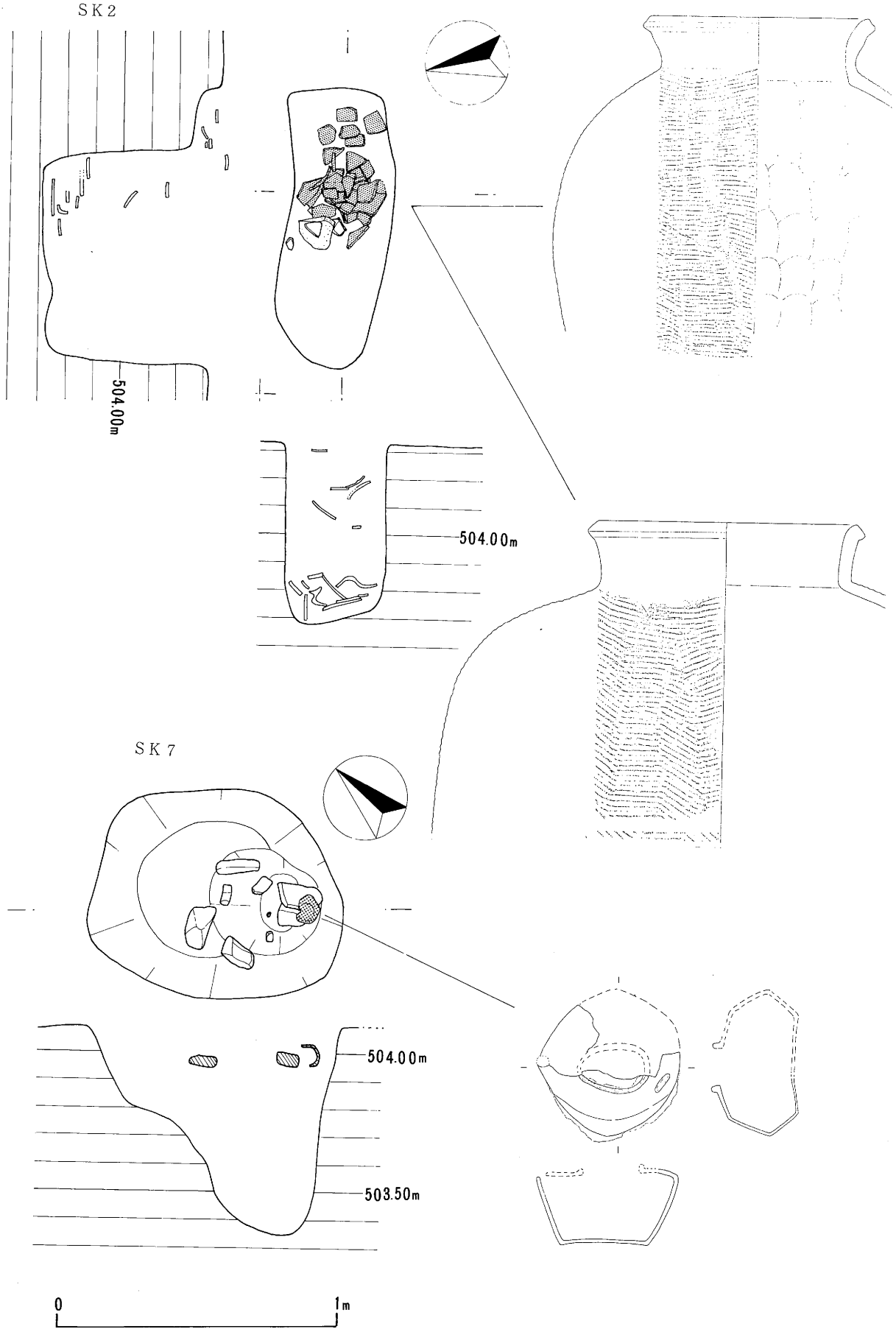
遺物の出土状況

覆土中より、珠洲系陶器片口鉢（第35図４）が出土している。

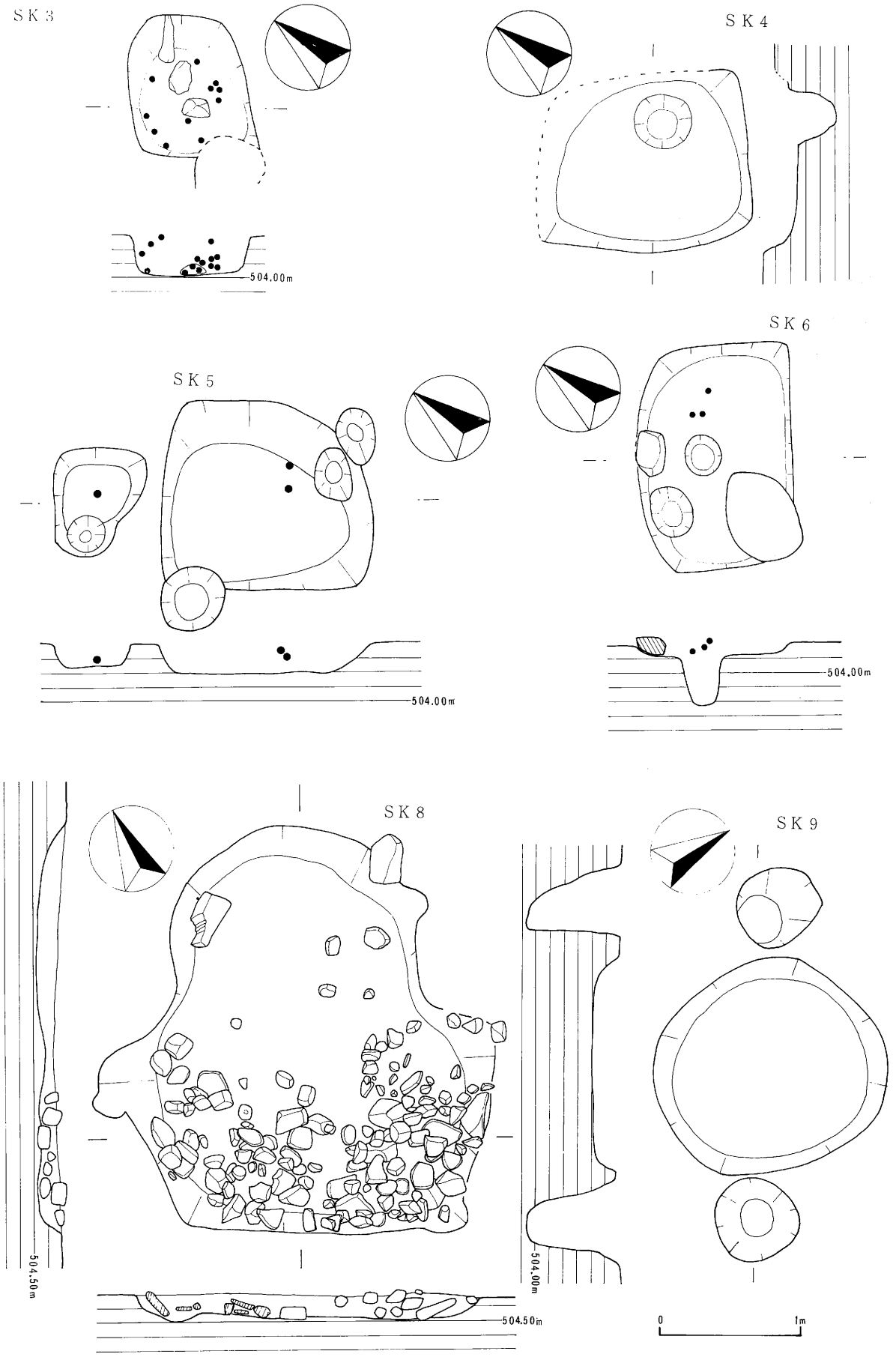
第６号土壙（第16号、ＳＫ６）

遺構の構造

Ｈ－Ｆ－２区に位置する。158cm×112cmの長方形プランを呈する。深さは約10cmと浅い。壙底は平坦であるが２箇所にピットが認められる。なお、南側コーナーに深さ約50cmのピットがあるが、本土壙より新しい時期の構築と思われる。



第15図 土壙(1)（1：20）


SK3
504.00m
SK4
SK5
504.00m
SK6
504.00m
SK8
504.50m
504.50m
SK9
504.00m
0
1m

第16図　土壙(2)（1：40）

遺物の出土状況

覆土中より、珠洲系陶器片、砥石（第37図12）、鉄製釘（第36図７）が出土している。

第７号土壙（第16図、ＳＫ７）

遺構の構造

Ｈ－Ｇ－３区に位置する。90cm×75cmの楕円形プランを呈する。横断面は北側が２段に掘り込まれ、深さは75cmを測る。

遺物の出土状況

覆土上部より、偏平な礫と共に鉄製品（第36図14）が底部を上にして出土している。

第８号土壙（第16図、ＳＫ８）

遺構の構造

Ｈ－Ａ－４区に位置する集石土壙である。プランは、南側が方形状で北側は楕円形となる。規模は285cm×240cmを測る。集石は南側の方形プランとなる部分にまとまって出土しており、北側はほとんど認められない。深さは約20cm。

遺物の出土状況

集石とともに炭化物の混入が認められた。また、珠洲系陶器甕（第32図２）が故意に割られた状態で砕片となって出土している。

第９号土壙（第16図。ＳＫ９）

第４柱穴群10､12の間に位置する。160cm×145cmの楕円形プランを呈し、深さは18cmを測る。壙底一面に焼土が認められた。出土遺物はない。

第10号土壙（第17図、SK10）

遺構の構造

Ｈ－Ｂ－５区に位置する。焼土を併う土壙であり、焼土中より多くの土師器が出土している。平安時代に属する土壙と考えられる。120cm×100cmの楕円形を呈し、断面は凹レンズ状となっている。本土壙の南側に接して桐の喬木があり、この木根を取り去るために焼土を含む覆土の観察は充分でなかったが、ほぼ上層から壙底にかけて焼土が充満していたものと思われる。

遺物の出土状況

覆土中の焼土とともに土師器坏（第29図10）、甕（第30図15、16）等出土している。

第11号土壙（第11図、ＳＫ11）

遺構の構造

Ｈ－Ａ－５区に位置する。160cm×110cmの楕円形プランを呈する。壙底西側に小ピットが認められるほかは平坦な壙底である。

遺物の出土状況

壙内に礫１点および珠洲系甕破片が出土している。

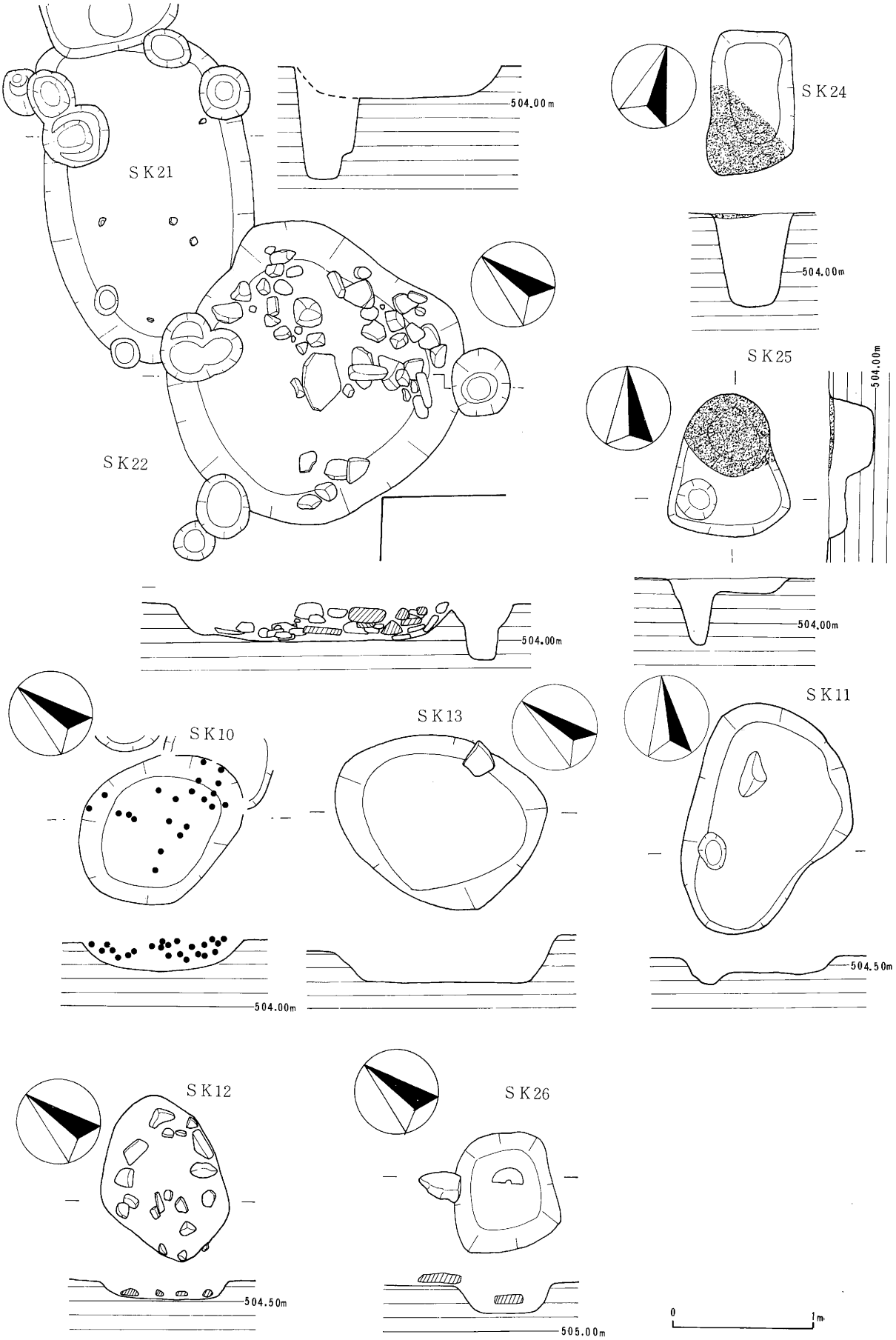
第12号土壙（第17図、ＳＫ12）

遺構の構造

Ｈ－Ａ－５区に位置する。120cm×84cmの楕円形プランを呈し、深さは15cmを測る。

遺構の出土状況

覆土中に小礫が多数出土したが、他は珠洲系陶器片口鉢細片が１点出土したのみである。


SK21
504.00m
SK24
504.00m
SK22
504.00m
SK25
504.00m
504.00m
SK10
SK13
SK11
504.00m
504.50m
SK12
SK26
504.50m
505.00m
0
1m

第17図　土壙(3)（1：40）

第13号土壙（第17図、ＳＫ13）

遺構の構造

Ｈ－Ｂ－５区に位置する。150cm×120cmの楕円形プランを呈する。深さは約40cmを測り、壙底は平坦である。

遺物の出土状況

小礫が出土した他は出土遺物は珠洲系陶器破片が出土している。

第14号土壙（第18図、ＳＫ14）

遺構の構造

Ｈ－Ａ－７区に位置し、第15号土壙北コーナーを切る。180cm×176cmの隅丸方形プランを呈す。南側コーナー付近に約50cmの大石が存在するが、この大石は地山の石と考えられる。本土壙より出土遺物は認められなかった。

第15号土壙（第18号、ＳＫ15）

遺構の構造

Ｈ－Ａ－７区に位置し、第14号土壙に切られる。140cm×150cmの方形プランを呈するものであろう。深さは約10cmと浅い。出土遺物はない。

第16号土壙（第18図、ＳＫ16）

遺構の構造

Ｈ－Ａ－８区に位置する。128cm×144cmの楕円形プランを呈する。深さは48cmを測り、覆土中に礫が多く認められた。層位は１層として把えられ、暗褐色土層であって礫とともに一括して埋められた状態であった。

遺物の出土状況

集石群とともに中世土師器灯明皿（第32図２等）が数点出土している。

第17号土壙

遺構の構造

Ｈ－Ａ－８区に位置する。調査区外にかかるため全体は検出できなかった。出土遺物はない。

第18号土壙（第18図、ＳＫ18）

遺構の構造

Ｈ－Ａ－９区に位置するが、約半分程調査区外にかかる。径約140cmの円形プランを呈するものと思われる。深さも全体を検出した訳ではないので明確でないが約60cmで断面がすり鉢状になるものと思われる。覆土は１層で黒色土層である。

遺物の出土状況

偏平な河原石が出土しているが、他の出土遺物は検出されなかった。

第19号土壙（第18号、ＳＫ19）

遺構の構造

Ｈ－Ａ－８区に位置する。115cm×110cmの長方形プランを呈する。深さは23cmを測り、平坦な壙底面である。

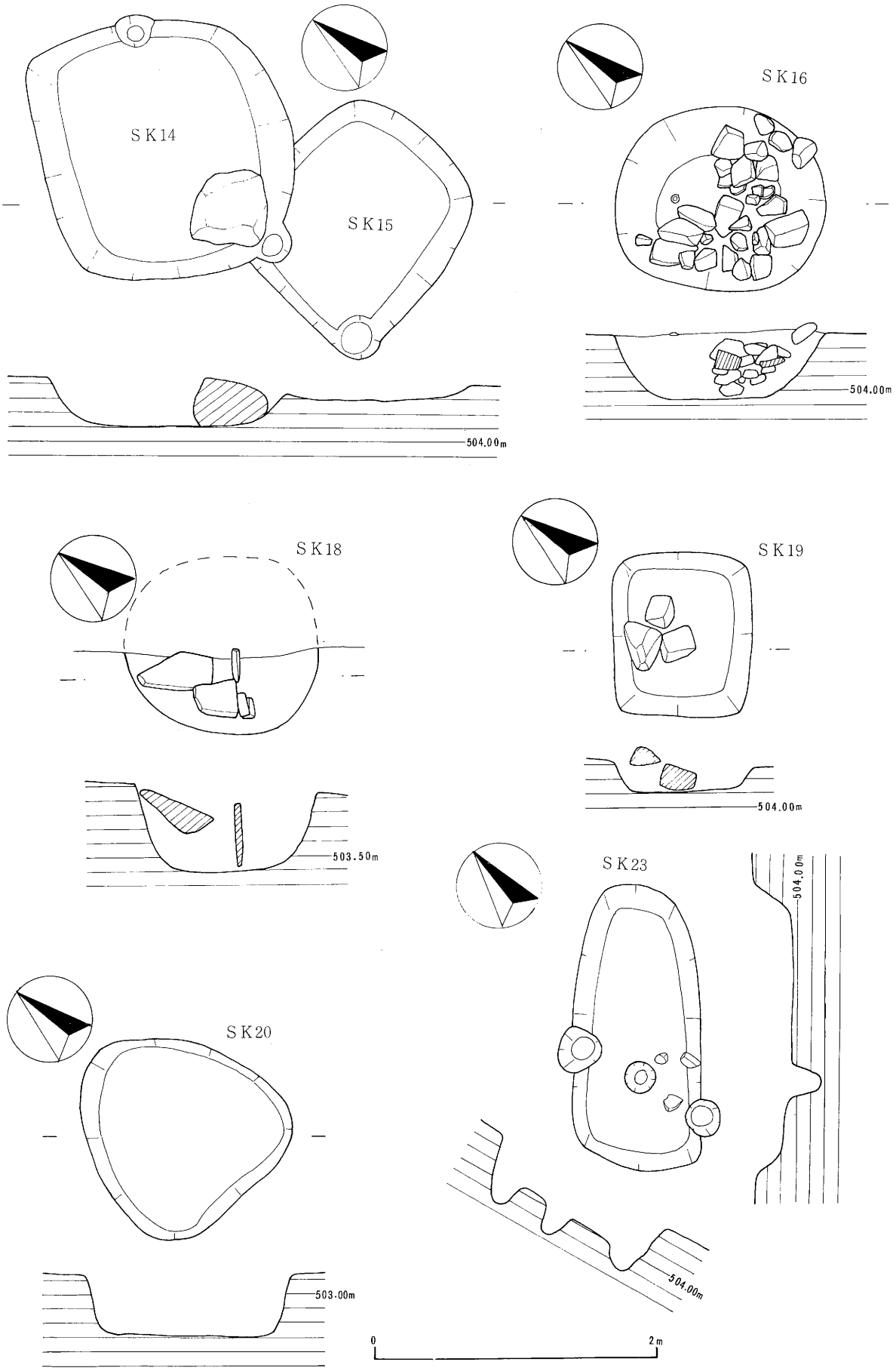
遺物の出土状況

人頭大の礫が３個出土しているが、他に出土遺物はない。

第20号土壙（第18号、ＳＫ20）

遺構の構造

Ｈ－Ｃ－９区に位置する。142cm×130cmの三角形に近似した楕円形プランを呈する。深さは44cmを測り、断面は鍋底状を呈する。


SK14
SK15
504.00m
SK16
504.00m
SK18
503.50m
SK19
504.00m
SK20
503.00m
SK23
504.00m
504.00m
0
2m

第18図　土壙(4)（1：40）

遺物の出土状況

土師器細片が僅かに出土している。

第21号土壙（第17図、ＳＫ21）

遺構の構造

Ｈ－Ｃ－８区に位置する。第22号土壙、第３掘立柱建築址、柱穴に切られる。240cm×150cmの楕円形プランを呈するものと考えられる。深さは約25cmを測り、平坦な壙底となっている。

遺物の出土状況

中世土師器灯明皿等が出土しているが、覆土中であり散在的な出土状態である。

第22号土壙（第17図、ＳＫ22）

遺構の構造

Ｈ－Ｃ－８区に位置し、第21号土壙を切る。径220cmの円形に近似したプランを呈す。深さは28cmで、第21号土壙と同様平坦な壙底である。

遺物の出土状況

覆土上部から壙底にかけて小礫が多数出土しているが、特別な意図は認められない。小礫と混在する形で、土師器灯明皿片、珠洲系陶器片が出土した。

第23土壙（第18図、ＳＫ23）

Ｈ－Ｄ－８区に位置する。200cm×90cmの長方形プランを呈する。３箇所に小ピットが存在するが、本土壙に併うものが判然としない。

遺物の出土状況

中世土師器細片が覆土より出土した。

第24号土壙（第17図、ＳＫ24）

遺構の構造

Ｈ－Ｃ－７区に位置する。100cm×60cmの長方形プランを呈する。深さは64cmと深い。遺構確認時では焼土が土壙の半分程度に拡がって検出されたが、層厚は4.5cmと薄い。

遺物の出土状況

検出面において銭貨「宣徳通宝」が一枚出土している。その他の出土遺物は認められない。

第25号土壙（第17図、ＳＫ25）

遺構の構造

Ｈ－Ｄ－７区に位置する。100cm×90cmの楕円形を呈し、壙底は二段となっている。第24号土壙と同様に確認面において焼土が検出されたが、層厚は約５cmと薄い。遺物の出土は認められなかった。

第26号土壙（第17図、ＳＫ26）

遺構の構造

Ｈ－Ｂ－７区に位置する。84cm×70cmの方形プランを呈する。深さは約20cmで、断面は鍋底状を示す。

遺物の出土状況

壙内中位より石臼破片（第38図２）が検出されている。その他の出土遺物はない。

2、竪穴遺構（第19図）

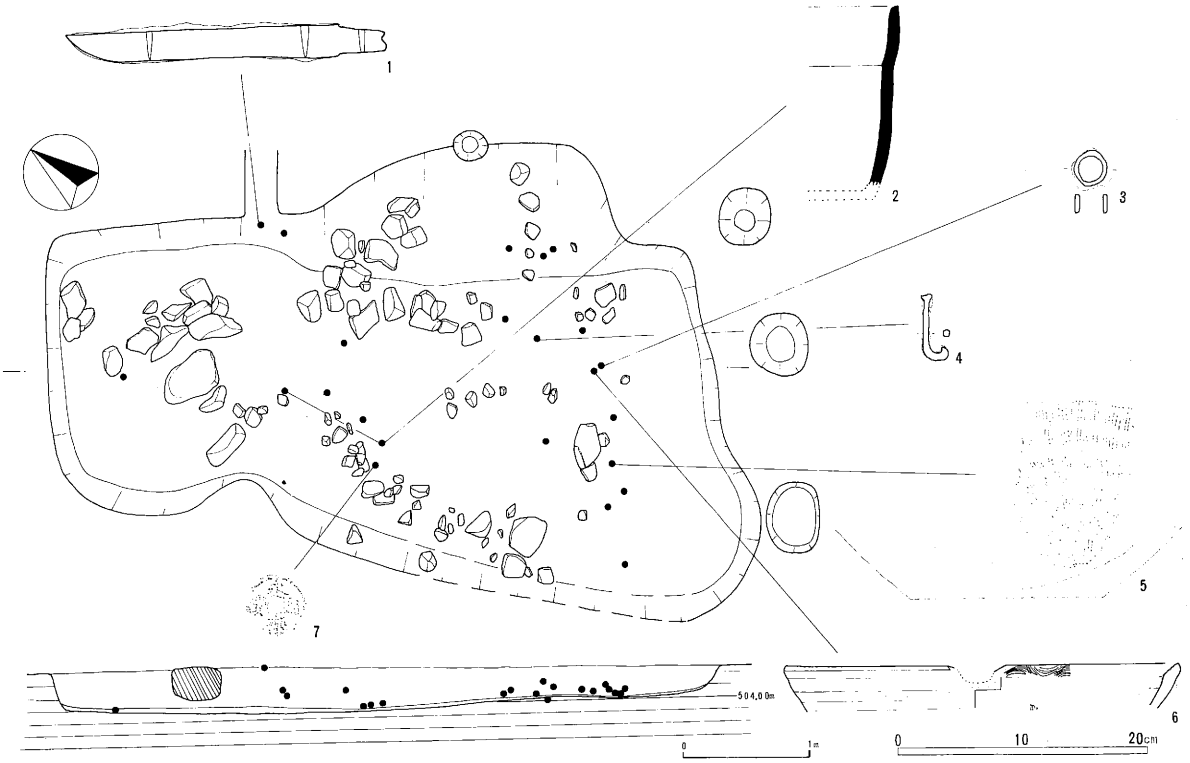
遺構の構造

H－F－4区に位置する。530cm×350cmを測る。北側の立ち上がりは明確であるが南側はやや不明確となっている。壙底はほぼ平坦である。東側に幅25cmの溝状の落ち込みが本遺構に接続している。溝の全体を明らかに出来なかったが、H－A－4区検出の溝と同一との予測を持ち、H－D－4区を試掘したところ同方向、同規模の溝を検出した。

遺構内には大小の礫が出土しているが、多くは壙底より若干浮いた状態であった。覆土は1、暗黒褐色土層・2、黒色土層である。壁は明確であるが、特に溝接続部付近では鉄分付着によるものと考えられる赤褐色の錆状を呈す部分が広く認められた。

遺物の出土状況

本遺構より多種多様に恒る遺物の検出をみたが、多くは破損品であった。比較的原形を保っているものは鉄製品（刀子、釘等）であるが、他の珠洲系陶器片口鉢、内耳土器などは、破片が出土している。なお、銭貨も計5枚出土したが、遺存状態の良好なものは永楽通宝のみであった。



第19図　竪穴遺構（1：60）

3、掘立柱建築址

調査によって検出された掘立柱建築址は三軒である。実際には相当数にのぼるものと思われるが、柱穴群の判別が難しく確実な三軒のみを建築址として把えた。

第1号掘立柱建築址（第21図）

遺構の構造

D、G地区に位置する。南西側に向って緩く傾斜する地点にある。約33本の柱穴が確認されている。規模は3軒×2軒であり、柱間寸法は桁行4.9m、梁行4.0m、柱間隔は一定でない。斜面上方の北側にはL字状に雨溝と思われる溝がめぐる。

遺物の出土状況

柱穴により若干の遺物が出土している。P1、2および25からは同一個体と思われる珠洲系陶器片口鉢片（第35図2、3）が出土。また、P11からは鉄製釘（第36図1）が出土。さらにP6からは銭貨「熙寧元宝」（第36図8）が出土している。

第2号掘立柱建築址（第22図）

遺構の構造

H－A－2区およびE－J－2区に位置する。北側の梁行部分は完掘できなかった。濠の5m程内側に位置し、濠にほぼ直交する。規模は4軒×3軒で、桁行9.8m、梁行5.4mを測る。柱間間隔は、桁行2.2m～2.5m、梁行1.5m～2.0mである。柱穴5には溝が認められる。

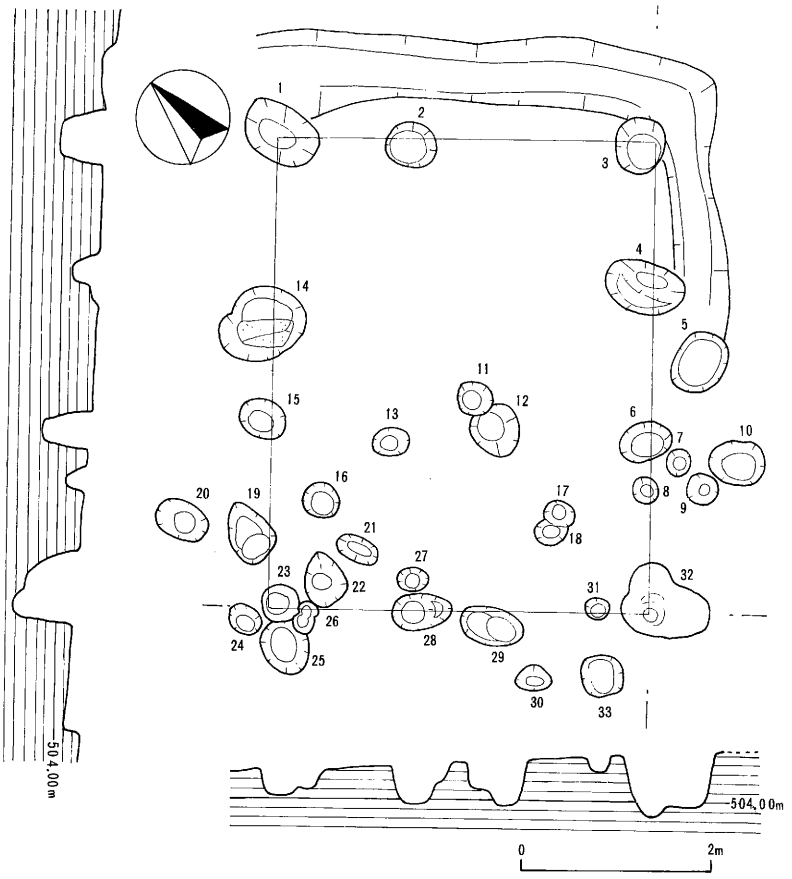
遺物の出土状況

建築址柱穴内および周辺より数多くの遺物が出土した。主な遺物は、周辺より中世土師器明皿（第32図5・8）、珠洲系陶器甕（第33図1）等の破片、柱穴5より銭貨「治平元宝」とともに骨片、炭片、柱穴12より天目茶碗等が出土した。

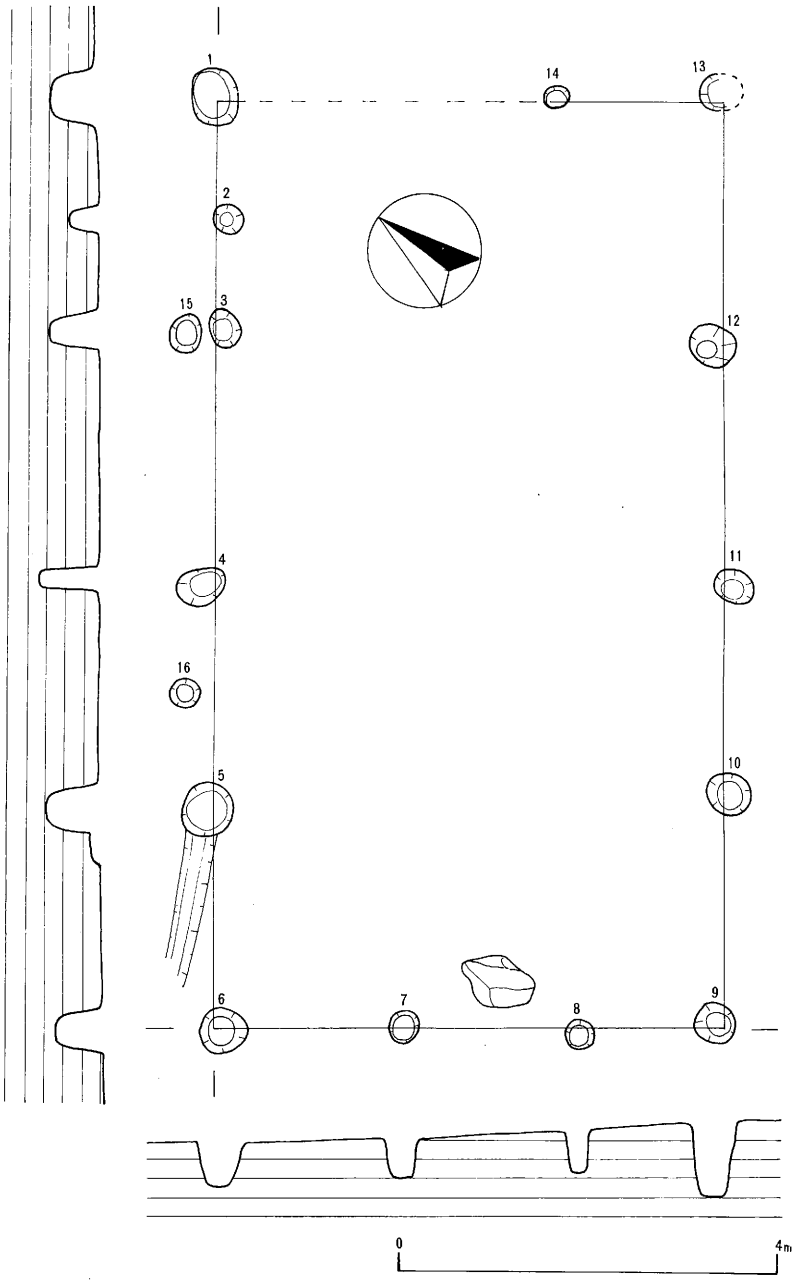
第3号掘立柱建築址（第22・23図）

遺構の構造

H－C、D－5～8区に位置する。一辺1.4×1.8mの大長方形の掘り方で、中世としては特殊な部類に属するのではあるまいか。規模は7軒×2軒と考えられ、桁行17.5m、梁行6.5mで面積約114m²の大型掘立柱建築址である。庇ははっきりしない。



第20図　第1号掘立柱建築址（1：80）



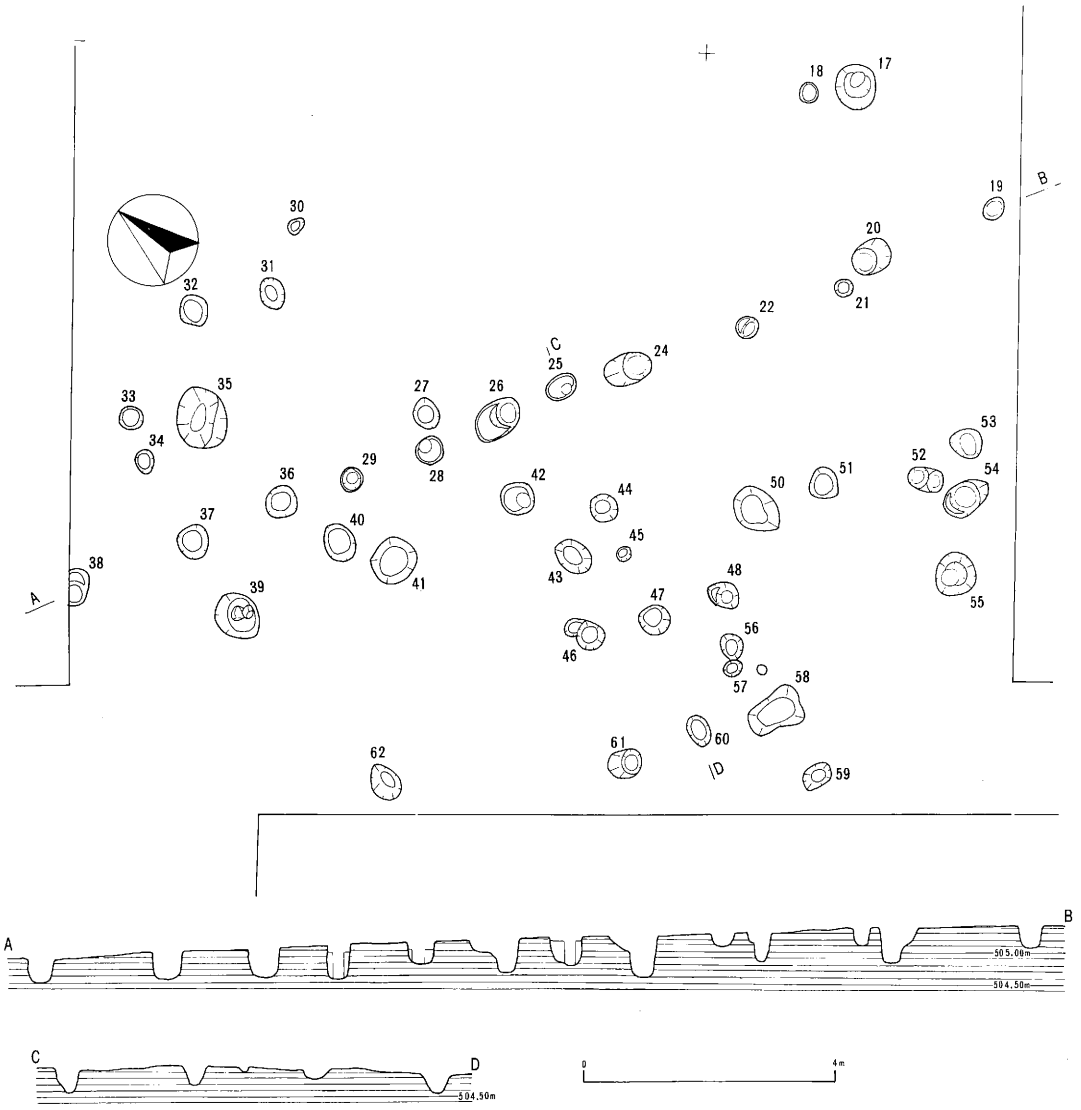
第21図　第２号掘立柱建築址（１：80）

遺物の出土状況

時間的な都合により掘り方全体まで完掘することができなかった。Ｐ３より珠洲系陶器片、Ｐ６より土師器灯明皿および銭貨「祥符通宝」が出土し、Ｐ９より青磁片、Ｐ10により珠洲系陶器片、Ｐ13より土師器灯明皿（第33図６）が出土している。

４、柱穴群

多くは掘立柱建築址となるものと思われるが充分な検討を施すことが出来なかったため、本稿では柱穴群として把えておきたい。



第22図　第１柱穴群（１：120）

第１柱穴群（第22図）

遺構の構造

D、G区、平安時代住居址の南側に集中する柱穴群である。P19～P62まで43本がある。P19・20・21・22・23・24・25・26・27・28・29・36・37・38は直線となり、柵列を想定し得るものである。多くの柱穴は覆土が黄褐色土層であるが、数箇所の柱穴では柱痕が認められた（P25・28・29)。

遺物の出土状況

小礫数個が底面に検出された柱穴は多いが、その他P24では割りピン状の鉄製品(第37図９)、P54で珠洲系陶器片口鉢片（第35図１）が出土している。

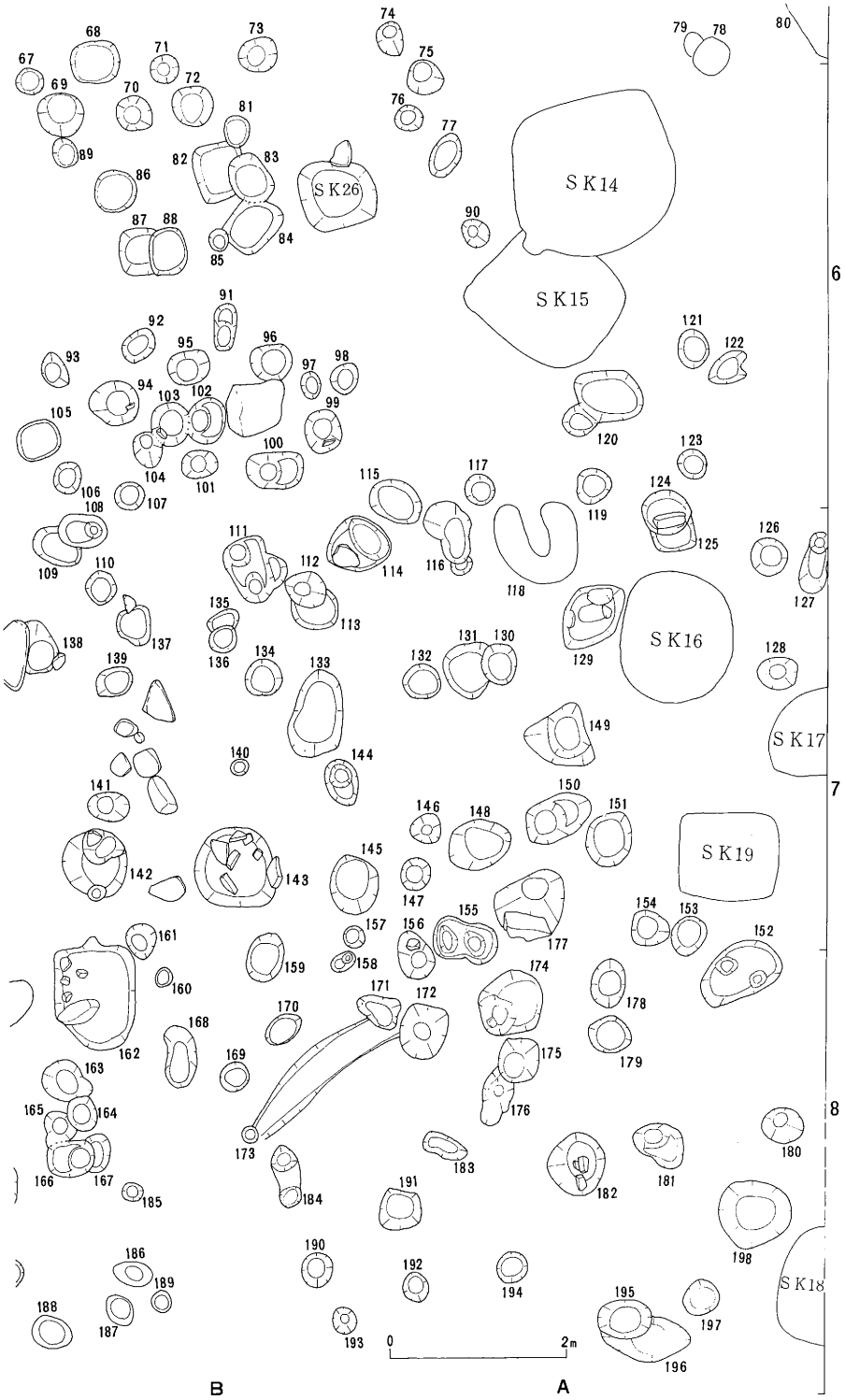
第２柱穴群（第23図）

遺構の構造

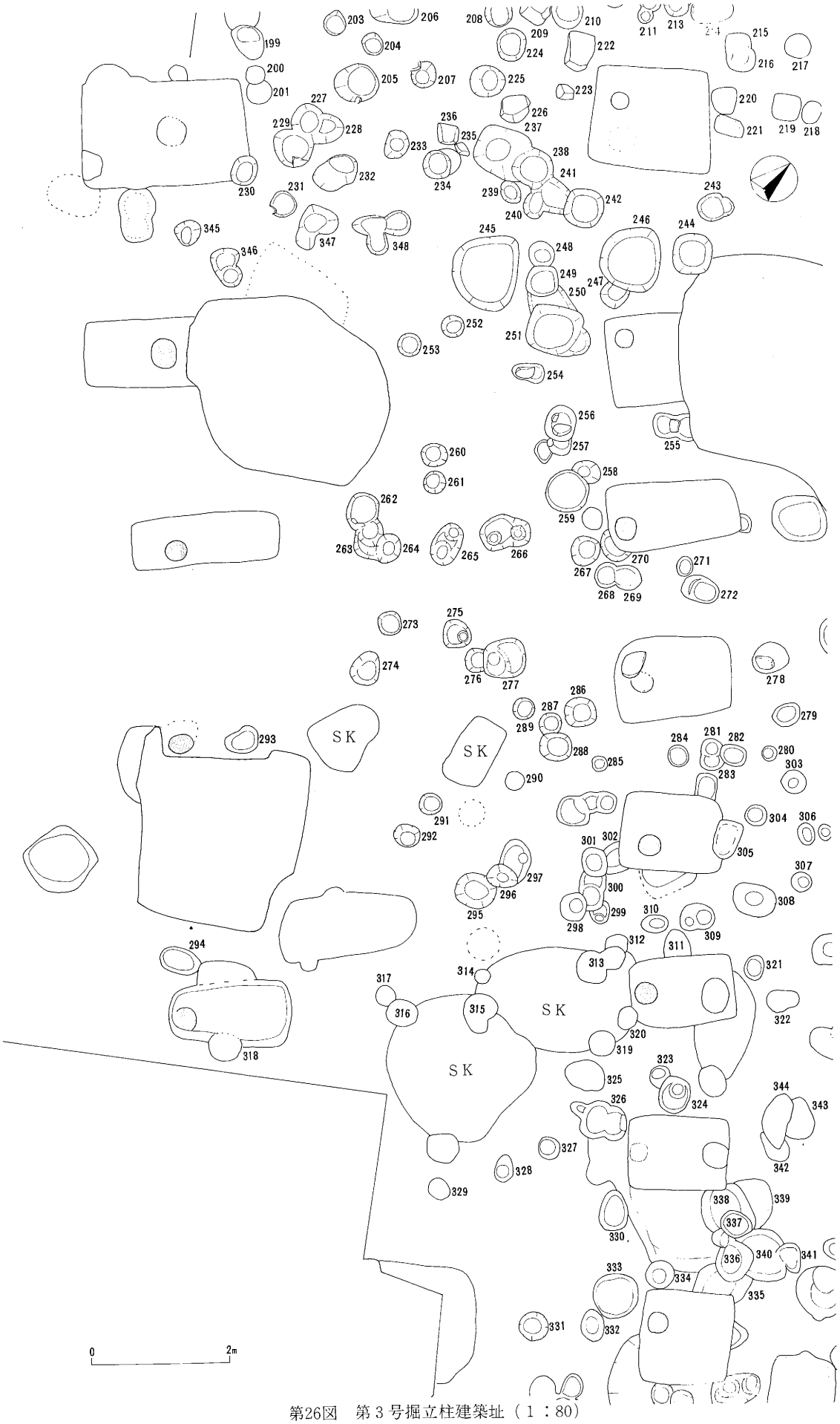
H－B、C－２、３区に位置する。２～３棟の掘立柱建築址が考えられる。深さは40～80cmと深い。

第23図　第２・３・４柱穴群（１：80）

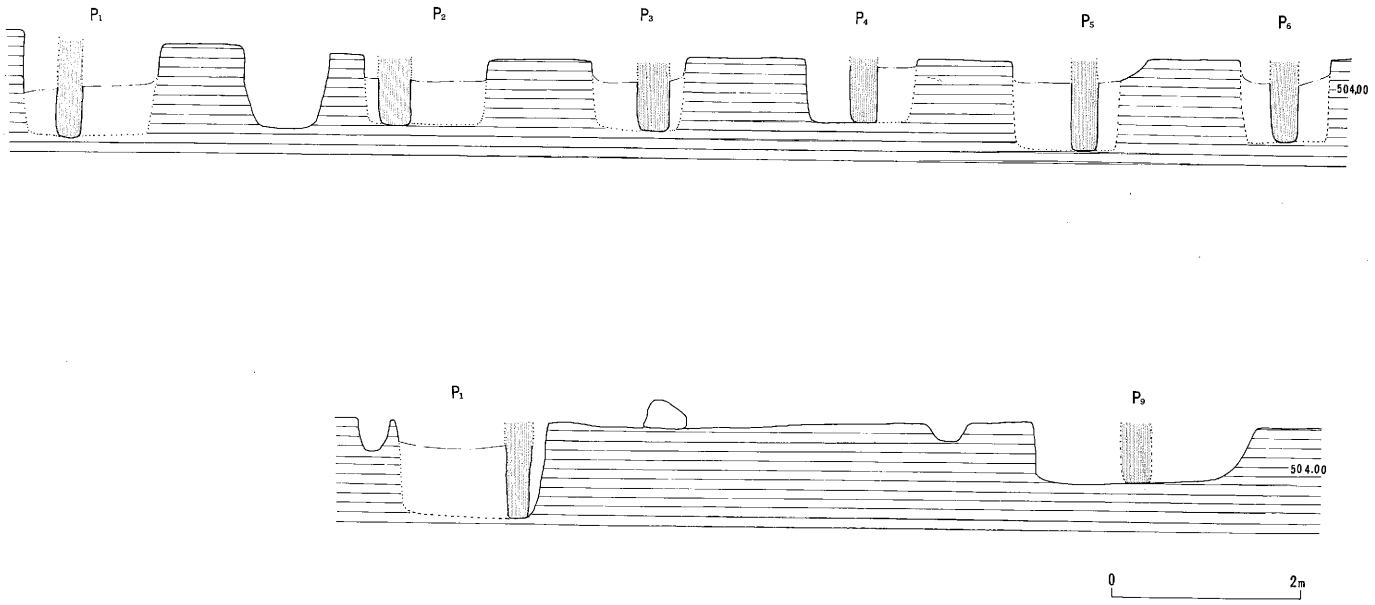
第24図　第５柱穴群（１：80）



第25図　第６柱穴群（１：80）



第26図　第３号掘立柱建築址（１：80）



第27図　第３号掘立柱建築址断面図（１：80）

遺物の出土状況

柱穴内より出土した主な遺物はP45より鉄製品（第37図４）、P31より砥石（第37図10）、P21より珠洲系陶器等出土している。その他確認面において、珠洲系陶器、土師器片が出土した。

第３柱穴群（第23図）

遺構の構造

H－D－２区を中心とし、第２柱穴群の南側に位置する柱穴群である。４×４mの方形掘立柱建築址を想定し得る。深さはそれぞれ異なるが中には１mにも達する深い柱穴も存在する。

遺物の出土状況

やはり各柱穴内より遺物が若干出土している。P５・17・21・26より珠洲系陶器片、P15より銭貨「淳化元宝」が出土している。

第４柱穴群（第23図）

遺構の構造

H－E－F、J－２、３区に存在する柱穴群を一括した。具体的な建築址の規模を推定できない。

第５柱穴群～第７柱穴群（第24図～第26図）

第５柱穴群～第７柱穴群までは具体的に類推することが困難であり、また各柱穴群を明確に分けることは不可能であった。したがって、視覚的には三群に分けたけれども柱穴番号は通し番号として呼称することにした。

遺構の構造

第５柱穴群は、H－B－５区を中心とする柱穴群である。少なくとも１棟の掘立柱建築址を推定できる。P６からP48を結ぶ線およびP37からP27の直結を桁行とするならば、およそ３軒×２軒の建築址が想定される。本柱穴群より珠洲系陶器が比較的多く出土している。

第６柱穴群はH－A、B－６～９区を中心として検出された柱穴群である。柱穴とした中には土壙も含まれるかもしれない。

第７柱穴群はH－C、D、E－５～９区に位置する。第３号掘立柱建築址周辺に検出されたもので、一部のピットは、あるいは庇、付属家屋となる可能性がある。

遺物の出土状況

各柱穴より中世土師器、陶磁器、鉄製品、石製品が出土した。

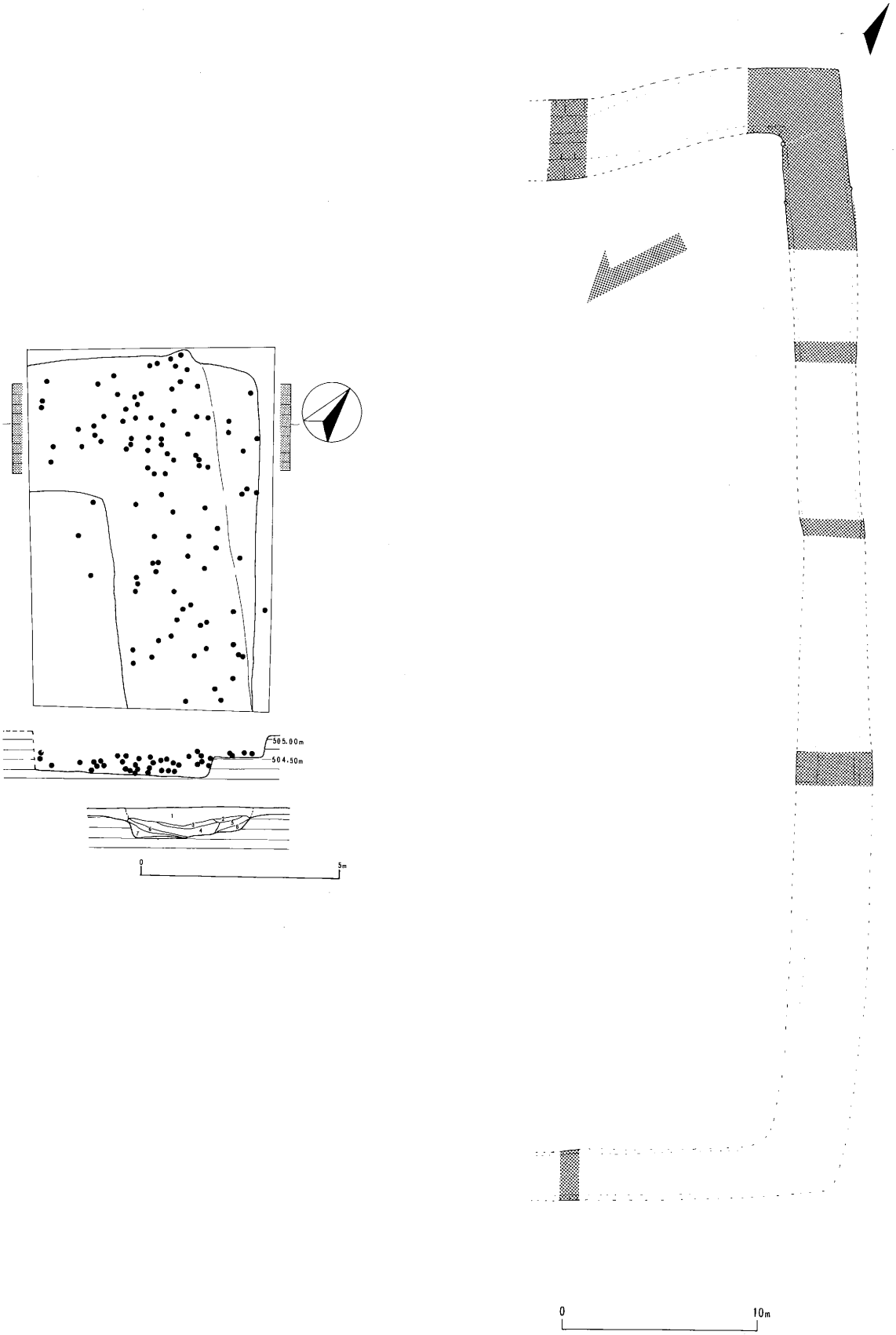
特徴的な遺物では、P244より釘（第36図２）、P109より石製硯（第37図13）、P111より刀子（第36図12）が出土、さらにP118より石臼（第38図１）が出土している。

５、濠址（第28図）

遺構の構造

大グリットH地区は周囲より一段高く平坦化された１辺50mのほぼ方形を呈する地区であるが、この地区をとり囲むように濠が検出された。

全体を明らかにすることは出来なかったが、北側半分を部分的に検出し得た。北側は幅約４mで深さ80～140cm、断面は地区によって異なるが、北コーナーでは鍋状、北辺中央付近はすり鉢状となっている。東西までめぐる事が確認されたが、南側まで構築されなかったようである。南側は土盛、削平を行なったと思われ、階段状となっている。低地との比高差は約２mを計測する。１mトレンチを崖下まで入れて調査を行なったが濠は検出されなかった。したがって、北側を中心としてコの字状になっていたと推測される。



第28図　濠遺物分布図・平面図（1：150・1：300）

遺物の出土状況

北コーナーにおいて比較的まとまって出土している。土師器灯明皿、磁器、鉄製品、珠洲系陶器と多種にわたる。

6、溝址

各地区において溝状の遺構を検出した。全体を明らかにしたものではなく、すべて部分的に検出したものである。

溝1

濠址の北側約5mに位置し、ほぼ濠と平行する。幅約105cmで、深さ50cm。断面はすり鉢状を呈す。覆土は暗褐色土層で、出土遺物はない。

溝2、3（第10図）

ともに2m幅を検出したのみで詳細は不明である。幅30cm、深さ20cmを測る。出土遺物はない。

溝4（第10図）

H－A－4区において検出。幅25cm、深さ10cmである。本溝址は竪穴遺構へ続くのではないかと推定し、試みにH－D－4区を試掘したところ、同方向、同規模の溝を検出し得た。時間的な制約により全体を検出することは出来なかったが、ほぼこの推定は間違っていないだろうと思われる。

溝5（第10図）

H－C－5区、約4mを検出した。幅40cm、深さ8cmを測る。出土遺物はない。

第Ⅳ章　遺　　物

第１節　平安時代の遺物

今回の調査で出土した平安時代に属する遺物は、遺物整理箱で３ケースと比較的少量であった。出土状況は前章で触れたように、Ｄ－Ｈ－５区を中心とする地区（第１号住居址－ＳＫ１）とＨ－Ⅱ区第10号土壙出土遺物のみに限定され、他地区からの出土は認められなかった。

遺物の種類は土器・陶器類が大部分を占め、その他鉄製品が１点出土している。本節では土器、陶器類について種別分類して説明を加えたい。鉄製品については１点ということもあり、中世の項でまとめて説明することにした。

遺物は、土師器・須恵器・灰釉陶器に分類される。

１　土師器

Ａ　坏形土器

個体数約20点のうち図化し得たのは10点にすぎない。分類するのにやや少量すぎるきらいはあるが、大まかにやや内湾ぎみな器形を呈し、底部および底部周辺をヘラケズリ調整を施すＡ－Ⅰ類、底部に回転糸切り痕をとどめ、内面が黒色処理の処されるＡ－Ⅱ類、さらに、その中間型とも言うべき、底部に糸切り痕をとどめ、内面は黒色処理が施されないＡ－Ⅲ類とに分類されよう。

Ａ－Ⅰ類（第29図１．２）

全形は窺えないが器高4.4cm、口径12.4cmと器高５cm、口径15.8cm（推定）の大、小形品がある。１、２とも底部および底部周辺が手持ちヘラケズリされる。

Ａ－Ⅱ類（第29図４～９・11）

器形的には細分されるが一括して説明する。４、５は体部下半に墨書のある土器である。４は「干」と読めるが、筆順から「十一」と記したものであろう。墨書土器は長野県内からも多数出土しているが、記号的な例として注意しておきたい。５は破損しているため全容は不明であるが、やはり○一と記され、記号的な意味が強いように思われる。６は、底部と体部とが明確でなく、体部にロクロ痕を残す。７は、器厚が極めて薄く胎土、焼成とも堅緻な土器である。９は体部に１～２条の棒状工具による研磨が行なわれる。

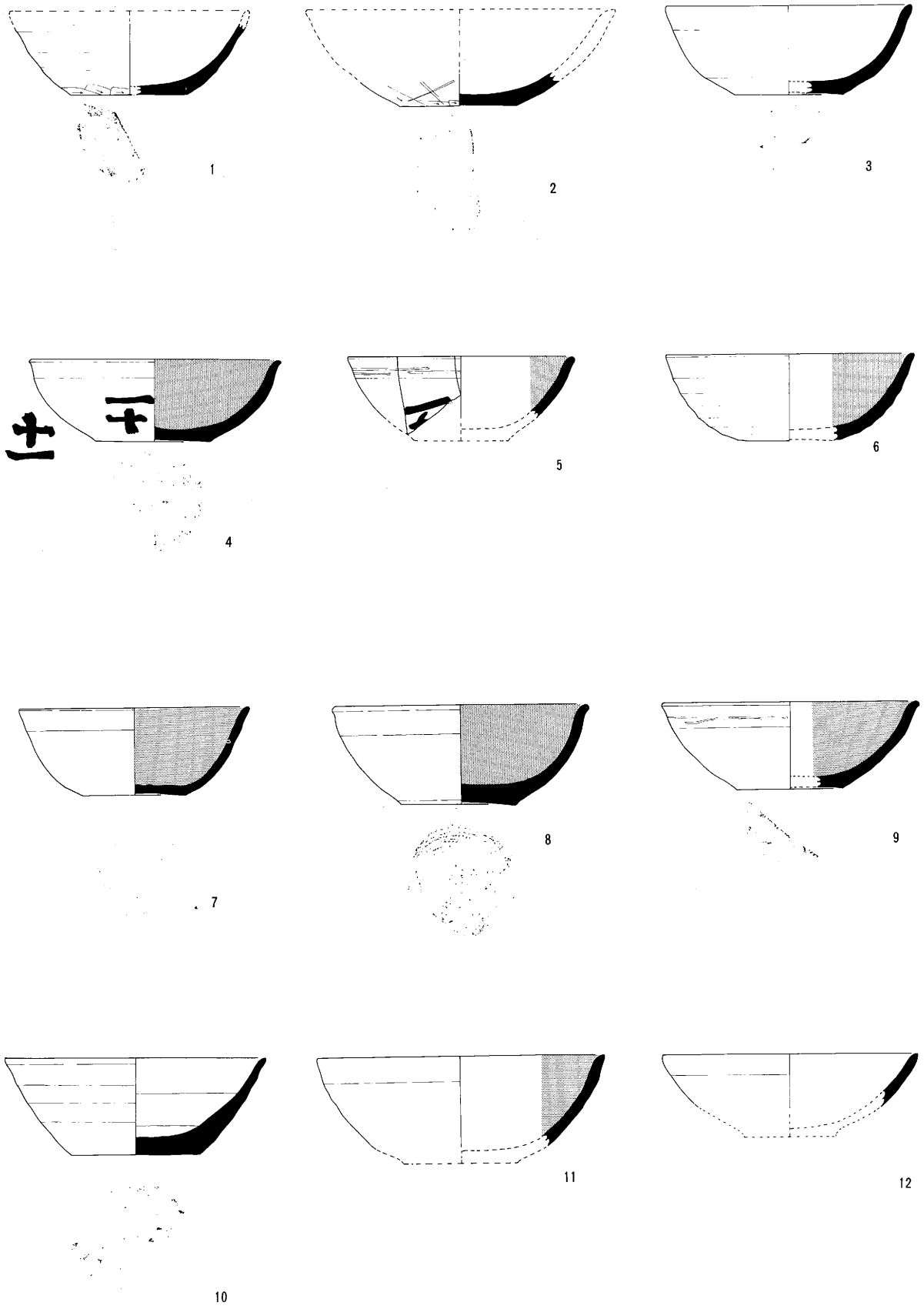
Ａ－Ⅲ類（第29図３、10、12）

３は、底部が明確でないが、糸切り痕をとどめている。10、12は中世に属する可能性がある。10は、口線端部にスス状の付着物が認められ、灯明皿的な使用方法が考えられる。12も同様、推定の器形より器高が低く皿形となる可能性がある。

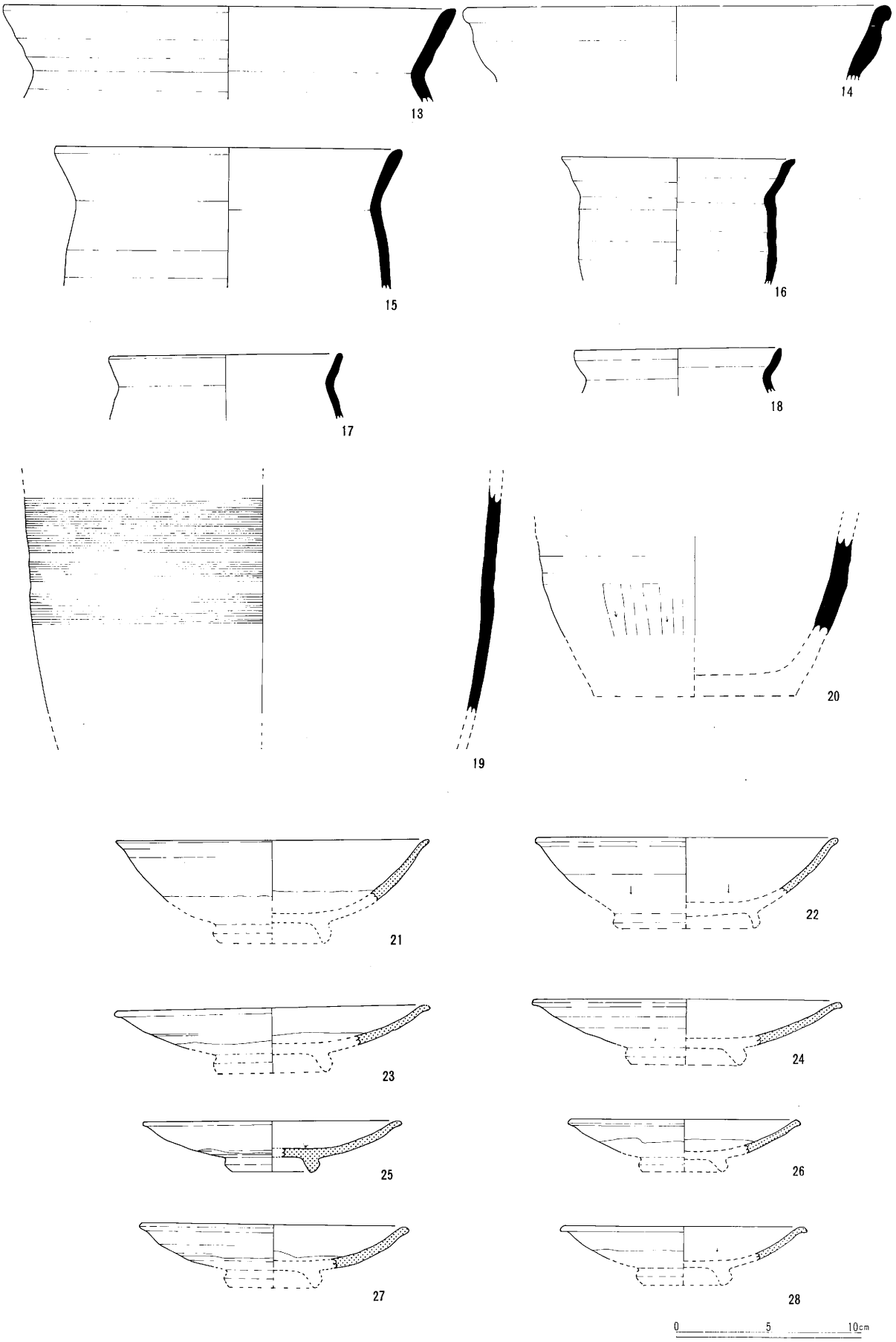
Ｂ　甕形土器

計８個体図示し得た。本種も、口径15cm以上の大形甕Ｂ－Ⅰ類、15cm以下の小形甕Ｂ－Ⅱ類に二分して説明する。

Ｂ－Ⅰ類（第30図14、19、20）



第29図　平安時代の遺物(1)（１：３）



第30図　平安時代の遺物(2)（１：３）

全形を窺える資料はないが、口径18.5～24cmを測る。内傾しながら立上がってきた体部が直線的に外反する。器内外ともヨコナデを行なう。14は口縁部外面には太い沈線がめぐる。乳褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。19、20は本類の胴部下半であろう。19は丸底となる甕と思われるが、器外面にハケ目状の条線が認められる。暗褐色を呈し、胎土には小石を若干含む。20は胴下半に縦位のヘラケズリが行なわれる。暗褐色を呈し、焼成は良好である。

B－II類（第30図16～18）

口径11cm～12.5cmの小形の甕である。16は口縁部に最大径を持つ。17は直線的に外傾し、18は、内湾ぎみに立ち上がり、口縁部が先細りになる。

2　須恵器（第31図）

すべて甕形土器である。29は図上復元である。平行タタキが全面に行なわれるが、その後部分的にカキ目が入れられる。条線は不明瞭である。表面には緑灰色の自然釉がかり、胴部半部は一部釉の落した部分も認められる。色調は灰白色、胎土、焼成ともに良い。30は口縁部の図上復元図である。口縁部分はロクロナデが行なわれ、胴部以下は平行タタキがなされる。色調は灰色で、胎土に砂粒を含む。焼成は良い。31は頸部周辺のみである。格子タタキが加えられ、内面には同心円タタキが行なわれる。焼成等は良い。32は大形の甕で、口縁部を僅に欠く。頸部より直線的に立ち上がり、口唇部がやや外反する形態をとる。平行タタキののち一定の間隔をおいてロクロナデがなされる。内面には同心円タタキがなされている。やや軟質であり、胎土には砂粒を含む。

出土地区は、すべて第１号住居址であり、31は濠出土例と接合している。

3　灰釉陶器（第30図21～28）

第１号住居址より８点の灰釉陶器が出土した。種別は椀が２、皿６で、いずれも美濃窯（東濃）産である。美濃窯の灰釉陶器の変遷はすでに確立されているので、それに従って述べることにする。なお出土陶器はほとんど破片であり図上復元によるものである。

光ケ丘１期

猿投窯黒笹90号窯式に対応されているもので、６点出土している。

椀　（21・22）

21は口径17cmを計測する。胴部がゆるやかに張りほぼ直線的に「ハ」の字状に開き、口縁端はやや外反する。色調は胎土が灰白色を呈し、釉は淡灰緑色を呈す。２は口径16.3cmを計測する。口縁端をまるく曲げ、やや外反する。色調は灰褐色を呈す。

皿（23～26）

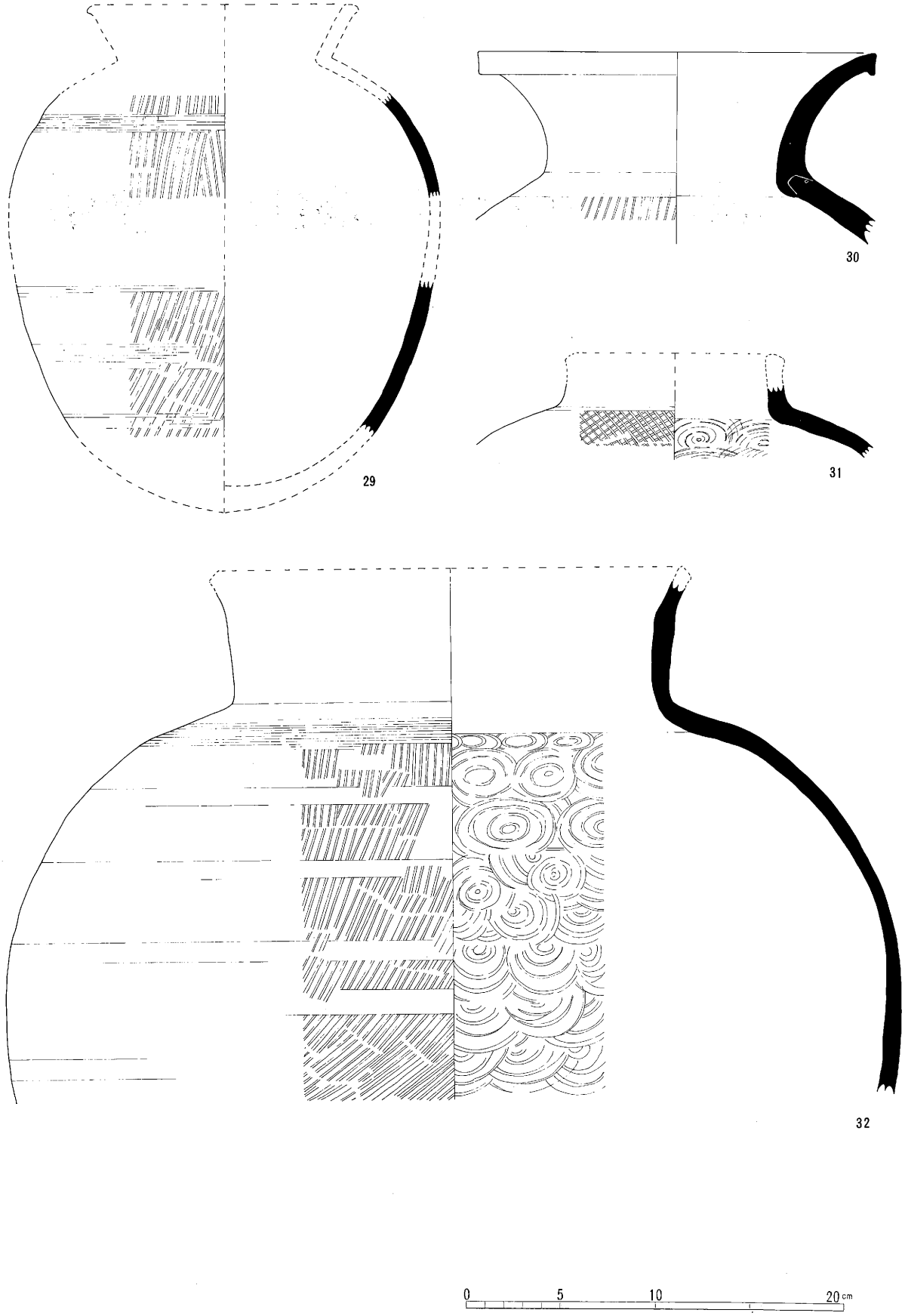
４個体出土している。いずれも胴中部より口縁にかかるものの破片であり、全形は不明である。23は口径17cmを計測する、24は口径16.4cm。23と同形態であり、色調ともに類似する。25は外面腰部にヘラ削り調整が施される。口径14.6cm。26は口径12.6cm。ほぼ直線的に口縁に達する。

大原２期

猿投窯折戸53号窯に対応されているもので、２点出土している。

皿（27・28）

27は口径14cm、器高2.7cmを計測する。胴部がやや張り口縁に達し、口縁端を少し外反させている。外面は腰部にヘラ削り整形を施している。28は口径13.4cmで、口縁端を外反させている。ともに緻密な胎土で、色調は灰



第31図　平安時代の遺物(3)（１：３）

褐色、釉は淡白緑色を呈す。

以上の灰釉陶器はすべて清け掛けの灰釉である。

第2節　中世の遺物

遺物は、濠内の各遺構出土例を中心として、土器、金属製品、石製品など多種にわたっている。資料的には、図化可能な遺物が比較的少ないこともあり該期の全容を示しているとはいえないが、中世研究の好資料となろう。

1　土器

土器には、土師器、内耳土器、中国陶磁・国内産陶磁が出土している。

A　土師器（第32図1～14）

器形の判別ができるのは第32図のとおりで、14点と少ない。形態的にはすべて皿形土器であり、器形と器高、及び整形手法によりⅠ～Ⅲ類に分類される。

皿Ⅰ類　口径6～6.5cm、器高1.5cm～2cmの小形品で、外表面にロクロ整形痕が目立つ。（1～6）

皿Ⅱ類　Ⅰ類よりやや大形で、口径7cm、器高2cmで、底部を指オサエ・ナデによって丸底化した土器である。（7）

皿Ⅲ類　Ⅰ、Ⅱ類よりさらに大形で、口径8～10cm、器高2～2.5cmを測る。この類には板状と呼べる類等が含まれる。（8～14）

以上の土師器皿のは総て口縁端にススの付着が認められ灯明皿としての機能が窺える。

B　内耳土器（第32図19・20）

内耳土器は、竪穴遺構と第4柱穴群31より計2個体出土した。いづれも細片で図上復元によるものである。

19は「く」の字状に屈曲しながら外反する口縁部で、口縁部内側にも稜を残す。20もやや外反する器形を呈する。ロクロ整形で、口縁部内外面はロクロ成形痕が顕著である。

C　中国陶磁（第32図15・16・口絵）

いずれも小破片のため、図化し得たのは僅である。種別は青磁6点、白磁1点である。

青磁（第32図15・16・口絵）

碗　5点出土している。15は蓮弁文を有する高台部分である。当遺跡出土磁器類の中でもっとも美しい釉調を持つ。青みがかった明るい若草色を呈する。16は、やや濁った緑色が加わった釉調を呈する。口縁がやや外反している。

鉢　1点出土している。細片のため詳細は不明である。

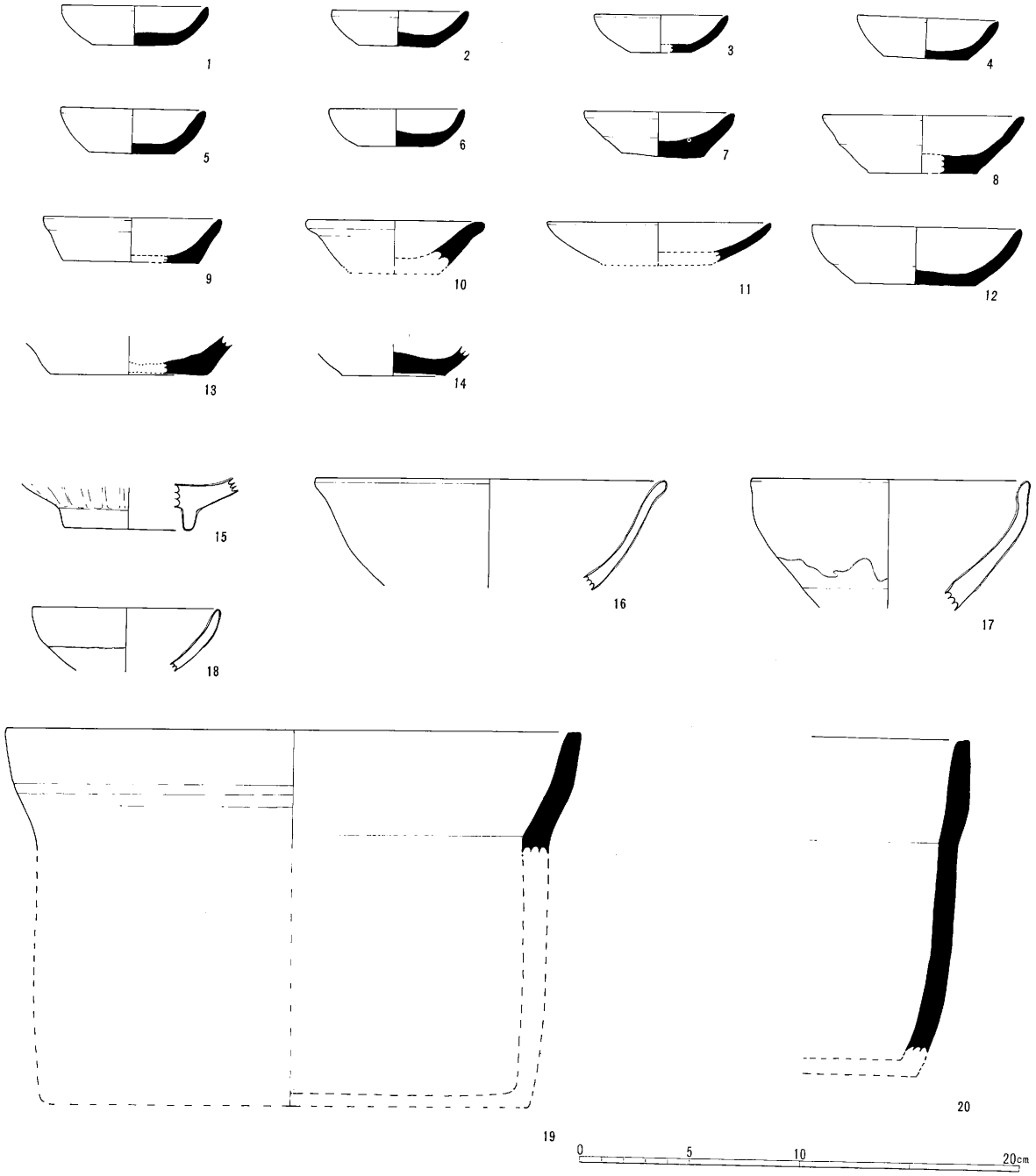
白磁（口絵）

細片のため器形は明らかでないが小皿であろうか。

なお、その他に中国陶磁と思われるもので、黒釉のかかった壺が出土している。これらの中国陶磁は14世紀後半～15世紀代に比定される。

D　日本製陶器（第32図17・18・口絵）

日本製陶器類は施釉されたものと施釉されないものに二別できる。前者は瀬戸系、後者は珠洲系陶器である。器種はバラエティーに富み、特に瀬戸系陶器は図化し得る資料は少ないが各種ある。



第32図　中世の土器１（土師器･陶磁器･内耳土器）（１：３）

瀬戸系（第32図17・18・口絵）

17は推定口径約12.5cmで、体部上半がやや内湾する器形をとる、いわゆる「天目茶碗」である。内外面に鉄釉が施されている。18は美濃系の鉄釉小皿であろう。いずれも15世紀代である。

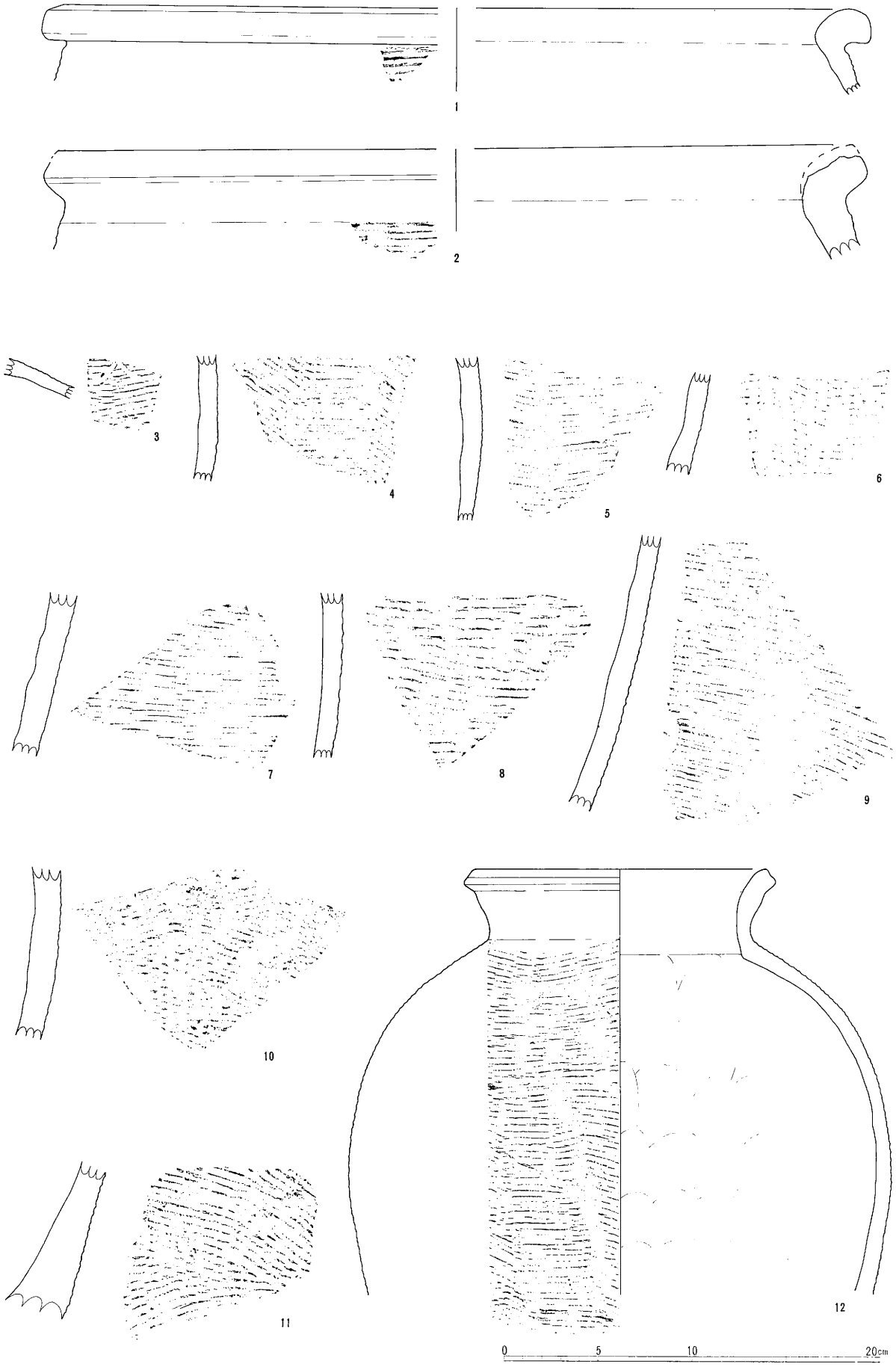
その他図示した以外に皿、壺、仏華瓶、鉢等が出土している。これらすべて灰釉のかかった瀬戸である。

珠洲系（第33図～第35図）

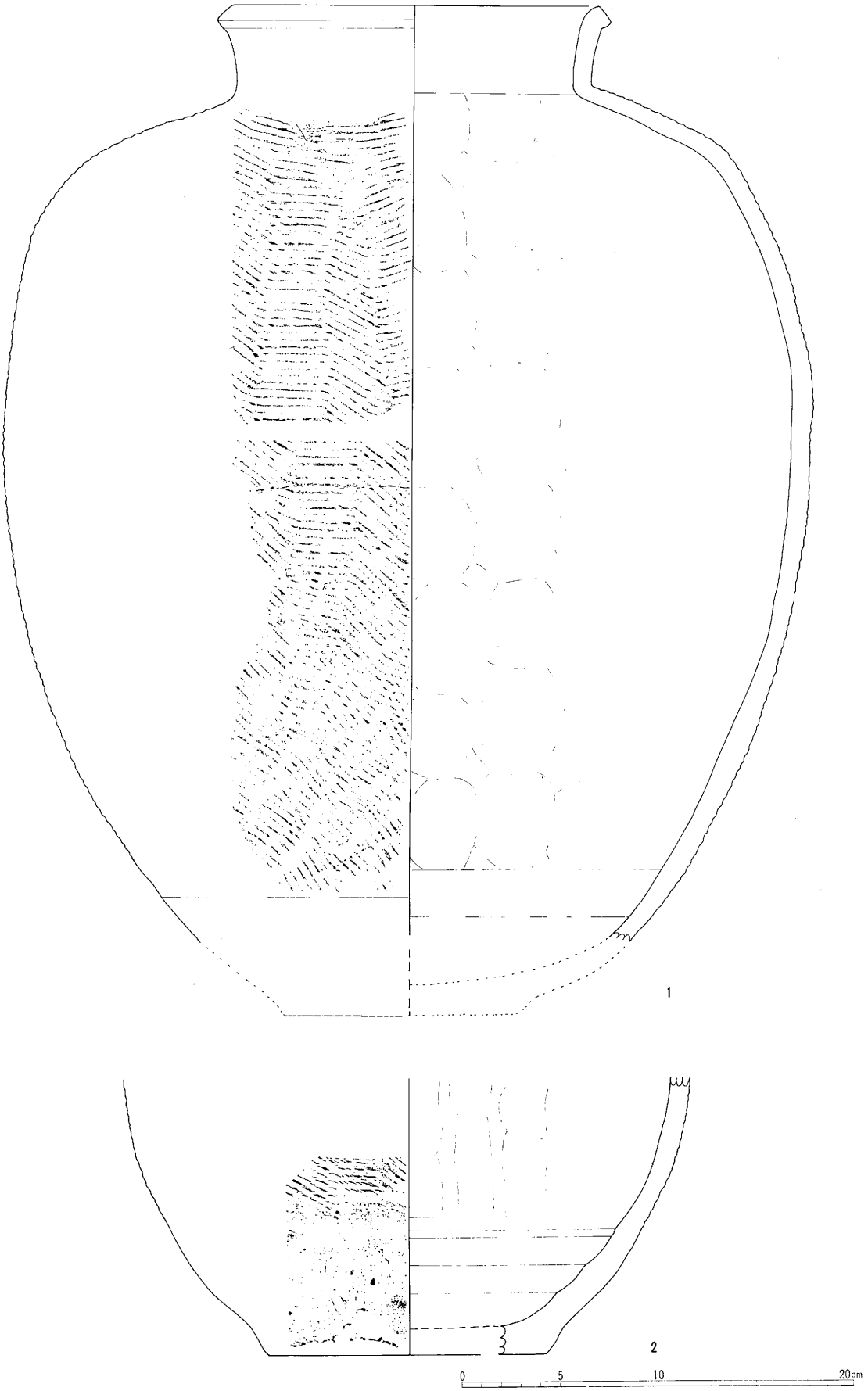
今回の調査で出土した中世陶器では最も豊富である。胎土、色調は全て須恵器質で、器種は甕、壺、片口鉢に三区分される。

甕（第33図１・２）

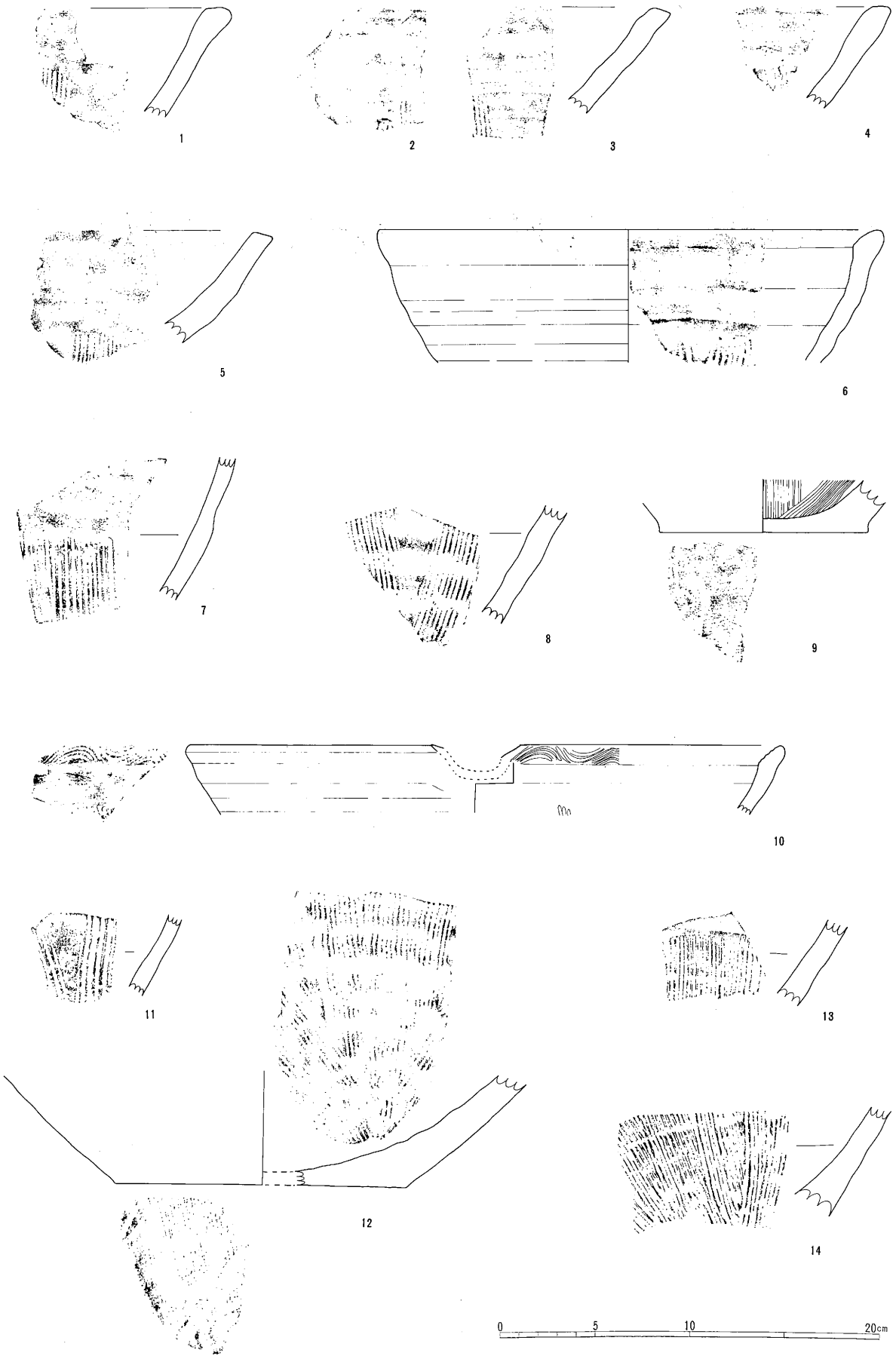
いずれも細片の口縁部破片で、口径復元値は得られなかった。



第33図　中世の土器２（珠洲系陶器１）（１：３）



第34図　中世の土器３（珠洲系陶器２）（１：３）



第35図　中世の土器４（珠洲系陶器３）（１：３）

1は短い口縁を玉縁状に肥厚させたもので口縁部は角ばった面となっている。2は口縁をくの字状に屈折させ、頸基部よりやや下がった位置よりタタキはじめる技法をとる。

壺（第33図3～12、第34図）

壺はすべて壺T種とされるもので、叩打によって器形を最終的に整える紐叩打成形によるものである。

3は唯一の刻印の認められる破片で、全体は不明であるが「刻文」と称されるものであって、「大」もしくは「六」であろうか。4～11は壺破片と思われる。外面は3cmあたり10本前後の叩打痕があり、内面は無文の円形あて具痕が明瞭に残されている。12は口縁部より胴下半に至る部分約⅓の破片を図上復元したもので、口径約16cmを測る中形の壺である。器体の大部分を粘土紐巻上げ、タタキしめ成形をしており、ゆるやかに外反しつつ立ち上がり、口縁先端はやや肥厚する。第34図1は口径18.5cmを測り、やや肩の張った長胴形を呈する。口縁が頸基部より真直ぐ立ち上がり、端部をわずかにひき出している。外面は胴下部より上部をタタキしめ成形しており、胴下部以下はロクロ成形によっている。2は胴下半より底部に至る部分で、1同様の形態を有するものと思われる。胎土は1が灰白色で硬質であるのに対し、やや軟質の感じを受ける。

片口鉢（第35図）

片口鉢は、内面に数条の卸し目を施したいわゆる摺鉢と称されるものである。すべてロクロ成形によるものである。破片が多く完形となる資料はなかったが個体数は約15点と多い。

1～5は、口縁端の形態がほぼ同様で、水平あるいはやや外削ぎに面をとっている。内面は5では12条の比較的細かい御し目を認められる。

6はやや内湾ぎみに立ち上がり、先端をやや丸くする形態をとる。内面の御し目は、胴中位より施される。内外面ともロクロ痕が著しい。

7は6同様に胴中位より12単位で御し目が施されている。

8は胴下部片である。比較的太い御し目が直線的に施されている。

9は底部で、静止糸切り痕をとどめている。本例は他の珠洲系陶器と比較してやや黒ずんだ色調を呈している。

10は模式図であるが、口縁端内面に櫛歯波状文が施される例である。

12は底部および底部周辺で、密な御し目が施されている。底部には静止糸切り痕が認められる。

2　鉄製品（第36・37図）

各遺構より散在的に鉄製品の出土をみた。総数で23点、内訳は鉄釘10点、刀子2点、麻慳状2点、急須状1点、不明8点である。時期的には、平安時代麻慳1点を除き他は出土遺構、伴出遺構により中世に比定される。

1)　鉄釘（第36図1～10）

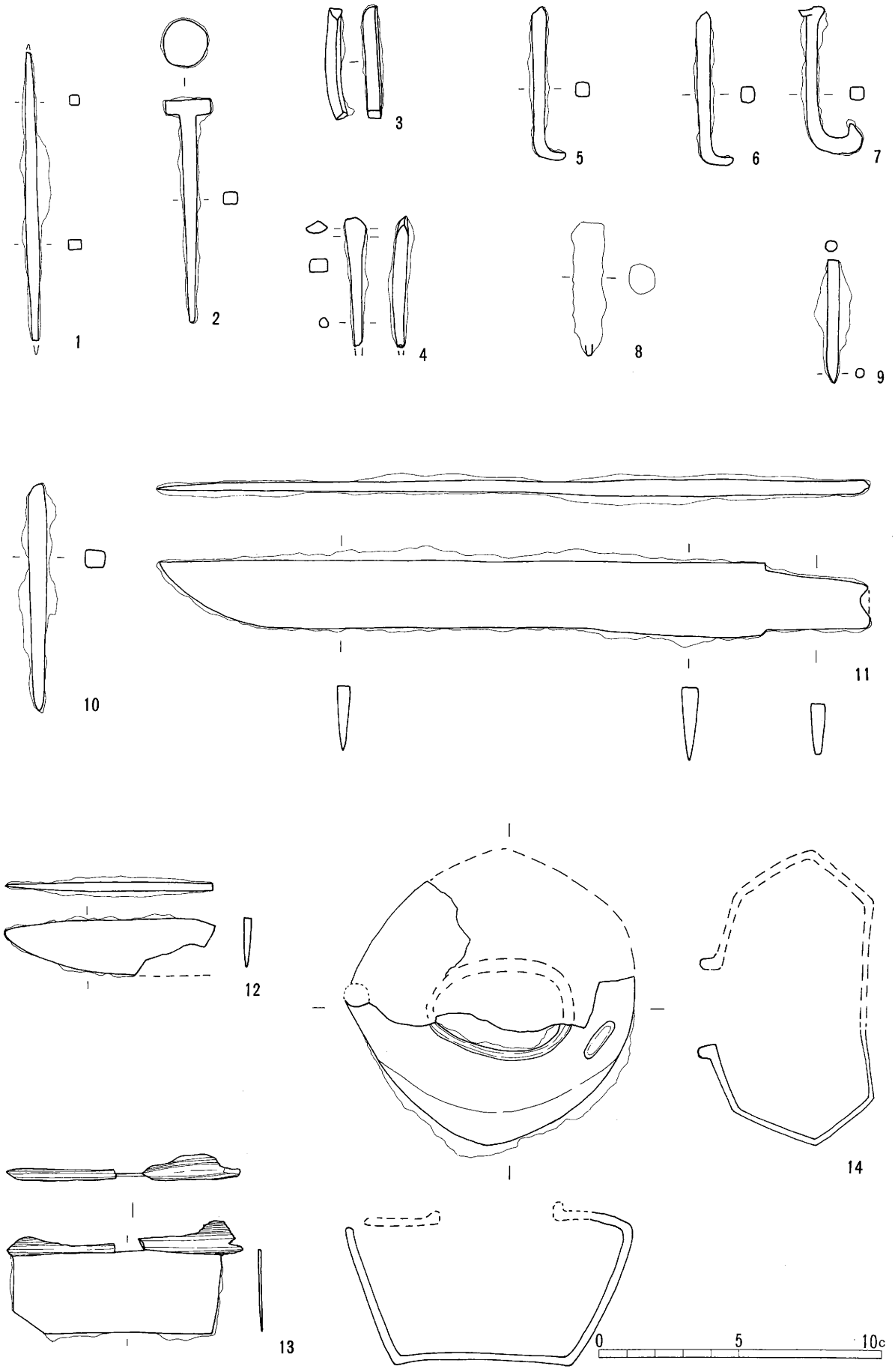
10点と少量ではあるが、種類はバラエティーに富む。1はいわゆる「合釘」とされるものである。2は環頭釘であり遺存状態は良い。4は頭部の造り出しを両側より叩き延し板状を呈するもので忍釘となるものであろう。5・6・10は頭部造ち出しが明確でないが、片側より叩き尖頭状となるもので、やはり4同様忍釘となるものである。

7は、頭部が叩き延した後折り曲げたものである。9は唯一の断面円形の釘である。

各遺物の出土地点は、1・第1号掘立柱建築址6・2・第7柱穴群244、3。4・9が濠、5・6、第2柱穴群44、7は竪穴遺構、8、第6号土壙、10・第2掘立柱建築址P7である。

2）刀子（第36図11・12）

2点出土している。11は全長25cm、刃部の長さは21.4cm、茎は破損しているが現在長3.7cm、身幅2.3cmであ



第36図　鉄製品（１：２）

る。棟は平造りで反りはなく、目釘孔は認められない。竪穴遺構の溝付近の出土で、覆土上部より水平な状態で出土したものである。12は第6柱穴群111の出土で破損品である。11例より小形品であろう。

3）麻慴（第37図13・第38図1）

名称として相応しいかどうか、民俗例に類例があるので敢えて呼称することにした。

13は濠出土。刀部背側に木質部が残存しており、機能面（刃部）に対する基部として考えられる。すなわち、把手であり反対側に位置する刃部は、対象物に対して直角に近い角度を持って機能するものと考えられる。したがって、包丁のように上下運動により機能を果たすというより、慴く（スクレイパー）機能を考えた方が自然であろう。1は岡田氏によって「麻皮削器」と呼称されているもので、平安時代住居址より出土した。両側が角状に突出しており、左右対象形を呈すものであろう。現在長8.5cmを測る。

4）　その他（第37図2～9）

具体的な名称の不明なものを一括して述ることにする。

2は一見時計の発条回しに類似する。3は鍬先に似ているが、全体の形状が不明のためはっきりしない。5はリング状のものである。4・6～8は板状の鉄製品であるが、いづれも破損しているためはっきりしない。一部の例は刀子に含められるものもあろう。9は、割ピン状のものである。頭部に2mm程の孔がある。胴部が割れているのかどうか錆のためはっきりしない。

2・6・8は濠、4はH－E－3区、5・竪穴遺構、7・H－D－5ピット、10は第1柱穴群24、それぞれより出土している。

3　石製品（第37・38図）

石製品には、砥石、硯、剝片、石臼、鉢がある。

1）　砥石（第37図10～12）

3点出土している。11例は平安時代住居址の周辺ピット1より出土しているので平安期に比定されるものと思われる。10は第2柱穴群31出土。12は第6号土壙出土である。いづれも伴出遺構等により中世に比定される。

10は、正面側に平行な線条痕の認められるもので、全長9.5cm、幅3.5cm、厚さ1.2cmを測る。4面がすべて使用されているが、正面以外は平坦な面となっている。11は破損品であるが全長5.4cm、幅1.2cm、厚さ1.5cmを測る。端部が丸味を帯びている。12は全体の形状は不明であるが、各面とも数面の研磨痕が認められ、手持ちによる仕上砥としての用途が理解できる。

2）　硯（第37図13）

第6柱穴群109の出土で、破損している。長方硯で、現在長5.2cmを測る。

3）　剝片（第37図14）

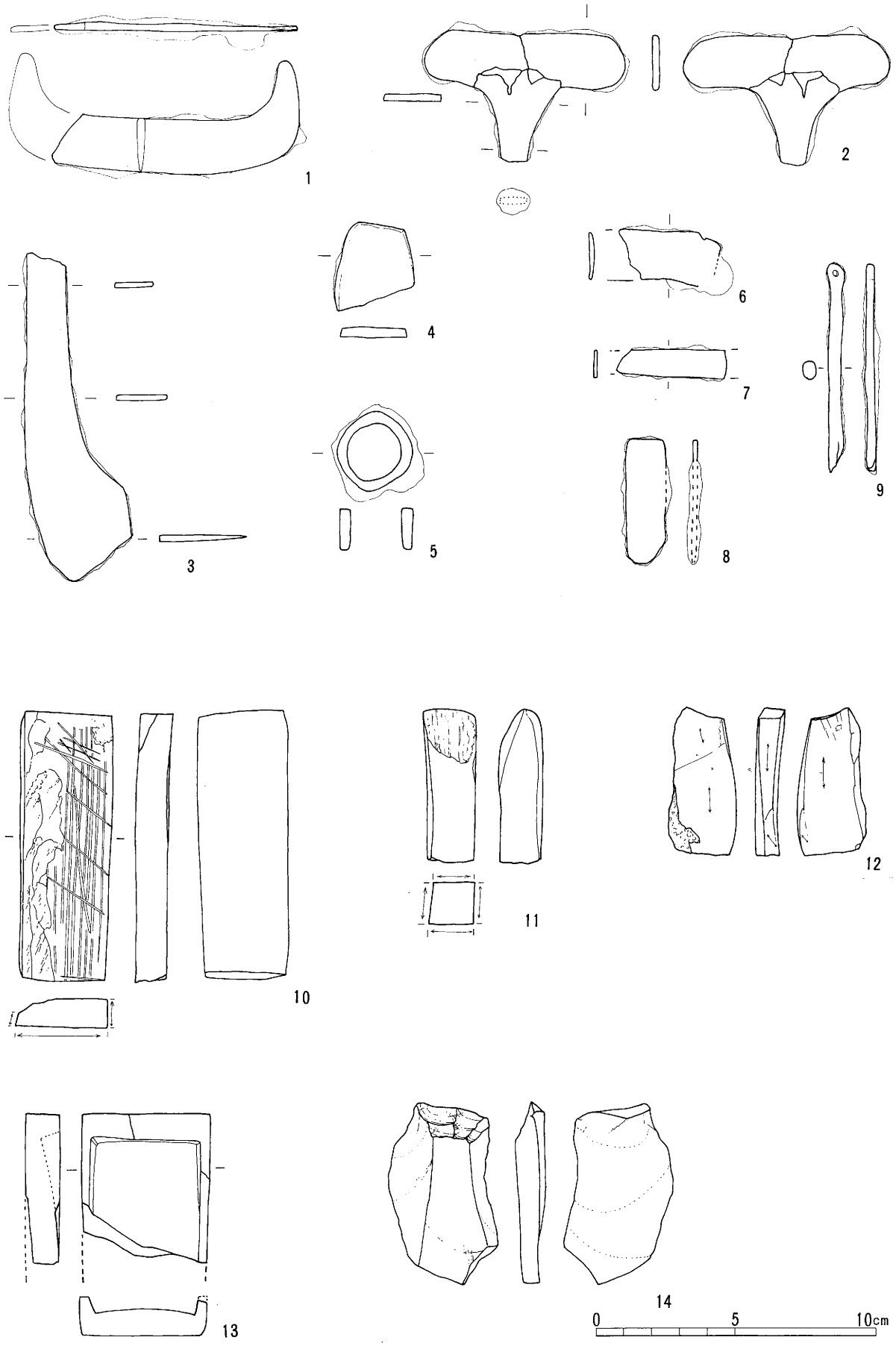
第2柱穴群47の出土で、混入品であろう。打面調整の施された石核より作出されたもので、正面には他方向からの剝離が認められる。安山岩製。

4）　石臼（第38図1～4）

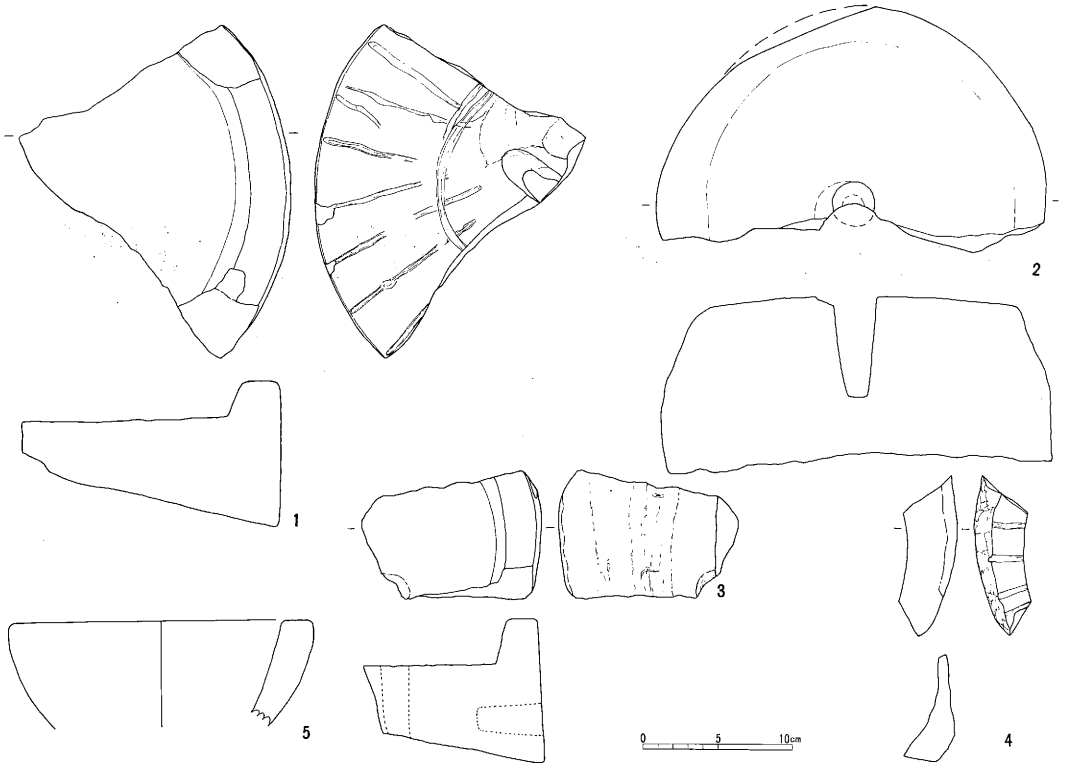
1は、上臼で約1/5残存する。麻臼の目は不整然のためはっきりしないが6分画であろうか。「こくおとし」、「芯うけ」が認められる。離面のへこみは大きい。2は下臼で約1/2残存する。溝等は認められない。3・4はいづれも上臼である。3は「挽手孔」が認められる。

5）　鉢（第38図5）

1/6程残存する。捏鉢であろう。



第37図　鉄・石製品（１：２）



第38図　石製品（１：２）

4　銭貨（第39図）

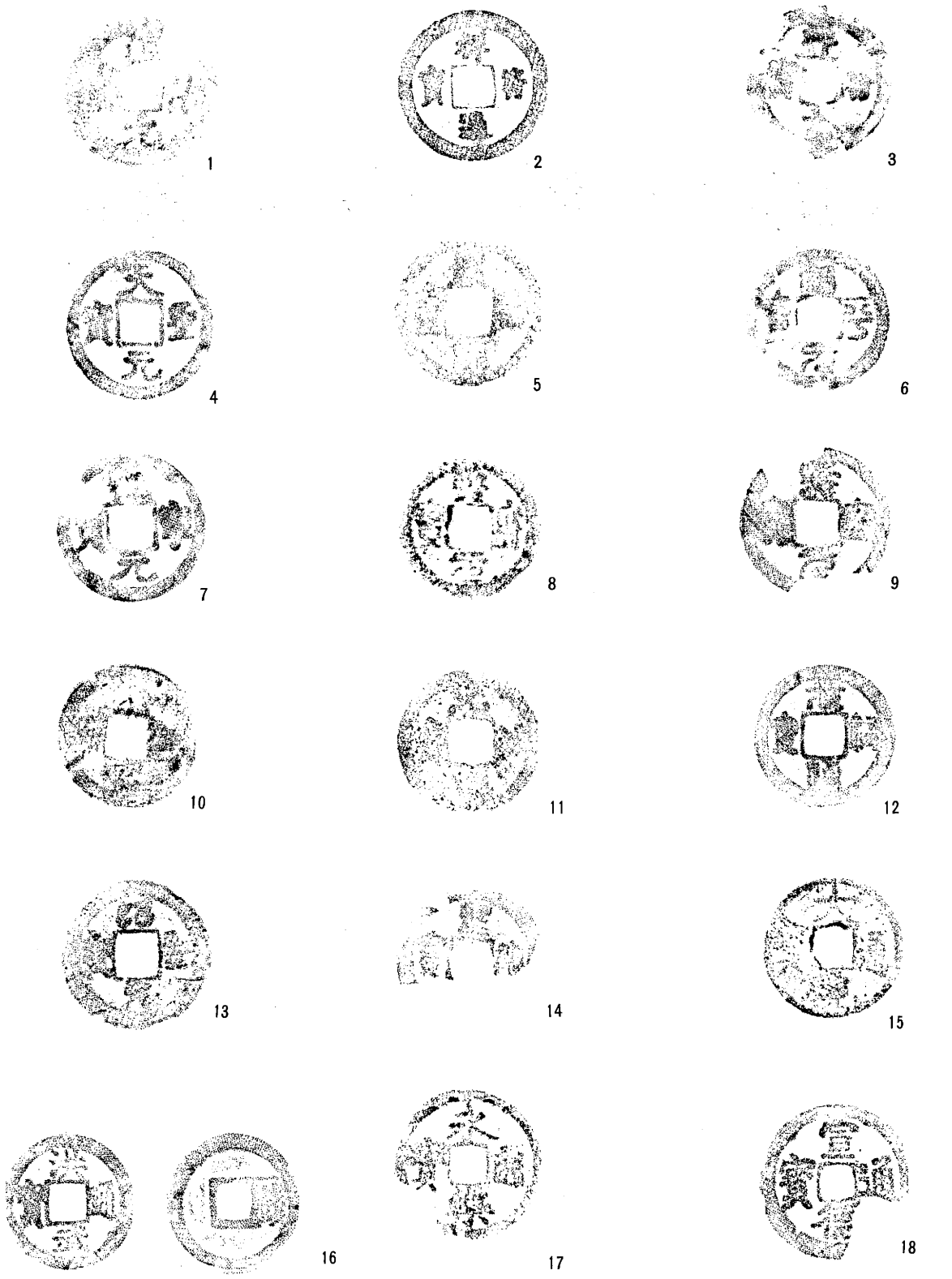
中国宋の淳化元宝から明朝の宣徳通宝まで22枚の銭貨が出土した。日本では皇朝十二銭以後公的な鋳銭は行なわれず、渡来銭を使用した。初鋳年が1000年代の銭貨が多いが、流通年代は中世と考えるのが妥当であろう。

宋銭　淳化元宝、祥符通宝、祥符元宝、天聖元宝、皇宋通宝、治平元宝、熙寧元宝、元祐通宝、紹聖元宝、聖宋元宝、大観通宝、以上11種類15枚出土している。出土状況は、各遺構内より散在的に出土したものであるが、10・11・15の３枚は重なって出土したものである。また、これらの銭貨はすべて輸入銭ではなく、通称鐚銭（ビタ銭）と呼称される、木邦模造銭も含まれている。本稿ではこれらの分類について明確に出来なかったが、例えば、６治平元宝、８熙寧元宝、９熙寧元宝などは異字体であって、私鋳銭と考えられるものである。

明銭　洪武通宝、永楽通宝、宣徳通宝の３種類３枚がある。洪武通宝の背右側には「一銭」とある。

図版No.	銭　文	初鋳年	径(cm)	出土遺構	備　考
1	淳化元宝	990	2.5	第３柱穴群15	一部欠
2	祥符通宝	1008	2.5	ＳＢ３ピット	完　形
3	祥符元宝	1008	2.4	E-H-2濠上面	３　片
4	天聖元宝	1023	2.4	第4柱穴群188付近	完　形
5	皇宋通宝	1039	2.5	第５柱穴群１	完　形
6	治平元宝	1064	2.4	ＳＢ2ピット５	完　形
7	熙寧元宝	1068	2.5	第５柱穴群２	一部欠
8	熙寧元宝	1068	2.3	ＳＢ1ピット６	完　形
9	熙寧元宝	1069	2.5	第14柱穴群11	一部欠
10	元祐通宝	1086	2.4	第３柱穴群33	3枚重ね
11	元祐通宝	1086	2.4	第３柱穴群33	3枚重ね
12	元祐通宝	1093	2.4	E-H-９	完　形
13	紹聖元宝	1094	2.5	第３柱穴群44	完　形
14	聖宋元宝	1101	—	竪穴遺構	一部欠
15	大観通宝	1107	2.3	第３柱穴群33	3枚重ね
16	洪武通宝	1368	2.2	ＳＫ４	離面一銭
17	永楽通宝	1408	2.5	竪穴遺構	一部欠
18	宣徳通宝	1426~1433	2.6	ＳＫ24	$\frac{1}{4}$　欠
19	不明		2.4	竪穴遺構	$\frac{1}{3}$　欠
20	不明		2.3	竪穴遺構	一部欠
21	不明		(2.1)	竪穴遺構	一部欠
22	不明		2.3	ＳＢ２付近	半　割

第２表　渡来銭一覧表



0 10 cm

第39図　銭貨（１：１）

図版番号	遺　　構	種　別	器　種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備　　考
29—1	第1号住居址	土師器	坏	—	6.0	—	
2	第1号住居址	土師器	坏	—	6.0	—	
3	第1号住居址	土師器	坏	12.6	5.6	4.6	
4	第1号住居址	土師器	坏	13.0	6.0	4.1	墨書・内面黒色
5	第1号土壙	土師器	坏	11.7	—	—	墨書・内面黒色
6	第1号住居址	土師器	坏	12.8	5.3	4.5	内面黒色
7	第1号住居址	土師器	坏	11.8	5.3	4.5	内面黒色
8	第1号住居址	土師器	坏	13.0	5.8	5.1	内面黒色
9	第1号住居址	土師器	坏	13.0	5.5	4.5	内面黒色
10	第10号土壙	土師器	坏	13.4	6.6	5.0	
11	第1号住居址	土師器	坏	14.3	—	—	内面黒色
12	濠	土師器	坏	13.1	—	—	
30—13	第10号土壙	土師器	甕	24.0	—	—	
14	第1号住居址	土師器	甕	22.2	—	—	
15	第7号土壙	土師器	甕	18.3	—	—	
16	第7号土壙	土師器	甕	12.4	—	—	
17	第1号住居址	土師器	甕	12.2	—	—	
18	第1号住居址	土師器	甕	11.0	—	—	
19	第1号住居址	土師器	甕	—	—	—	
20	第1号住居址	土師器	甕	—	—	—	
21	第1号住居址	灰釉陶器	碗	16.7	—	—	
22	第1号住居址	灰釉陶器	皿	12.1	—	—	
23	第1号住居址	灰釉陶器	皿	12.7	—	—	
24	第1号住居址	灰釉陶器	皿	13.8	4.3	2.7	
25	第1号住居址	灰釉陶器	皿	14.1	—	—	
26	第1号住居址	灰釉陶器	皿	15.5	—	—	
31—27	第1号住居址	須恵器	甕	—	—	—	
28	第1号住居址	須恵器	甕	20.8	—	—	
29	第1号住居址	須恵器	甕	—	—	—	
30	第1号住居址	須恵器	甕	—	—	—	
32—1	H—B—7	土師器	皿	6.5	3.2	1.7	
2	第16号土壙	土師器	皿	6.1	3.3	1.6	
3	H—C—7	土師器	皿	6.0	2.7	1.7	
4	第5柱穴群117	土師器	皿	6.2	3.7	1.8	
5	第2掘立柱建築址	土師器	皿	6.5	3.8	2.0	
6	第3掘立柱建築址	土師器	皿	6.0	3.4	1.7	
7	第5柱穴群65	土師器	皿	6.7	3.6	2.0	
8	第2掘立柱建築址	土師器	皿	8.9	4.9	2.6	
9	第3柱穴群48	土師器	皿	8.0	6.1	2.0	
10	濠	土師器	皿	7.7	—	—	
11	H—C—7	土師器	皿	10.0	—	—	
12	第3掘立柱建築址	土師器	皿	9.3	5.4	2.6	
13	濠	土師器	皿	—	7.0	—	
14	竪穴遺構	土師器	皿	—	4.6	—	
15	第5柱穴群1	青磁	碗	—	5.4	—	
16	第5柱穴群28＋45	青磁	碗	15.3	—	—	
17	第5柱穴群80	瀬戸系	天目茶碗	12.4	—	—	
18	第2掘立柱建築址	瀬戸系	天目茶碗	8.4	—	—	
19	第4柱穴群31	内耳	鍋	—	—	—	
20	竪穴遺構	内耳	鍋	—	—	—	

第3表　土器計測表

第３節　遺物小括

１　平安時代の遺物について

今回の調査で出土した平安時代の土器は、土師器坏、甕、須恵器甕、灰釉陶器である。

土師器坏形土器は、内面が黒色処理の施されるいわゆる黒色土器で、底部は回転糸切りの後無調整のものが主体的である。この他に若干の底部および底部周辺を手持ちヘラ削りされる例が存在する。なお、内面は丁寧なヘラ磨きが行なわれるのが一般的である。

須恵器は甕形土器のみで、供膳形態が全く認められないことがひとつの特徴となっている。

灰釉陶器は、美濃窯（東濃）産で、それぞれ光ケ丘１期、大原２期に属するものと判明している。[①] 飯山地方で灰釉陶器の出土は少ないだけに極めて貴重な資料である。

さて、以上の資料はすべて第１号住居址の出土であり、１セットとして理解されよう。黒色土器の編年については、すでに触れたことがあるが、[②] 10、11世紀代とすることに異論はないであろう。灰釉陶器で、東濃産の光ケ丘１期、大原２期は、それぞれ猿投窯Ｋ―90号窯式およびＯ―53号窯式に対応され、[③] 絶対年代は、Ｋ―90号窯式が10世紀前半、Ｏ―53号窯式が10世紀後半であるとされている。したがって、黒色土器と灰釉陶器との年代は編年的に矛盾せず、第１号竪穴住居址出土遺物を10世紀後半万至若干の伝世を考慮しても11世紀前半に位置づけて良いであろう。

ただ、須恵器に供膳形態が認められない点は、たまたま出土しなかったとも考えられるが、消滅したとすればさらに新しくなる可能性も考えられる。

２　珠洲系陶器の編年的位置について

珠洲焼は、石川県珠洲郡市を中心として製作された須恵器系の中世陶器である。器種構成は甕・壺・鉢の基本３種を中心とする組成であり、本遺跡でも少数ながら３種検出されている。

珠洲系陶器[④]の編年については吉岡康暢氏等を中心として12世紀～16世紀を、Ⅰ期～Ⅶ期の７期に細分、編年されている。本稿ではそれに従って３種それぞれの編年について触れることにする。

甕　細片２点のみであるが、口縁形態がら観察すると、第33図１は玉縁状に口縁を肥厚する例は大畠窯[⑤]に類例があり、第Ⅳ期14世紀代に位置ずけられるであろう。２はくの字状に屈折させた口縁で、頸部よりやや下からタタキはじめる手法で法住寺３号窯の特徴を備えている。14世紀代。

壺　形態を窺える資料は２点のみである。第33図には口縁がゆるやかに外反しつつ立ち上がる形態をとり、口縁端をやや肥厚させる手法は馬緤窯の特徴である。Ⅲ期13世紀後半であろう。第34図１は、直立ぎみに立ち上がる口縁で前者より新しい様相を呈しており、第Ⅳ期14世紀代の大畠窯に位置づけられる。

片口鉢　全形を窺える資料の検出はなかったが、御し目及び口縁形態等により触れることとする。片口鉢でもっとも古い形態を示す例は写真図版14―36である。口縁端部を外削ぎにしっかりと面をとったもので、御し目は波状文となるようである。13世紀代であろう。その他、口縁内面端に櫛歯波状文をめぐらせる第35図８は、比較的新しい様相を呈しており、口縁端がやや円頭状を呈する手法は西方寺１・２号窯に類例を求められ、15世紀代に位置づけられよう。また、内面の御し目が密な例が多いが、これらは明らかに後出的所産でやはり14世紀代以降に位置ずけられるであろう。

以上、簡単に各珠洲系陶器資料について触れてきた、編年的には第Ⅲ期～第Ⅴ期で、13世紀後半～15世紀代に位置づけられることが理解された。編年に際して比較した珠洲窯については、「珠洲焼」、「珠洲系陶器」との問題や、中世における生産流通経済等の問題があって一概に同一視し、比較検討することは難しい。事実、東北日本海域において珠洲焼の流通は名立・寺泊などの沈船遺跡によって、珠洲窯から海運によりもたらされた事が確認されている反面、珠洲窯が4世紀間で18基しか確認されていないこと。さらに、東北地方を中心として珠洲系窯址が発見されていることを考え併せると、時期的な流通経済の変動や珠洲窯址そのものの盛衰も加わり、単純に産地推定することのできない要素を含んでいる。

いずれにしても、長野県内における珠洲系陶器の分布[⑥]は宮下健司氏が鋭意集成されておられるが、本遺跡出土例と併せて今後流通経路等の問題を究明していきたいと考えている。

註

① 本遺跡出土灰釉陶器については、斎藤孝正氏、池本正明氏・野澤則幸氏に御教示をいただいたが、誤りがあれば筆者の責任である。

② 内面が黒色処理された坏形土器については、飯山市北原遺跡調査報告書（1980）において若干触れている。

③ 楢崎彰一・斎藤孝正（1983）「愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅲ）」愛知県教育委員会

④ 本遺跡出土珠洲系陶器については、吉岡康暢氏、四柳嘉章氏にそれぞれ実見していただき御教示をいただいたが、誤りがあれば筆者の責任である。

⑤ 本文で引用した珠洲古窯については、吉岡康暢・平田天秋（1976）「珠洲古窯跡」珠洲市史所有を参考としている。

⑥ 長野県内における珠洲系陶器の分布は、主に千曲川沿岸に限られ、上田市塩田城・豊野町鷲寺・須坂市井上城・中野市建応寺・同市安源寺・飯山市堀越A・同市静間神社遺跡等より出土している。

第Ⅴ章　総　　括

奥信濃地域は、昭和59年の冬は稀にみる豪雪に見舞われ、交通が途絶するなど住民生活に多大な被害をもたらした。雪に慣れた住民達も毎日空を見上げては青息吐息の状態であった。例年雪の多い奥信濃地方の中にあっても温井台地は一段と積雪量が多い場所である。「踏むな電線、落ちるな屋根へ」の表現が文字どおりピッタリくるほど大雪であった。

従って、測量をはじめた5月下旬になって発掘予定地域の雪がようやく消えたのである。しかし、周囲の山々や日陰には依然として雪が厚く残されていたのである。発掘調査に着手した6月2日にはまだ山桜がそこかしこに素朴な美を競い合っていた。

さて、長者清水遺跡は地元の研究者であった北条耕作氏によって遺物採集がなされ、故栗岩英治氏が注目された遺跡であった。しかしながら当時にあっては、須恵器、土師器の出土する遺物として取り扱われていたのである。

今回の調査を通じて私たちは、いくつかの新しい知見を加えることができた。まず、発見された平安時代の住居址から出土した灰釉陶器についてである。奥信濃の灰釉陶器の北限は、従来飯山市太田大坪がその北限とされていたが、新しく得た今回の資料によって北限がさらに北へ延長されることになった。また、出土した灰釉陶器が東濃産であることが判明し、年代もほぼ10世紀に位置づけられることが判明している。このことは歴史的環境の項で記したように、温井台地が平安時代に開発が進行したことを示すと同時に、灰釉陶器がこの地にもたらさせたことはやはりそれなりの歴史的な背景がそこに示されていたと考えざるを得ないのである。即ち、常岩の牧

との関連の中でかかる陶器が搬入されたと考えるのはあまりにも単純な推察に過ぎるであろうか。勿論このことについては、今後充分資料の集積とより精細な分析と史料の探求をより積み重ねなければならない。

次に珠洲陶器についてである。

従来この種の陶器は簡単に須恵器、あるいは須恵器系として処理されてきたものである。これに対し、焼成その他から珠洲系としてではないかとの意見を提出する人もなかった訳ではない。例えばかつて松沢芳宏氏は従来須恵器として簡単に取り扱ってきた該種の陶器は、珠洲系陶器ではないのかと疑問を私たちに示したことがあった。

長野県内において、該種の陶器が珠洲焼であろうと資料紹介を最初にされたのは、私達の知る限りでは岡川勇夫氏であった。氏は雑誌「長野」に2度にわたって「千曲川沿岸地方に於ける珠洲焼の分布」と題して該種の陶器を紹介されると同時にその分布について論及されている。

私達もこの種の陶器が出土するや珠洲系陶器であるとの認識を当初からもち、その流入経路と長野県内における分布に著しい興味と関心を抱いたのである。そこで、出土した珠洲系陶器の実態をより究めるためには本場のものを見ることが何よりも必要であると考え、何としても能登半島へ出かける必要性を痛感したのである。このような私たちの考えは意外に早く実現することとなった。長野県史刊行会の桐原健、宮下健司両氏の献身的な努力によって、12月初旬桐原・宮下両氏及び望月・高橋の4名は2泊3日の行程で、能登半島の珠洲市を訪れることができたのである。この研修旅行で私達は、吉岡康暢、四柳嘉章、中野錬次郎3氏等から詳細に珠洲焼の説明をうけることができたのである。同時に、本遺跡出土の珠洲系陶器は小括の項でも触れているように13世紀代、14世紀代、15世紀代の3世紀代にまたがるものであることが判明したのである。ただ本報告書で「珠洲焼」とせず「珠洲系陶器」として取り扱ったのは、器形、製作技法は珠洲焼に認められるものであるけれども、胎土等が「珠洲焼」そのものではないとの吉岡氏の指摘に基づいている。

本報告書で、珠洲系陶器について深入しなかった大きな要因は、出土した珠洲系陶器が真正の珠洲焼でないとすれば、一帯この種の陶器はどこで焼かれたものであるかとの疑問、ならびに果たしてかかる珠洲系陶器が県内にどの程度分布しているのか、現状では速断でき得ないとの考えに基づいている。出土した珠洲系陶器が珠洲窯で焼かれたものでないとすれば、現段階で判明している該種陶器の分布からみて、恐らく新潟県のどこかにその窯址が存在するものと考えてよいであろうか。今の所その所在は不明であり、今後追求してゆく必要があると考えたからに他ならない。従って、今後県内に分布する珠洲系陶器についての資料集積と、新潟県内に分布する珠洲系陶器の分布について追求する中で改めてこの命題にせまりたいと念願している。

さて、出土した珠洲系陶器が3世紀にまたがっているとしたが、この3時期は温井地方にとって歴史的にみて大きな変動の時期にあたっていたとみてよいと思われる。即ち、13世紀代は常岩の牧との関連、更に14世紀代は常岩氏の没落、そして15世紀は泉氏一族が、この地に勢力をもった時期であった。恐らく今調査で出土した珠洲系陶器は、温井に居を構えた小領主層及至はそれに関連する人々によって輸入されたものと考えて良いのではなかろうか。そして、その輸入経路は関田峠越えであろうか、それともはたまた千曲川を遡上したものであろうか。これについても今後の問題であろう。

その他濠をめぐらした館址跡と思われるものや宋銭・明銭等の出土あるいは建物址、土壙等触れるべき問題が多々存在するが、ここでは単に以上の遺物が出土したことを述べるにとどめておきたい。

終りに、本報告書を作成するにあたり、種々と御教示頂いた吉岡康暢、四柳嘉章、中野錬次郎、池本正明、斎藤孝正、仲野泰裕、平出紀雄、野沢則幸の諸氏ならびに県史刊行会の桐原健、宮下健司両氏に対して厚く御礼申し上げたい。また、発掘調査に御協力いただいた地元の作業員の皆さん、圃場整備実行委員会、温井地区公民館、

折りに触れて励ましを頂いた地元の樋口義松氏等に対しても深甚なる謝意を表すものである。

参考文献

池本正明　1984　「美濃窯における編年的研究」　瀬戸市歴史民族資料館研究紀要（III）

石沢寅二　1976　「苗場山麓地域国営総合農地開発事業区域内遺跡調査報告書」　津南町教育委員会

岡川勇夫　1976　「千曲川沿岸に於ける珠洲焼の分布」　長野第66号

岡川勇夫　1980　「千曲川沿岸に於ける珠洲焼の分布」　長野第94号

金井汲次　1980　「建応寺跡第二次発掘調査」　高井50号

金井正三他　1980「井上氏城跡」　須坂市教育委員会

桐原健・川上元　1977　「塩田城跡」　上田市教育委員会

斎藤孝正　1982　「猿投窯における灰釉陶の展開」　月刊考古ジャーナルNo.211

高島忠平・橋本正・舟崎久雄　1974　「富山県埋蔵文化財調査報告書III」　富山県教育委員会

高橋桂・大原正義他　1977　「遺跡分布調査報告Ｉ」　長野県飯山北高等学校地歴部ＯＢ会

高橋桂・望月静雄　1980　「北原遺跡調査報告書」　飯山市教育委員会

高橋桂他　1980　「鍛冶田」　飯山市教育委員会

田中昭二　1982　「美濃窯の灰釉陶器と緑釉陶器」　月刊ジャーナルNo.211

楢崎彰一・斎藤孝正　1983　「猿投窯編年の再検討について」　愛知県陶磁資料館研究紀要２

楢崎彰一・斎藤孝正　1983　「愛知県古窯跡群分布調査報告（III）」　愛知県教育委員会

樋口昇一・小林秀夫　1982　「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書　茅野市その５－昭和52、53年度」

宮坂虎次・鵜飼幸雄・守矢昌文　1983　「高部遺跡」　茅野市教育委員会

吉岡康暢・平田天秋　1976　「珠洲古窯跡」　珠洲市史所有

吉岡康暢　1979　「北海道の中世陶器」　日本海文化第６号

吉岡康暢　1981　「北東日本海域における中世陶磁の流通」　月刊文化財８

吉岡康暢　1981　「珠洲陶器・刻画壺について」　考古学雑誌第67巻第２号

吉岡康暢　1981　「中世陶器の生産と流通（二）」　考古学研究28－２

吉岡康暢　1982　「北陸・東北の中世陶器をめぐる問題」　庄内考古学18号

吉岡康暢　1982　「珠洲系陶器における加飾法の展開と特質」　東洋陶磁第８号

吉岡康暢　1983　「珠洲系陶器の暦年代基準資料」　北陸の考古学

四柳嘉章他　1981　「西川島Ⅱ」　穴水町教育委員会

下水内郡誌

岡山村史

外様村史

野沢温泉村史

太田村史

信濃史料１巻上・下

歴史の道調査報告（Ｘ）飯山道　県教委

長野県の地名　　平凡社

第II編　水の沢遺跡

第Ⅰ章　遺跡の概要

第1節　遺跡の位置

遺跡の位置する通称岡山上段地区は、千曲川との比高差200mを測り高原状の台地となっている。北側は鍋倉山(1288.8m)等の信越を分かつ関田山脈が横走し、幾つかの峠道が存在している。また、この山脈より流出する河川出川水系は台地を侵食し、狭谷となり台地を分断している。このうち温井台地は最も南側に位置し、北側を出川により、垂直深度120mの狭谷により独立した台地となっている。温井台地は概略2段となり上段に現集落が営まれ、下段は水田地帯が拡がる。微地形的には低湿地、小丘が複雑に入り込んでいる。

水の沢遺跡は、温井台地の最も北側に位置し、低湿地を臨む小丘に立地する。

第2節　研究史

当地方において考古学研究開始の端初は故栗岩英治氏、および氏の指導を受け当地方の遺跡を丹念に踏査された故北条耕作氏であった。水の沢、オリハンザ両遺跡の発見も故北条耕作氏によるものである。氏は「下水内郡北部石器時代分布私見」(昭和14年)において、オリハンザ遺跡発見も契機について触れられている。当時は、まだ縄文時代に先行する文化の存在については注意されなかったため、注目を浴びる事はなかった。

昭和20年代の後半に至り、信濃史料編纂事業が開始されたが、来飯した樋口昇一氏等により縄文文化以前の石器である事が確認されたのである。その後北条耕作氏が亡くなられて以来、地形改変が加えられたこともあり明確に両遺跡の地点について知る人はなく、昭和40年代に開始された飯山北高等学校地歴部の調査でも明確にすることはできなかった。

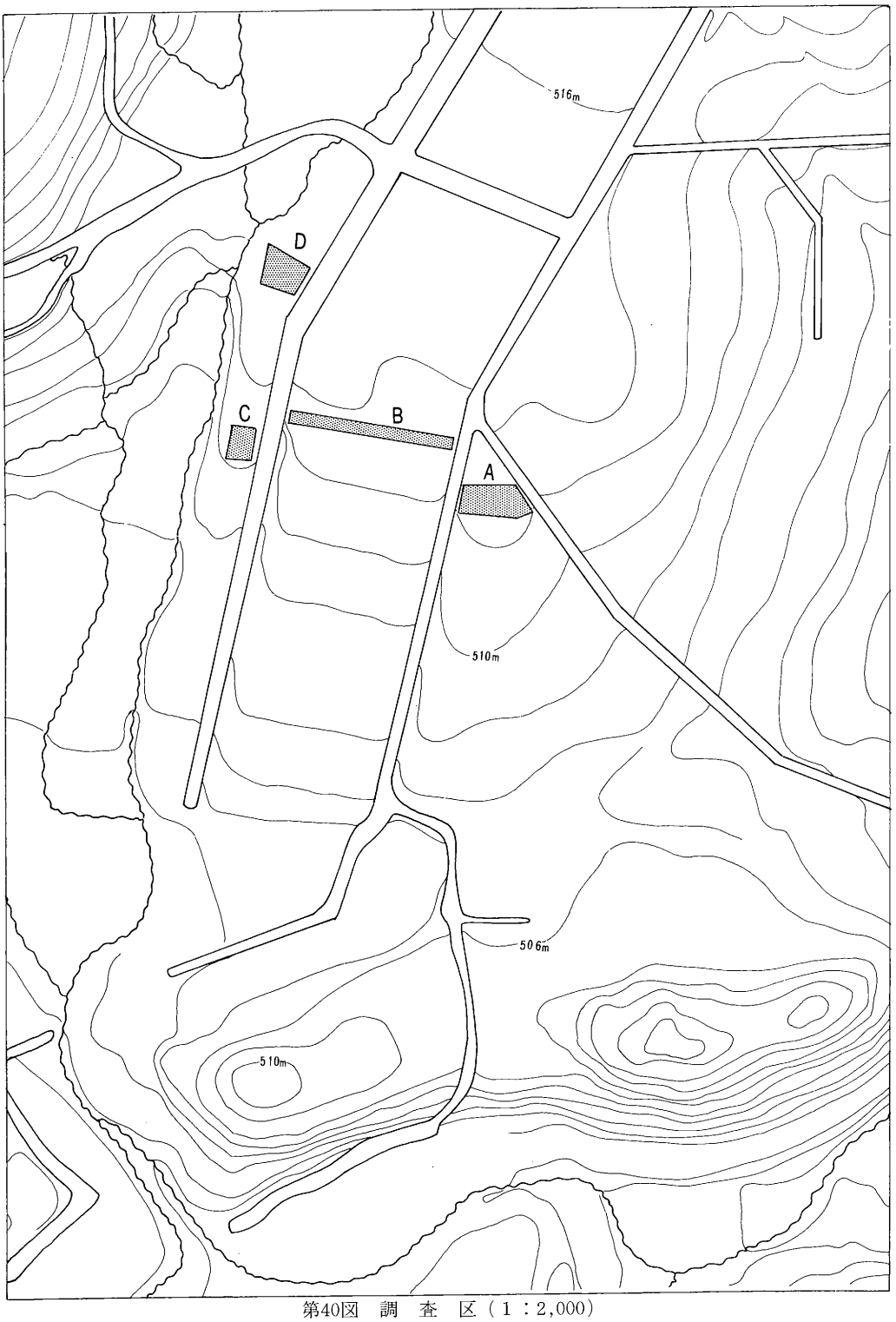
第Ⅱ章　調　　査

第1節　経過

調査は長者清水遺跡と併せて行なった。これは、県営圃場整備事業の施行が年度内に終了するためには、11月の降雪時までに完了しなければならず、また梅雨時までに土砂の移動を行ないたいとの要請のため、止む得ない方法であった。

第Ⅰ章でも触れたように、開田工事が既に行なわれた地区であり、地形的にもかなり地形改変が行なわれた事が窺えた。しかし、開田地区北東側は畑地であり、緩傾斜面が拡がっており地形改変は認められなかった。

発掘調査は、地形改変のなされていないA地区を中心に設定しようと試みたが、圃場整備工区の北境であり、さらに丹念な表面調査によっても遺物の採集は全く認められなかった。地元の人の話でも、開田地帯が遺跡だっ



第40図　調　査　区（1：2,000）

たという事から、A地区までは遺跡は拡がらないものと推定し得た。

開田地区は、昭和40年代初期に工事が行なわれたとのことで、2反程度の広い水田となり、斜面を削平あるいは埋土して階段状に整地されている。この地区をB地区としてトレンチを入れた。

B地区のさらに西側は、底地へ向う斜面となり、この部分も開田工事により、地形改変が行なわれている。この地区をC、D地区として調査した。

1)　A地区　(第41図)

約250m²を調査した。表土約20cmと薄く、黄褐色土層がその下に続く。この黄褐色土層の供給源は不明であるが、火山灰土層と断定して差し支えあるまい。

調査区内において、数箇所の落ち込みを確認したが、いずれもロームブロックが混在する覆土で、現代の攪乱層であろう。出土遺物はない。なおB－3区に検出されたコンクリートは、昭和30年代に使用された埋設水路の上部である。

2)　B地区

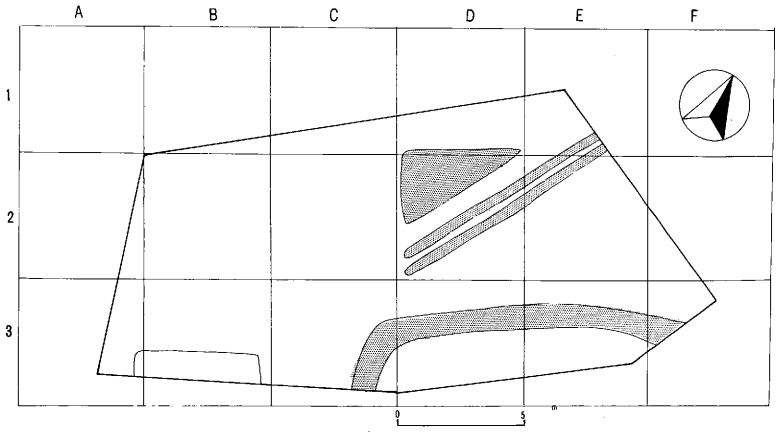
開田地区であり、約330m²を調査した。調査地区は旧地形面が残っていると思われる畦畔付近に幅7m、全長47mのトレンチを設定した。耕作土は約15cm、その下層に約30cmの黄褐色土があり、当初プライマリーな層と判断したが、その後の下層への調査で、数cm暗褐色土層が認められ、開田工事による盛土とわかった。調査はその下層のプライマリーなローム層まで進めたが、上部が削平され、遺物包含層は既に消失していることが判明した。

なお、C－2区で盛土の黄褐色土層より1点安山岩製のフレイクが検出された（第43図7）

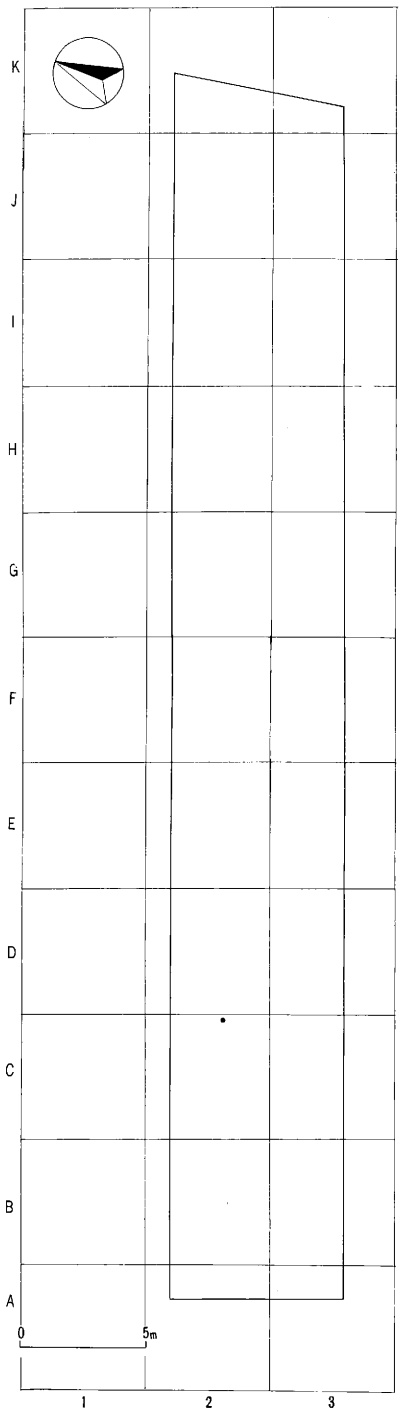
3)　C、D地区

約200m²を調査した。西側の低湿地帯を臨む地点にあり、本微高地の西傾斜面地区である。故北条耕作氏が黒耀石製のポイントを採集された地点と思われ、オリハンザと呼称される遺跡の中心部分であろうと思われる。開田工事により原地形面をほとんど保っていないと思われた。調査でも比較的破壊を受けていないと思われる地区を選定したのであるが、約1mを掘り下げたが、混礫の黄褐色土層であって、工事によって破壊されていた。

以上、約780m²を調査したが、オリハンザ、水の沢両遺跡は既に消滅していることが判明した。しかし僅か1点であるけれども、先土器時代に属すると思われる剝片を検出し得たことは、当地帯に先土器時代遺跡がかつて存在した事を証明する資料となろう。



第41図　A地区（1：300）



第42図　B地区（1：300）

第2節　遺物

調査によって検出された遺物は僅か1点であるが、故北条耕作氏によって採集された遺物があるので併せて紹介したいと思う。なお、信濃史料で紹介されたオリハンザ出土の細石刃および尖頭器は、故北条耕作氏の孫にあたられる現当主北条清澄氏が保管されていたが現在は不明となっており、図化することは出来なかった。

1、安山岩系の石材を使用した、細身の槍先形尖頭器である。現在長13.5cm、幅3.2cmで、最大幅を胴部やや前方にもち柳葉形を呈する。

2、頁岩製のナイフ形石器である。胴中位付近より先端部を欠く。ブランティングは基部周縁に認められるが、形態を大きく変化させるための調整ではない。

3、頁岩製のナイフ形石器である。2同様先端部を欠く。ブランティングは基部を尖頭状に仕上げており、「米ケ森型」ナイフ形石器と呼称されるものに類似する。

4、黒耀石製の正面に一部表皮面を残し、右側縁に正面側より剥離痕が認められるなど、目的的な剥片とは思われないが、先端部に小剥離痕様な痕跡が認められ、あるいはドリル的な機能を持たせたものかもしれない。

5、頁岩製の剥片である。胴部付近に両側縁ともに調整痕が認められる。

6、黒耀石製でサイド・スクレイパーであろうか。

7、調査によって検出されたもので、安山岩製である。幅広の剥片で、正面には第1次剥離面と180°反対方向からの剥離面が認められ、両設打面を有する石核より石刃技法により作出されたものであろう。

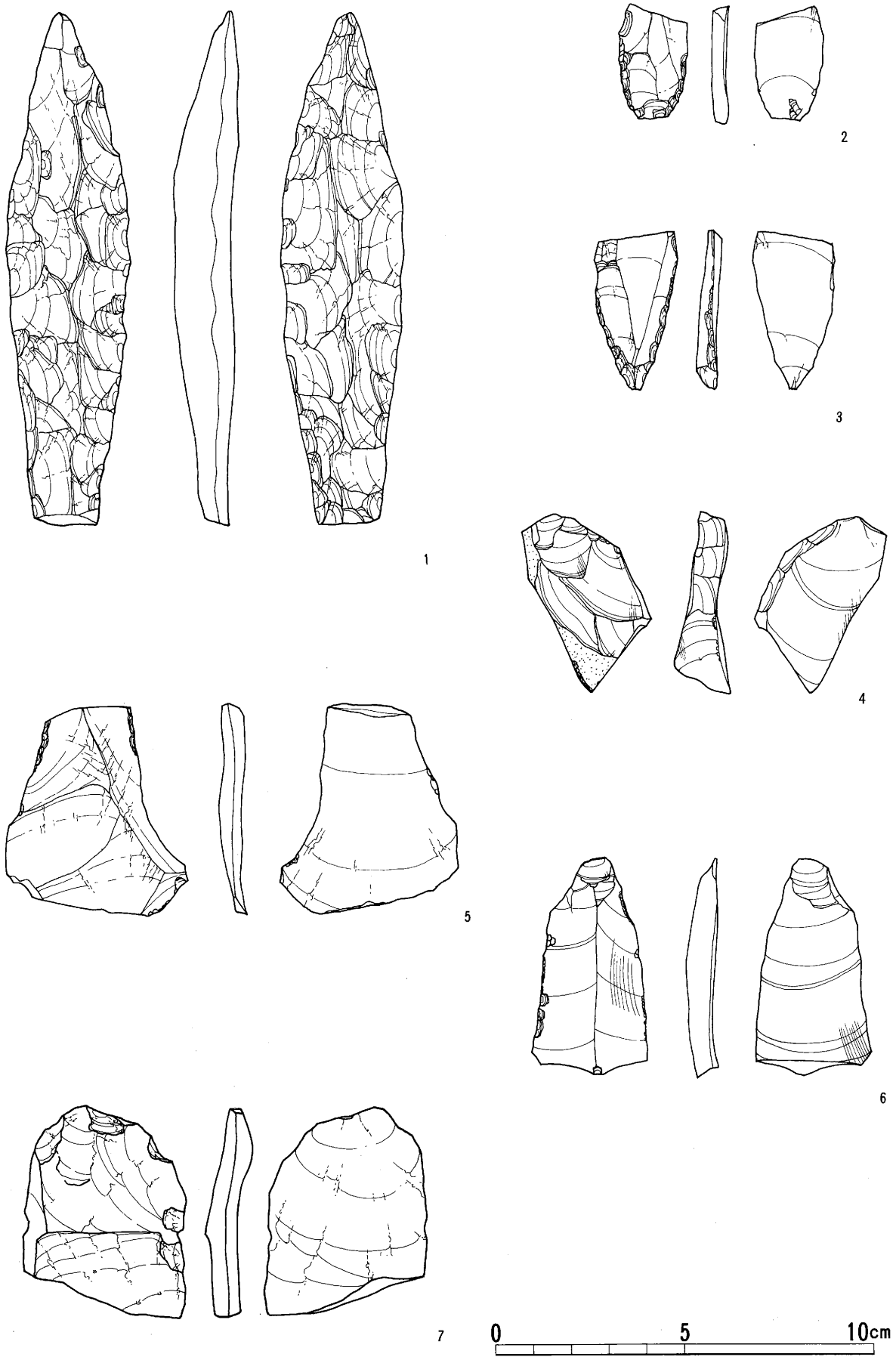
以上、水の沢およびオリハンザ出土資料について説明を加えてきた。両遺跡の区別については、故北条耕作氏の文献を調査してもはっきりしない。ただ今までの知見によれば、オリハンザは細石刃、尖頭器を主体とするようであり、水の沢はナイフ形石器を組成とするようである。両遺跡の時間はさ程ないとしても、同一時期の同一遺跡としては考えられない。したがって、資料のみから考慮すれば1はオリハンザ、2、3が水の沢遺跡出土品であろう。

第Ⅲ章　まとめ

学史的にも著名な「オリハンザ」遺跡および水の沢遺跡は、その大部分が既に昭和40年代の開田工事により破壊されていた。今回の圃場整備事業により完全に消滅したのであるが、昭和10年代より故北条耕作氏により調査されてきた両遺跡の全貌を明らかにし得なかったことは誠に残念である。

水の沢・オリハンザ両遺跡は、標高500m付近の高原状台地に位置し、先土器時代遺跡の宝庫野辺山高原にも似た立地を示している。飯山地方に於いて、既に30箇所近い先土器時代遺跡が存在するが、その多くは千曲川流域の河岸段丘、丘陵上に立地しており、本遺跡のように千曲川とは離れた高原上に立地する例はむしろ例外的ですらある。ただ、これは時期的な変遷も考慮する必要があろう。ナイフ形石器盛行以後の居住様式は、それ以前と比較して変化するようである。

さて、調査であるが、梅雨時からうっとおしい初夏にかけて、さらに長者清水遺跡の調査と並行して実施するという最悪の作業状況であった。特に作業員の皆さんには、何も出土しないローム層を延々と発掘する事は苦痛



第43図　水の沢・オリハンザ遺跡遺物

ですらあったと思う。この御苦労に対して深甚なる感謝を申し述べたい。

また、本報告書作成にあたっては、発掘に引き続き高沢秀徳、常盤井智行両氏に御協力をいただき、図版作成等については青木真澄氏の手をわずらわせた。厚く御礼申し上げる次第である。

参考文献

飯山北高等学校地歴部ＯＢ会　1976　「遺跡分布調査報告」

岡山公民館　1961　「岡山村誌」　飯山公民館岡山支館

信濃史料刊行会　1956　「信濃史料」第１巻上・下

北条耕作　　1937　「下水内郡北部石器時代分布私見」

北条耕作　　1954　「考古学上から見たわが郷土」　岡山村公民館

飯山市埋蔵文化財調査報告書

第１集	飯山市田草川尻遺跡発掘調査報告書	1973、２	（品切）
第２集	宮中遺跡―分布確認調査報告書―	1979、２	
第３集	北原遺跡　（写真集）	1979、２	
第４集	北原遺跡発掘調査報告書	1980、６	（品切）
第５集	鍛冶田	1980、６	（品切）
第６集	北原遺跡Ⅲ（分布確認調査報告書）	1981、２	
第７集	太子林、関沢遺跡	1981、３	（品切）
第８集	田草川尻遺跡Ⅱ	1978、２	
第９集	田草川尻遺跡Ⅲ	1984、１	
第10集	北町遺跡	1984、２	

飯山市埋蔵文化財調査報告　第11集

長者清水・水の沢遺跡

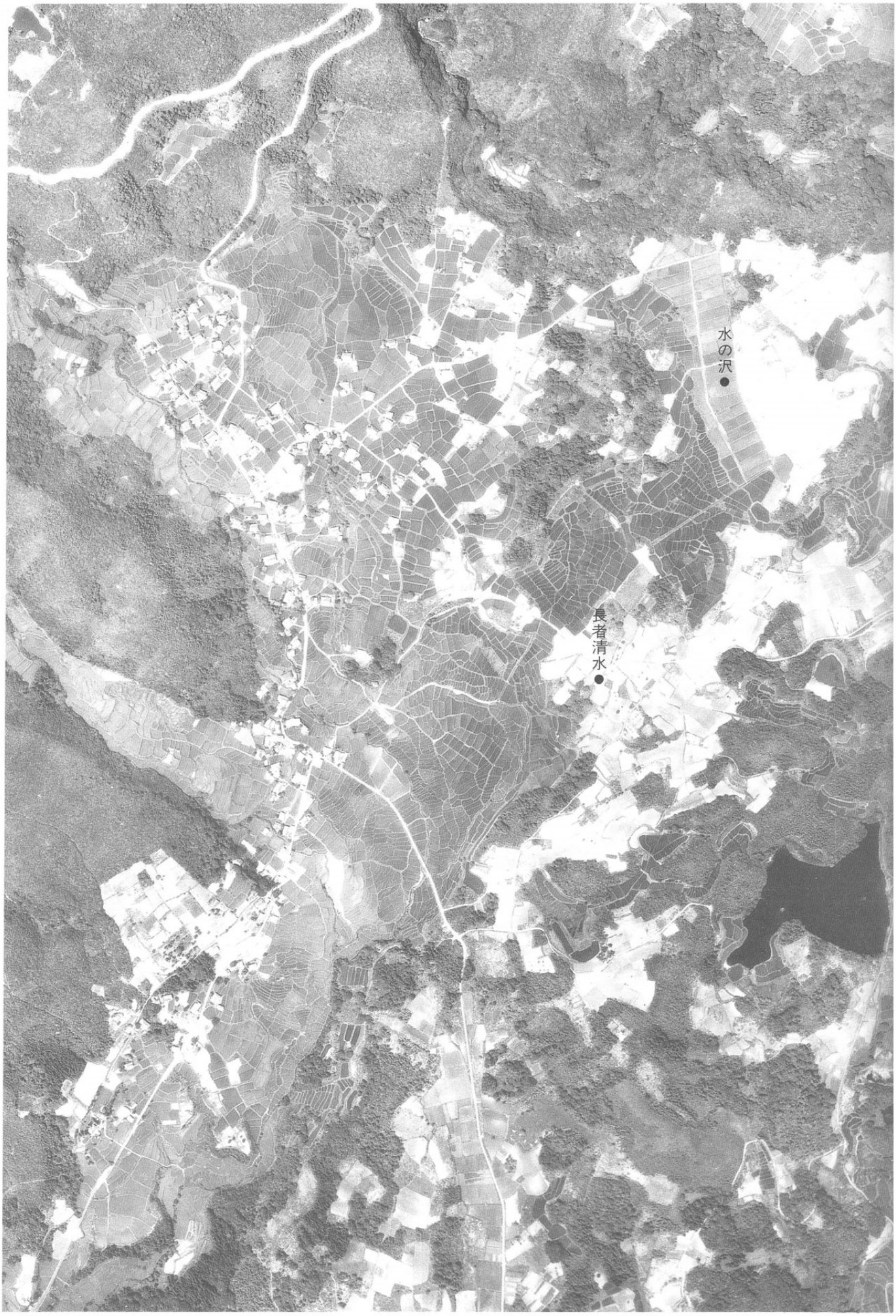
昭和60年３月10日印刷
昭和60年３月15日発行

編　集　飯山市教育委員会
発　行　長野県飯山市大字飯山1110～1

印　刷　ほおずき書籍株式会社

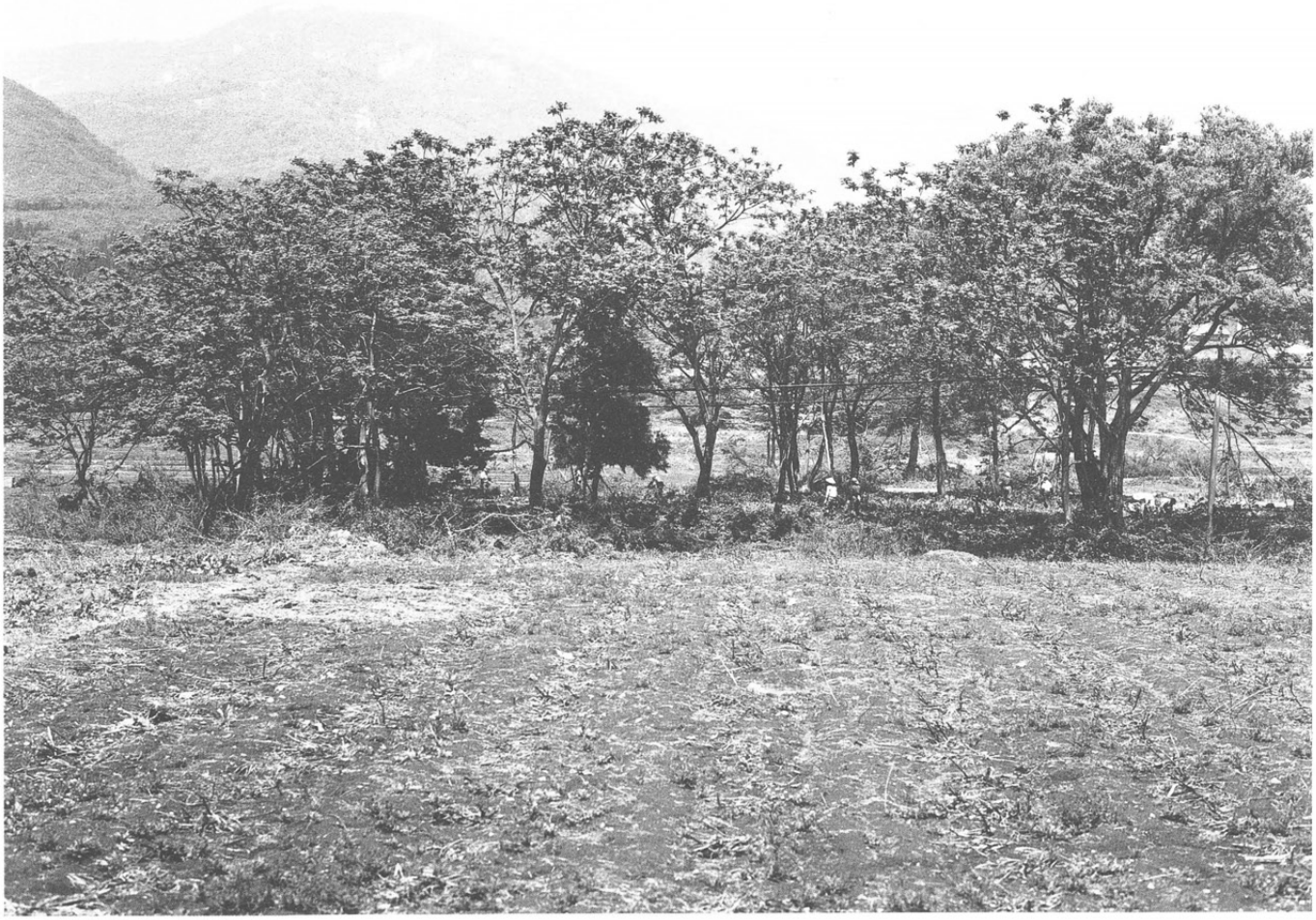
写真　図　　版

長者清水遺跡　図版１～図版16
水の沢遺跡　図版17～図版19



1　長者清水・水の沢遺跡周辺地域航空写真

2　遺跡近景（北より）



3　調査区近景（東南より）

4　遺跡より関田峠を臨む

5　調査風景

6　第１号住居址

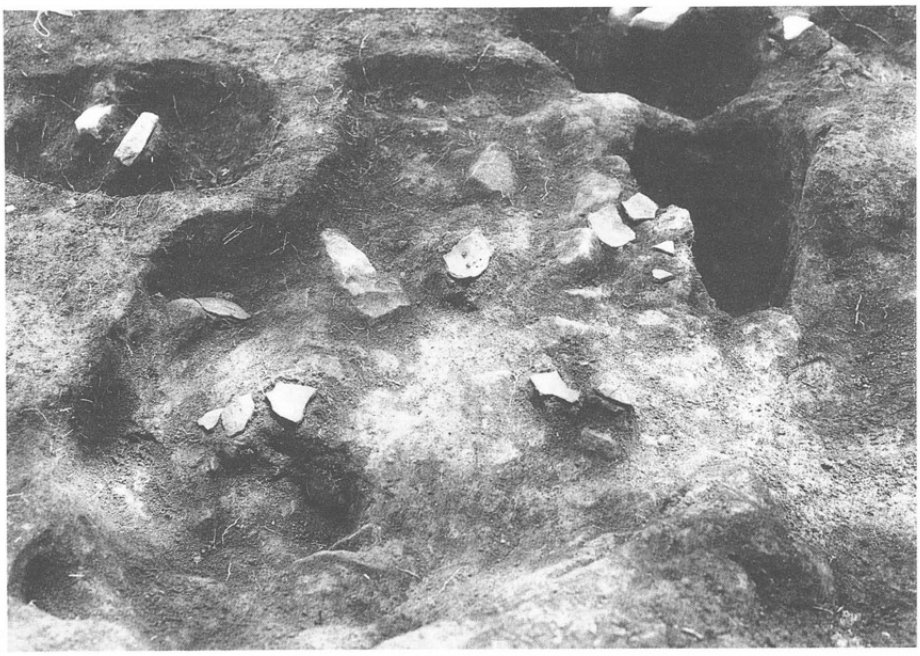
7　第１号住居址

8　第2号土坑

9　第7号土坑

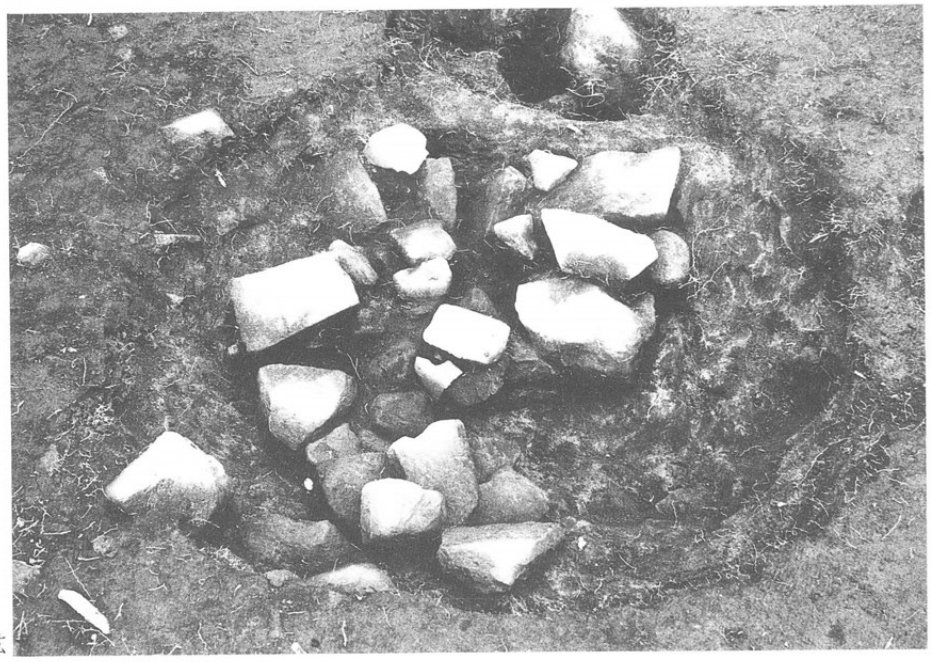
10　第8号土坑

11　第9号土坑

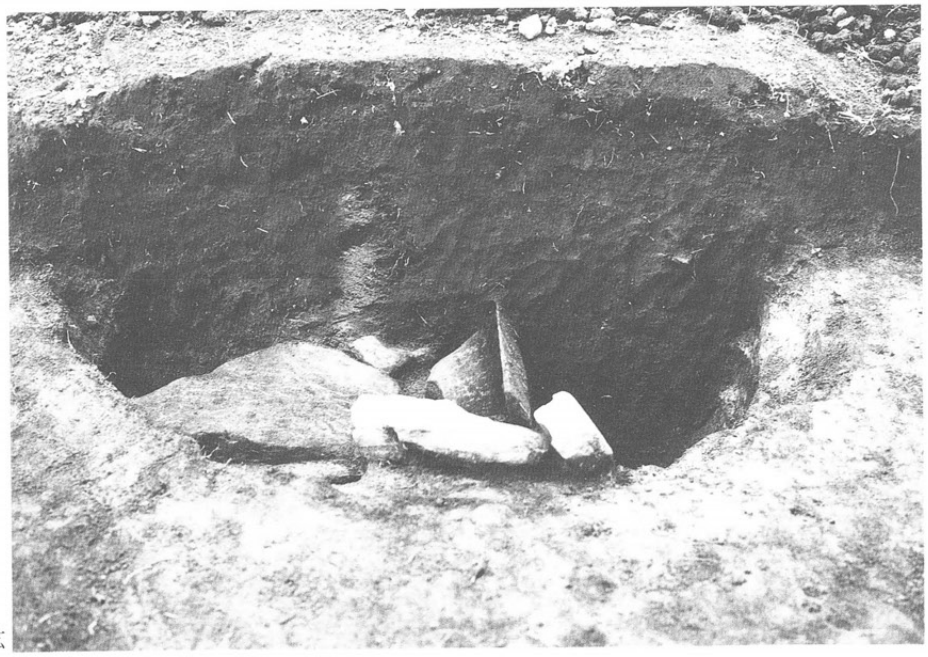


12　第10号土坑

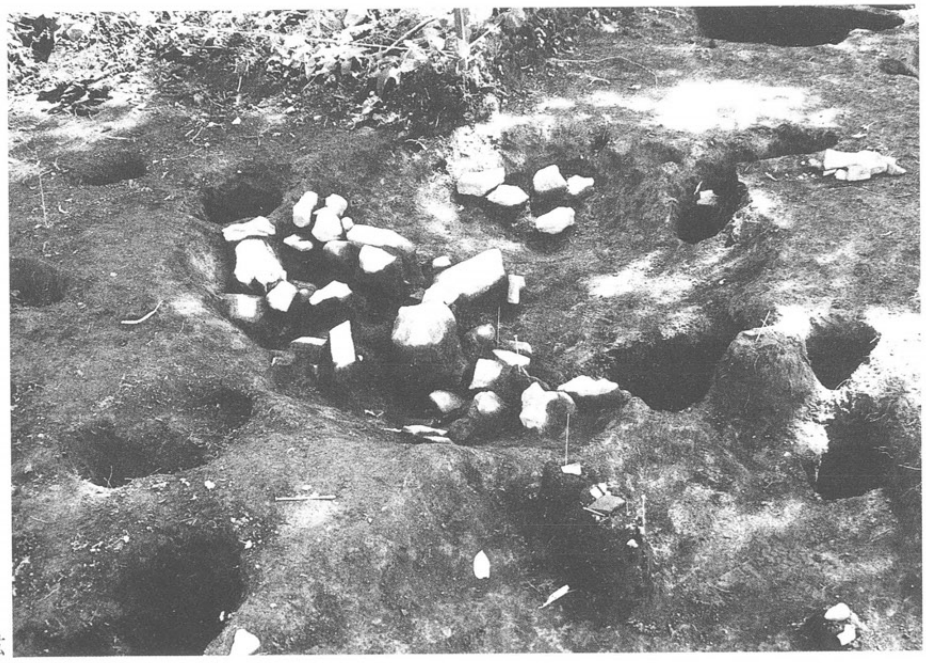
13　第14号土坑



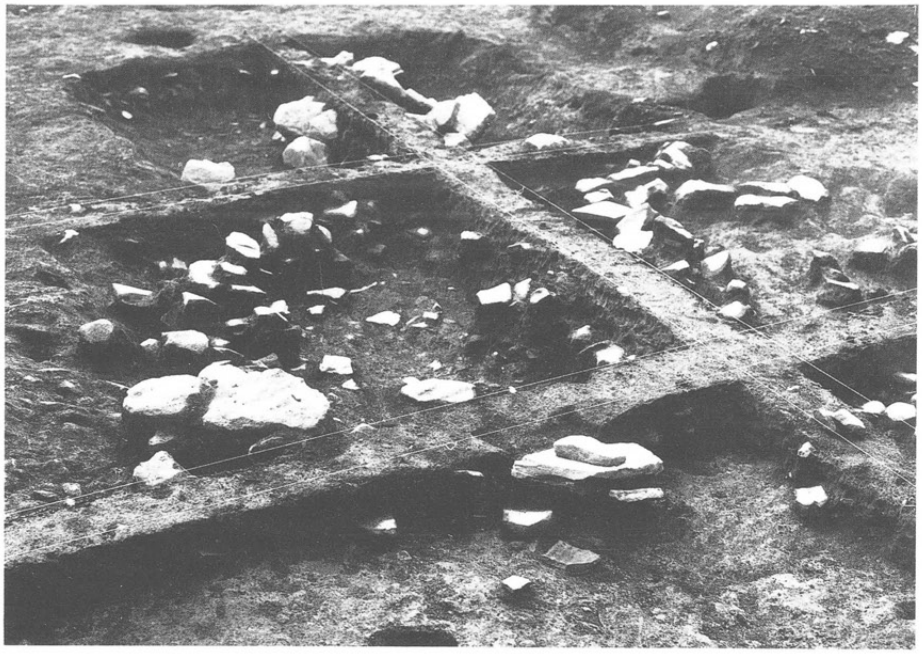
14　第16号土坑



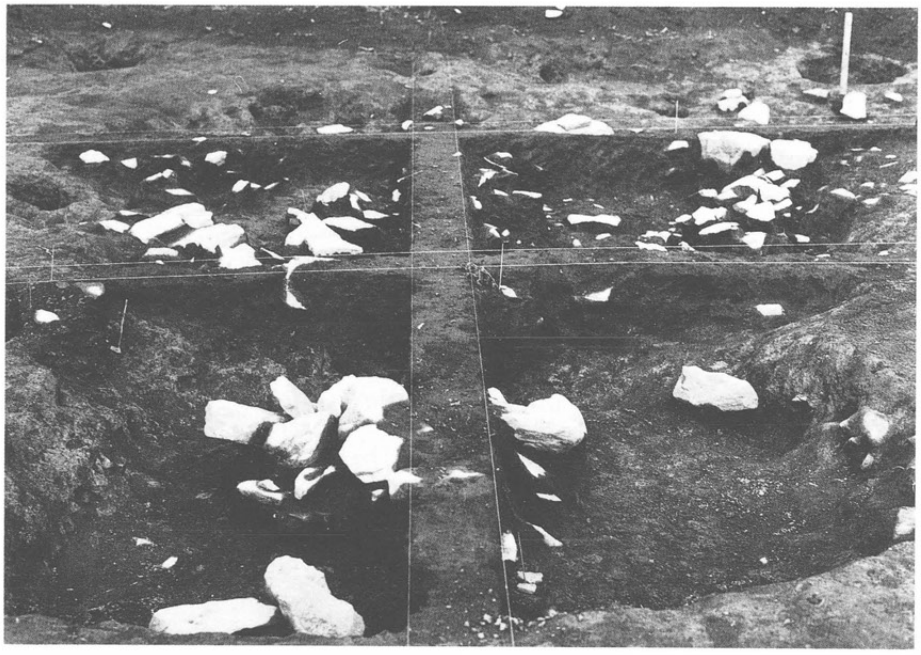
15　第18号土坑



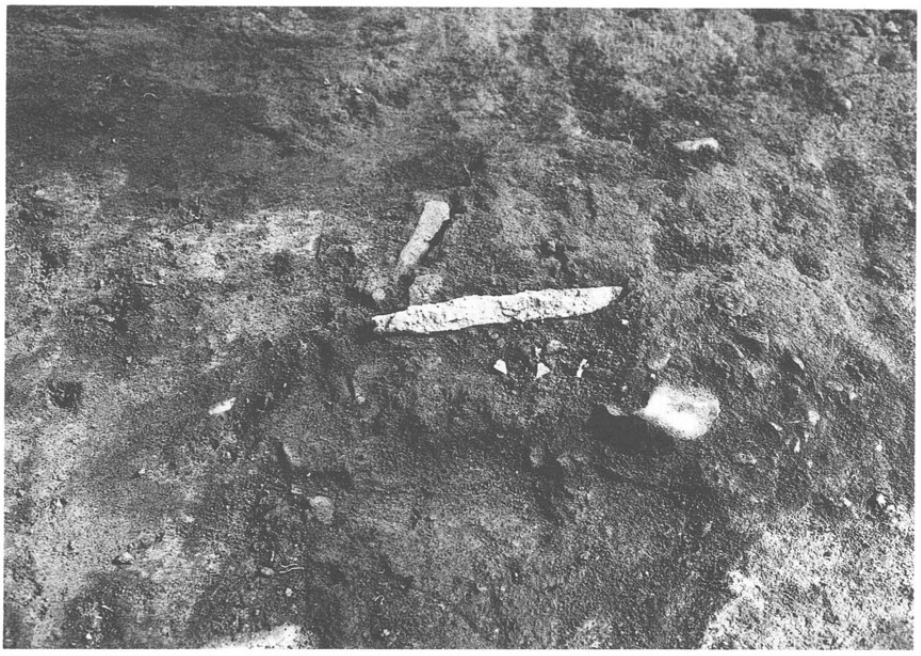
16　第21号土坑



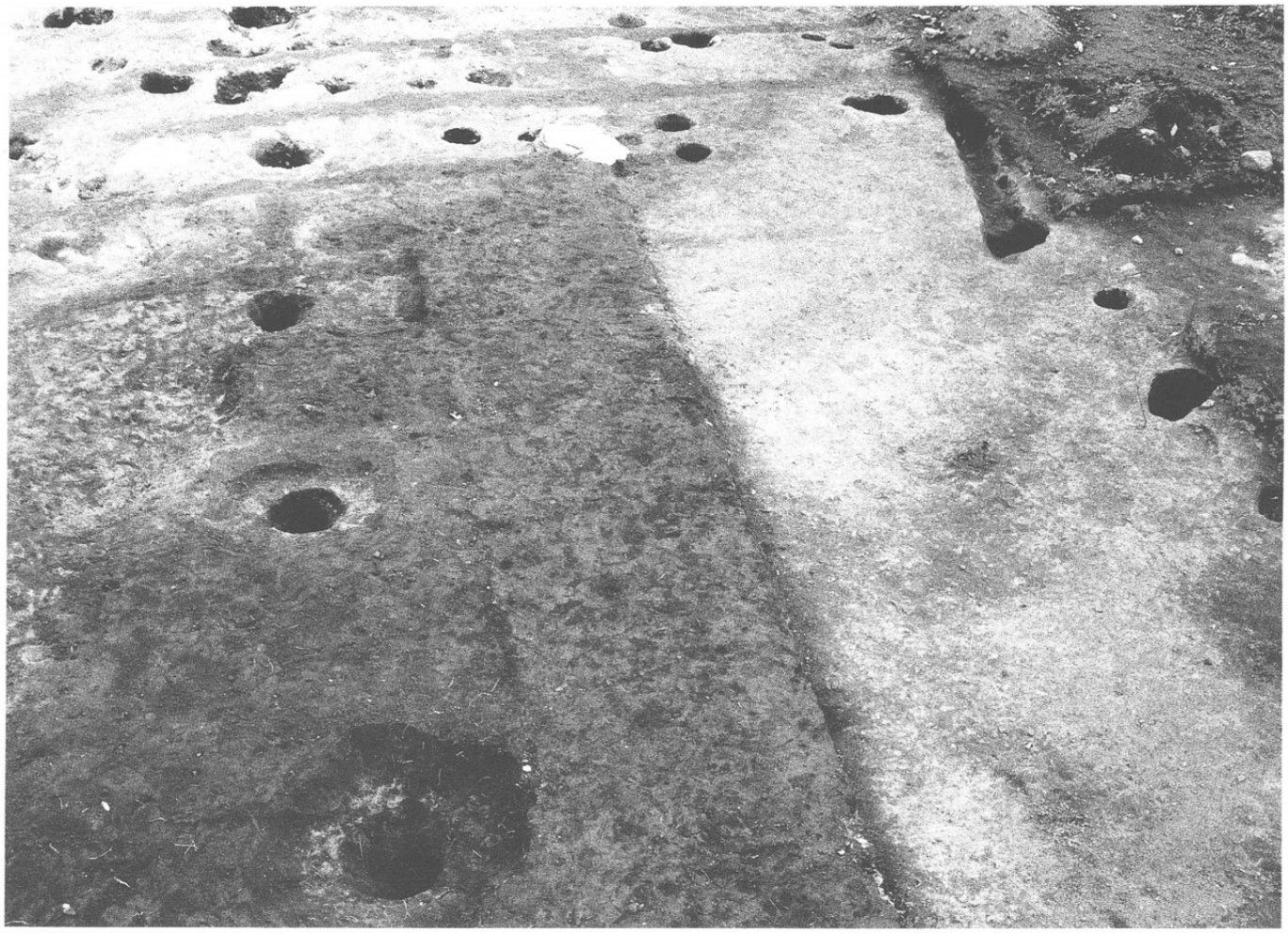
17　竪穴遺跡



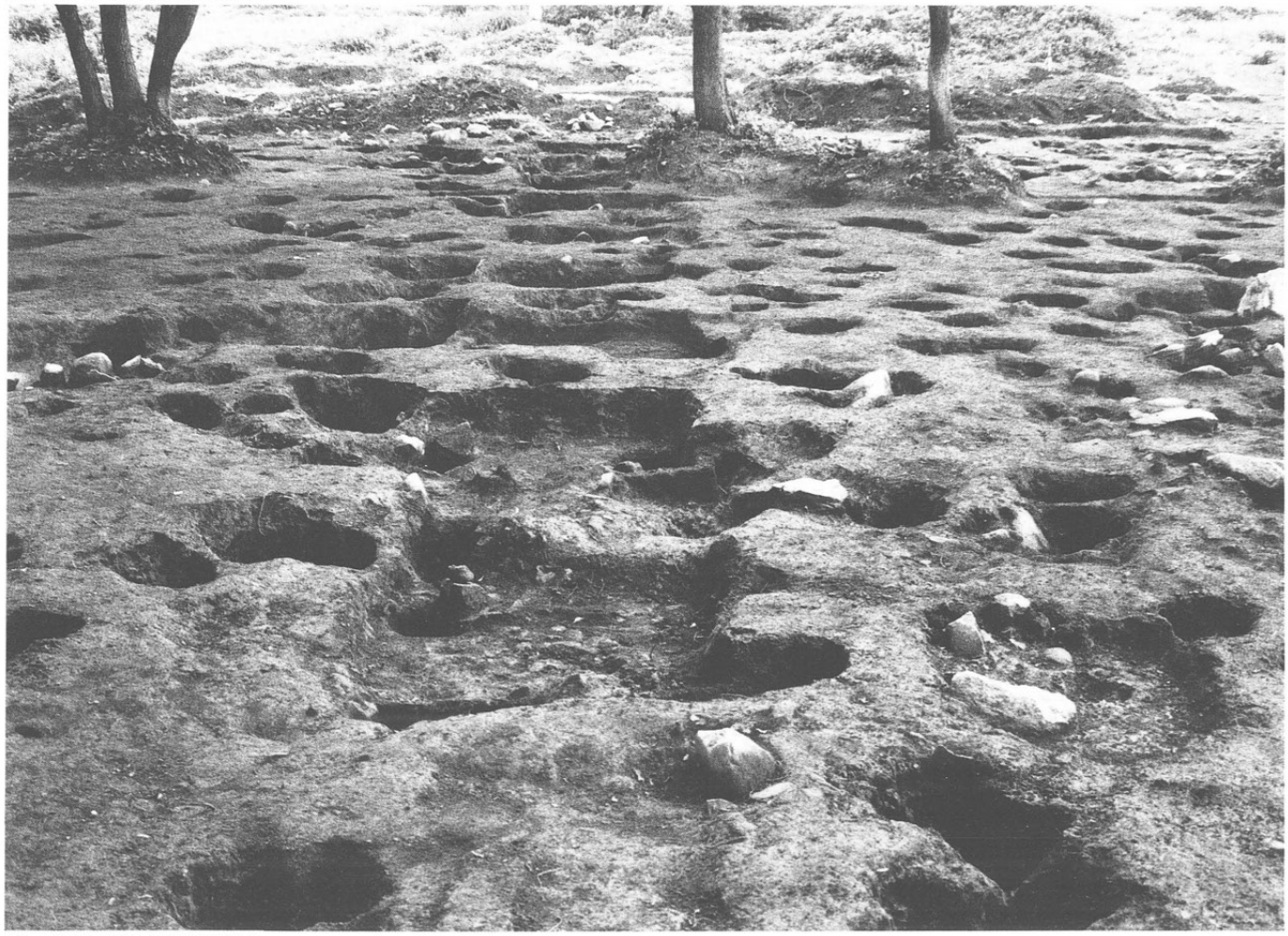
18　竪穴遺構



19　竪穴遺構刃子出土状態



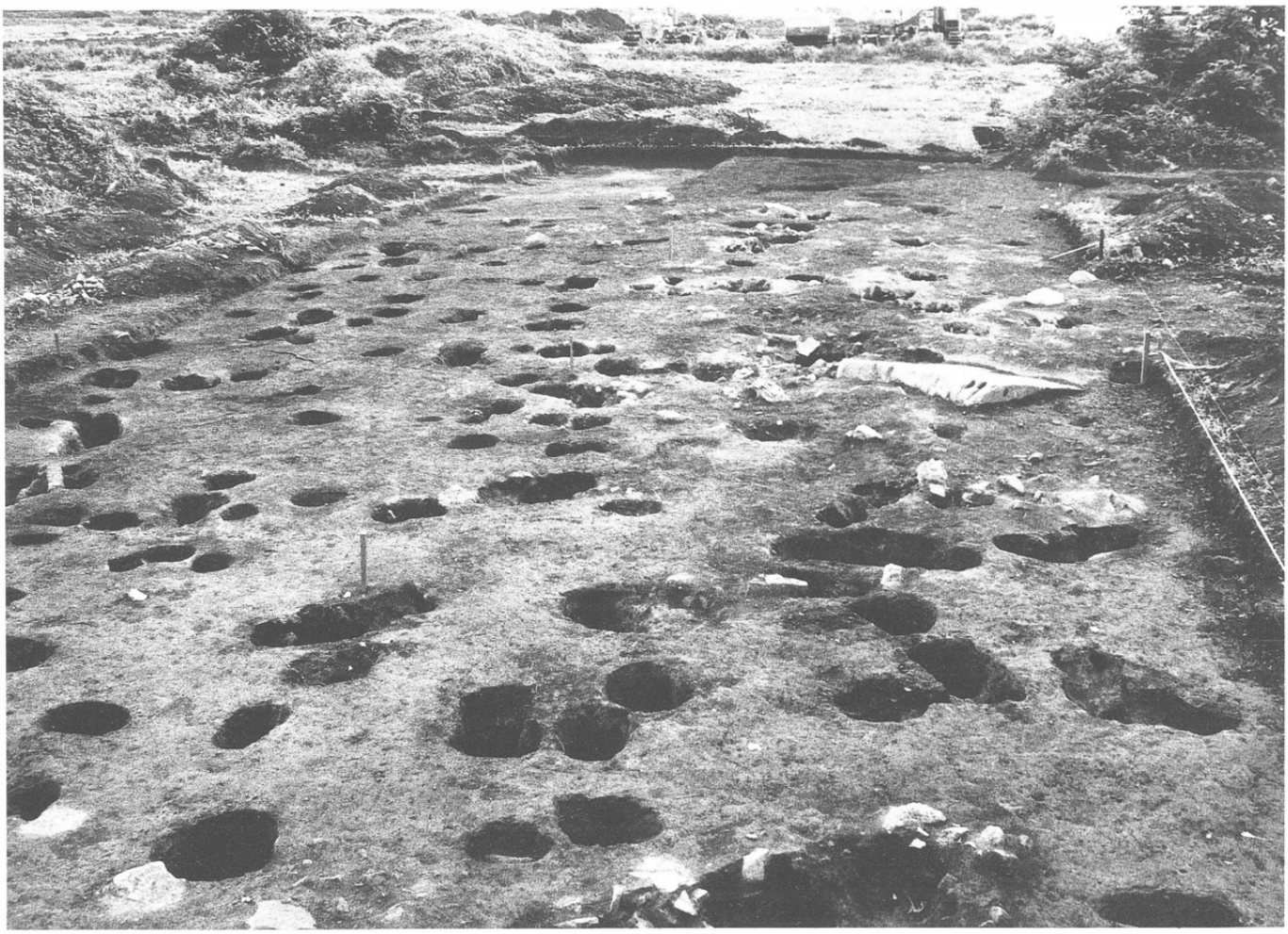
20　第2号掘立柱建築址



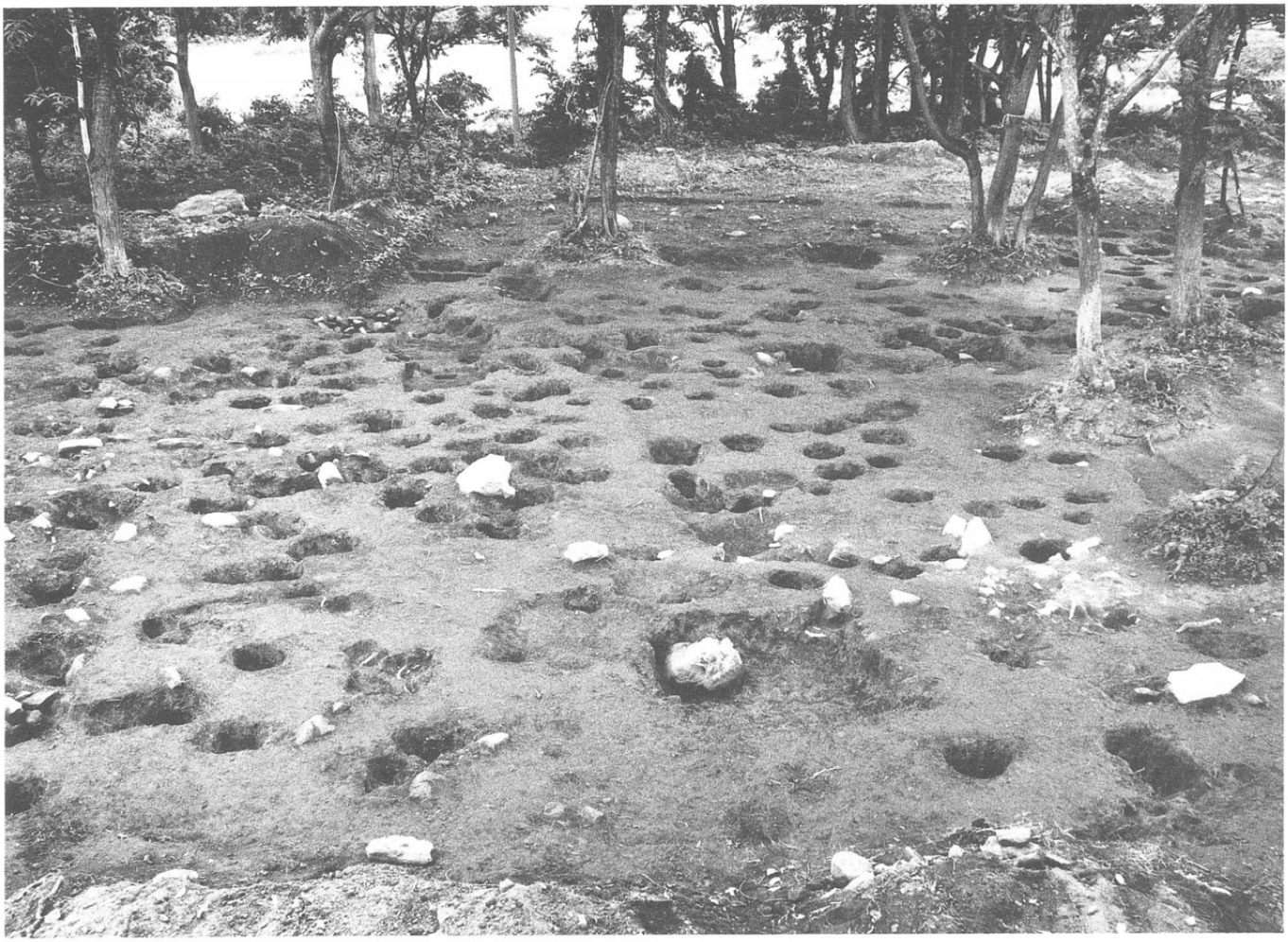
21　第3号掘立柱建築址

22　濠址北コーナー

23　H—II区南側斜面



24　H—I区遺構



25　H—II区遺構

26　土師器坏

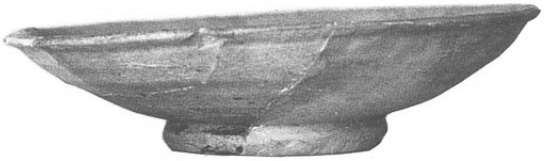
27　土師器坏

28　土師器坏

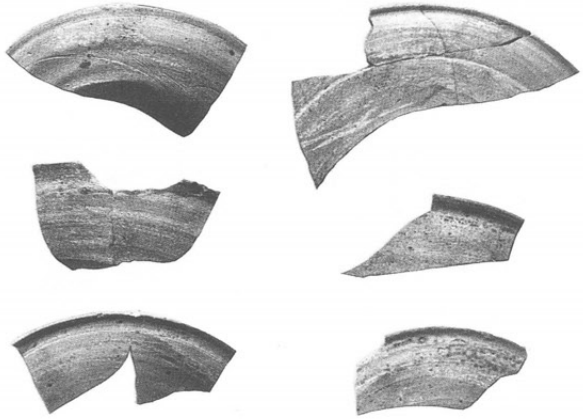
29　土師器坏

30　墨書土器

31　墨書土器



32　灰釉陶器



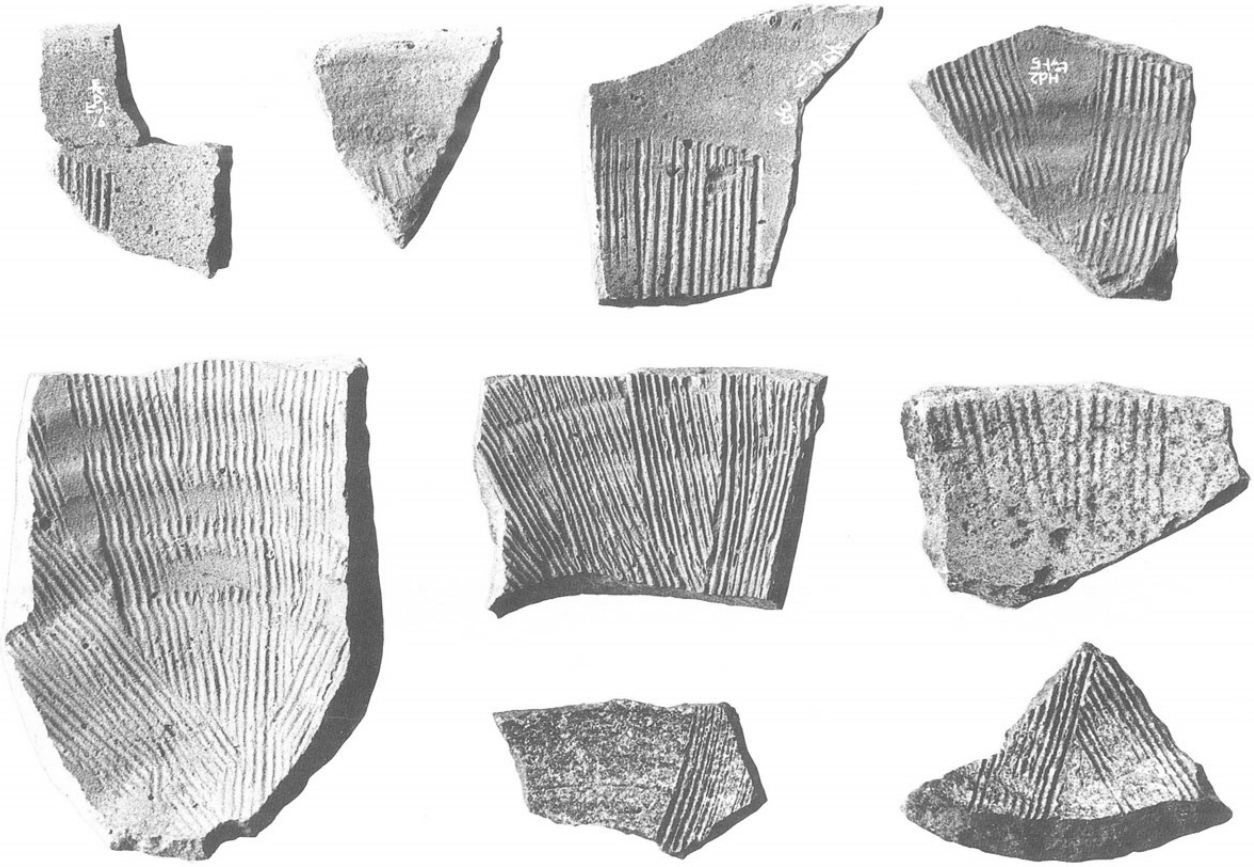
33　灰釉陶器

34　中世土師器皿

35　珠洲系陶器壺

36　珠洲系陶器壺

37　珠洲系陶器片口鉢

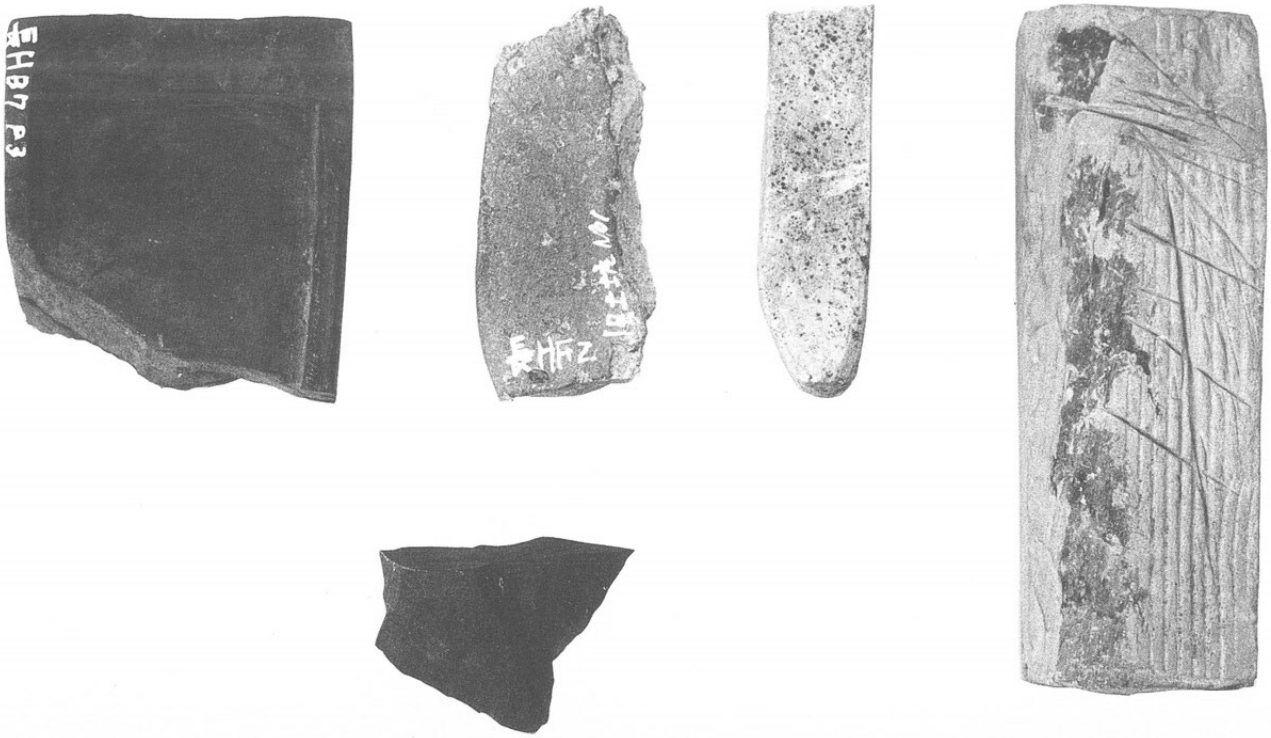


38　珠洲系陶器片口鉢

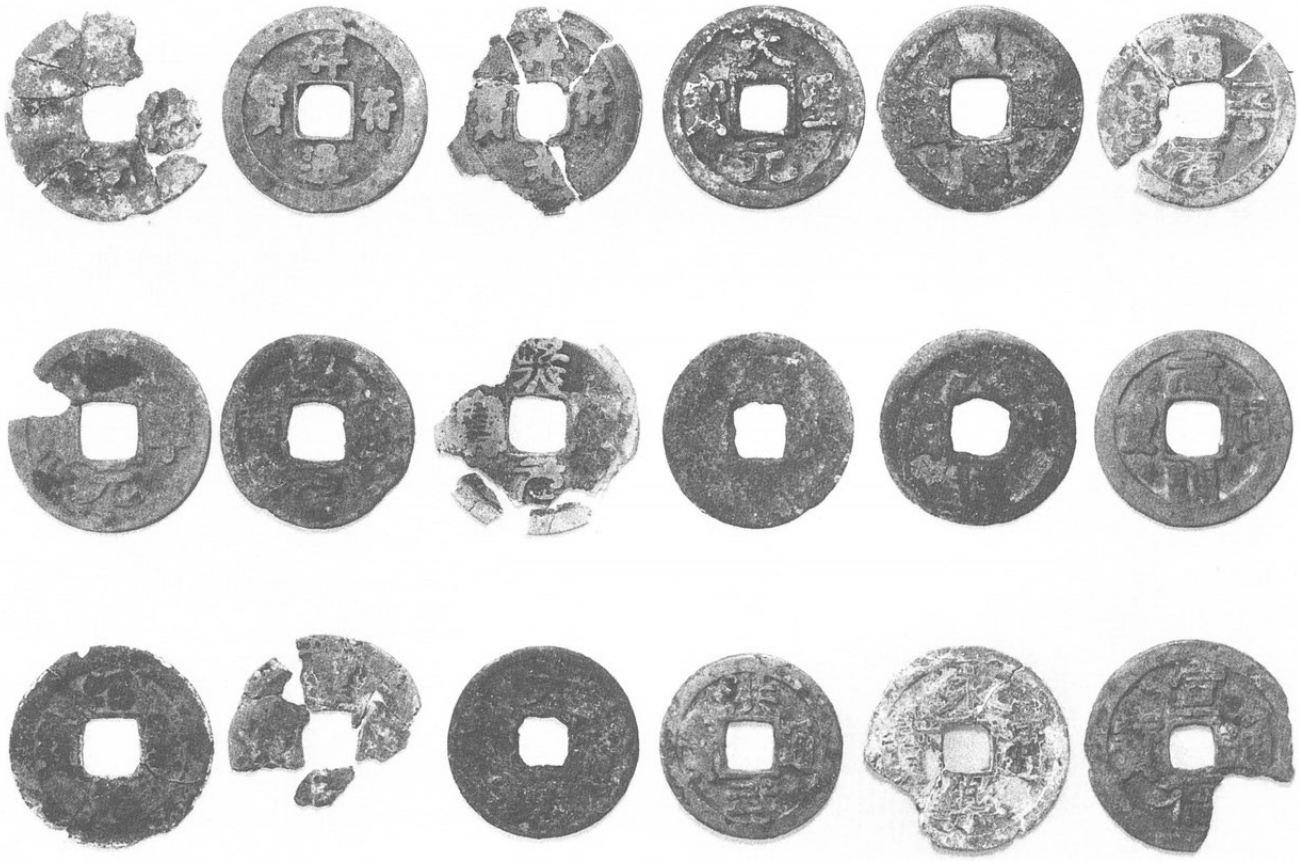
39　陶磁器

40　鉄製容器

41　鉄製品



42　石製品

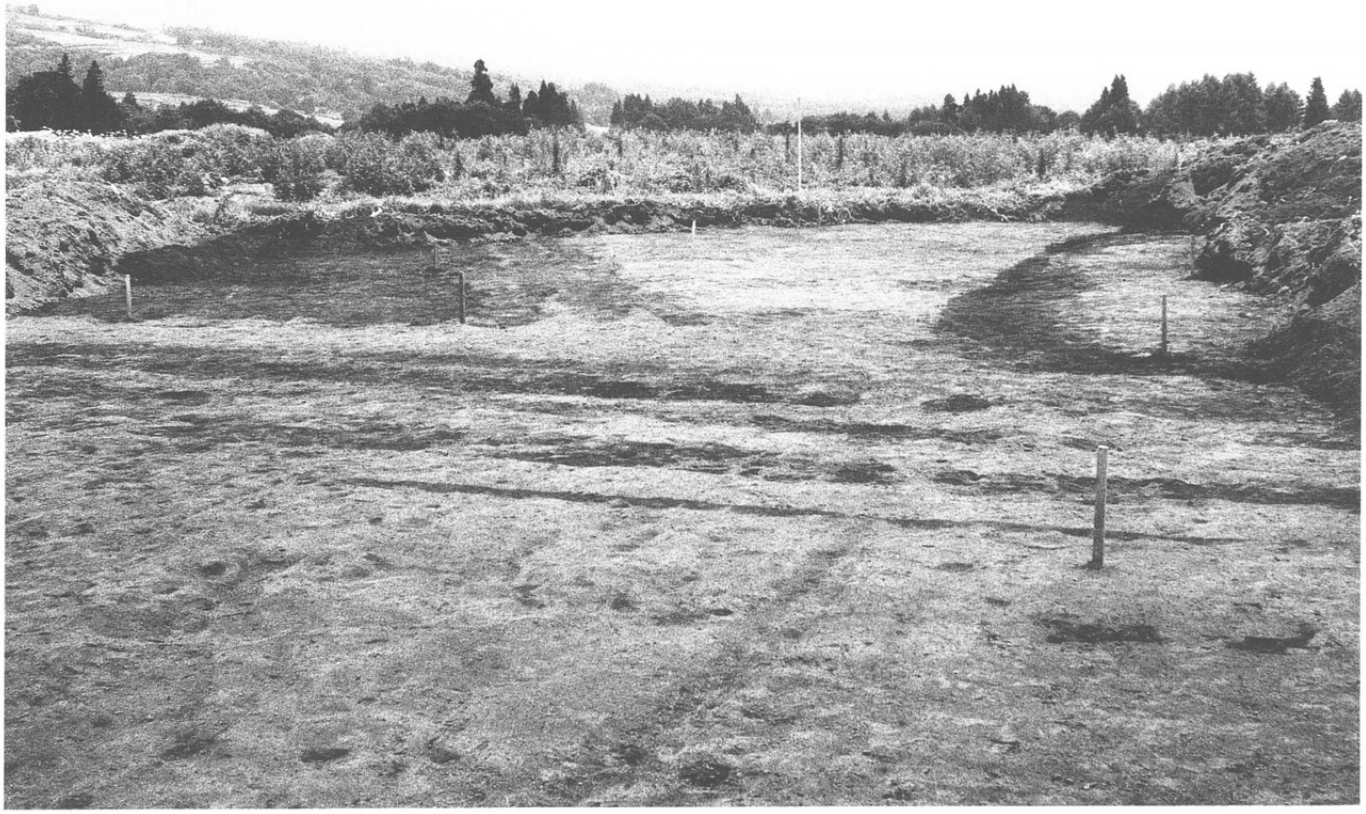


43　銭貨

44　水の沢遺跡近景

45　調査区近景

46　A地区調査風景



47　A地区

48　B地区調査風景

49　B地区

飯山市公民館

受付番　号
60.4.2
飯山市